

暁の大地
5

成
尾

陽

目次

八、綾の聖地 ◆ 7

出会いの地 ◆ 7

初心不可忘 ◆ 17

天満宮と天神さん ◆ 26

綾部へ ◆ 34

天眼通 ◆ 43

遷 柩 ◆ 53

松香館と玉水 ◆ 63

いざ、天国巡覧へ ◆ 73

元屋敷 ◆ 82

金明水 ◆ 91

みろく殿 ◆ 99

金竜海 ◆ 108

塩釜おひねり	◇	117
木の花庵	◇	127
天国に貯金	◇	136
冠婚葬祭	◇	146
修行修了奉告	◇	156
心の扉	◇	164
脚下照顧	◇	174
前世の記憶	◇	183
情けは人のためならず	◇	193
目に物見られて	◇	202
お土とお松	◇	212
信仰の絶対境	◇	222

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年から二十七年までの機関誌「おほもと」と、平成二十八年以降の「みろくのよ」に連載したもので、登場人物は実在の人物ではありません。

暁の大地 5

八、綾の聖地

出会いの地

「行つてらっしゃい」

みろく会館総合受付の水田春子が、大地たちに明るく声を掛けた。水田は大道場修行前日、大地の修行受け付けをしてくれた女性だった。修行期間中、大地の顔を見ると、気さくに声を掛けてくれ、大地も親しみを覚えていた。

「水田さん、いろいろお世話になりました」

「気を付けてね」

「はい、ありがとうございます」

大地たち修行者一同は、みろく会館ロビーに集合していた。大道場修行の亀岡での全日程が終わり、これから綾部へ向かうのだ。

大道場修行では、四日目、午前中の講座「現代の大本」を受講後、昼食を済ませ午後から、大本のもう一つの聖地である綾部市の「梅松苑」に移動する。つまり、霊国

に相応する亀岡の“天恩郷”での修行を終え、天国に相応する“梅松苑”で、修行の修了を神さまに奉告するのである。

「雨宮君、また来てね」

今回、大地たち修行者の担当をしてくれた坂口満も声を掛けてきた。

「はい、また参拝に来ます」

「明日、修行が終わったら、おじいさんの所へ行くのかな？」

「はい、そのつもりです」

「じゃあ、一緒に歌祭と瑞生大祭に参拝できたらいいんじゃない…、数日後だからね」

「そうですね。それも明日、綾部の梅木家へ行ってから相談してみます」

「そうだね、待っているよ」

「はい、ありがとうございます」

大地が頭を下げた。

「では、そろそろ行きましょうか」

徳島から修行に来ている北原剛が声を掛けた。昨夜の「えら飲ぎの座」（座談会）終了後、大地と丸山誠吉と馬淵光彦は、北原の乗用車に便乗することが、にわかに決まった。

その他の修行者は、ＪＲで移動するため、亀岡駅まで坂口が運転するワゴン車で送ってもらえることになっていた。

「皆さんおそろいのですから、そろそろ出発しましょうか。では、ＪＲ組の方は、表の車にお乗りください」

坂口が案内した。

「では、私たちも…」

北原がワゴン車の後方に止めていた車に向かい、大地たちも続いて乗り込んだ。全員が車に乗ると、坂口がエンジンをかけた。

「お気を付けて」

一列に並んだ水田と数人の道場講師、係員らに見送られ、大地たち一行は、真夏の天恩郷を後にした。

「すみませんねえ、北原さん。よろしくお願いします」

助手席に乗った馬淵がそう言うのと、後部座席の丸山と大地も声をそろえた。

「よろしくお願いします」

「はい、こちらこそ。楽しく綾部まで参りましょう」

ほどなく亀岡駅へ向かったワゴン車と別れ、大地らの車はそのまま直進し、国道九号線を西へ向かった。

「丸山さん、今朝の『現代の大本』の講座の中で、教主さまがエルサレムでのエスペラントによる歌祭を願っておられるというお話がありましたけど、いつ頃あるんですか？」

大地が丸山に訊いた。

「それは私にも分からないけど、平成十七年（二〇〇五）の大本歌祭で、教主さまが『わが願ひエスペラントの歌まつり人類同胞こぞりてエルサレムの野に』とお詠みになったのだから、必ずいつかは開催されるはずだよ。本部としてもいろいろ努力しているそうだけど、なにせ中東の情勢が厳しくなっているので、なかなか難しいんだろうね。私がイスラエルに行った時には、合同礼拝もできたんだけど、その直後から情勢が厳しくなったよね…」

「えっ、丸山さんはイスラエルに行かれたことがあるんですか？」

「あるよ。二〇〇〇年の七月だったけど、イスラエルのテルアビブ市で開催された世界エスペラント大会に参加した時に、『エルサレム平和使節団』が結成されて、百三人の団員の一人として参加したんだよ」

丸山が懐かしそうに言った。

「そんな大勢で行かれたんですか」

「なかなか楽しい旅だったよ。ハイファ市という所のティコティン日本美術館で“日本の夕べ”を開催したり、世界大会の前には、エルサレムのオリーブ山・橄欖山かんらんざんの上にある大学の大講堂で行われた“世界平和祈願祭”に参拝させてもらったんだよ。斎場は祭壇の向うがガラス張りで、エルサレム旧市街が一望できる最高の場所だった。祭典では、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の代表者がそろって玉串捧奠されたし、あの時は感激したな」

「そんなすごいことがあったんですか」

「いや、いい経験をさせてもらったなあ、懐かしいよ。これから行く綾部市とエルサレム市とは、二〇〇〇年の二月に友好都市宣言をしているんで、私もぜひエルサレムでの歌祭には、参拝したいもんだね。もともと体力が許せばだけどね（笑）」

「丸山さんはまだお若いから、大丈夫ですよ」

「そう願いたいね。その時は、雨宮君も一緒に行かないかい？」

「そうですね、なかなか行ける所じゃないので、状況が許せば、参加したいですね」

大地が答えた。

「そうそう、そのイスラエルへ入るためにエジプトを経由して、そこで時間があつたから、ピラミッドを見学したんだけど、あれはスゴイね。ピラミッドは私が想像していた以上に巨大で、よくあれだけのものを作ったもんだと、心底ビックリしたよ」

「あのクフ王のギザのピラミッドですか？」

「そうそう、一つ一つの石が予想以上にデカイ！ あれは一見の価値ありだね」

「そうなんですね。見てみたくなつたなあ」

車は亀岡市千代川町のＪＲ嵯峨野線を越える高架を過ぎ、桂川（大井川）と嵯峨野線の間を併走するように走る国道九号線を進んでいた。左手には田んぼや畑が広がり、その向こうには、小高い山が連なっている。

「そろそろ八木だね」

左隣に座っている丸山が言った。

「もう少しすると右側に川堰ぜきが見えてくると思うけど、その辺りが開祖さまの三女のひささんと若き聖師さま・上田喜三郎青年が初めて出会った場所なんだよ」

「あの『大本の出現』の講座であつた、ひきさんが茶店を開いていた所ですか」

「そう、雨宮君よく覚えてるね。私は先輩から、右手に堰せきが見えたら、反対の左手に川の支流が流れていて、おそらくその近くに茶店を開いておられたんじゃないかと聞いているんだけどね。

ほら、右前に大きな堰せきが見えてきただろう、そして左を見ると……」

「あつ、あれですか」

助手席の馬淵が外を見ながら言った。

「そう、あの辺りに、ひきさんと喜三郎青年が出会つた茶店があつたそうだよ」

丸山が説明する間に、景色は変わり、車は八木町内に入った。

過去の『人類愛善新聞』紙上に、「八木・虎天堰とらてんいね」というコラムがある。丸山は、車中でその内容を分かりやすく説明した。

明治三十一年旧六月王仁師は、穴太の北二里南桑田みなみくわだ、船井郡の境界、大井川の清流をひいた虎天堰とらてんいねの傍そばの小さな茶店で、大本開祖の「筆先」に出合う。「このことわかる者、東から出てくる」筆先を信じ、開祖の三女福島夫妻はこの道端に茶店を出し、師

の出現をまつた。

巖魂^{いづみたま}大本ひらきみづみたま

人類愛善の道をひらけり

八木は二大教祖の最初の出合いの地である。三カ月後、師は綾部行きを決意された。八木町の東北の丘陵からは船井・南桑の大穀倉地帯が一望。南に虎がゆったりと寝た姿の、虎山を拝す。その形はいかにものどかで、ユーモラスだ。この虎の頭のところに大井川の清流がぶちあたる虎天堰^{とらてんいね}がある。この水口は南桑平野をうるおす生命線で、井関は船井の米・木材が集結され、水運をもつて京と直結する、交通の要路であった。茶店はそこにあつた。

『人類愛善新聞』昭和五十七年九月号から

開祖さまと聖師さまがお出会いになるきっかけとなった場所。そう思うと感慨深いものがあるなあ……、と同乗している三人ともが、心の内に感じていた。

「八木に関しては、そのほかにもエピソードがあるんだよ」

「まだあるんですか？」

「その一つは、開祖さまがいかに神さまのご命令に無条件に従われたか、という逸話
なんだけど」

「それはぜひ伺いたいですね」

馬淵が言った。

「ある時、開祖さまに帰神された良の金神が『直よ、外国へ行ってくれ』とおっしゃった。
すると開祖さまは素直にそのお言葉に従われ、五円のお金と一人のお供を連れて、綾
部を出立されたんだそうだ」

「えっ、ただ外国というだけですか？」

大地が驚いた声で言った。

「そうなんだ。外国がどこにあるのかも分からないのに、開祖さまは神命のまにまに
東に向かって進まれた」

「もちろん、徒歩ですよね」

馬淵が言葉を継いだ。

「そうです、歩いてですよ。で、この八木まで来られたら、突然神さまが『もうよい、帰れ』
と…」

「えー、綾部からここまで歩いてきて、もう帰れ…ですか？ 殺生ですねえ」

「神さまは何かの『型』をさせられたんだろうね。『ここは外国と神国との境、神界の立てわけ場所じゃ』との神示が降りたということなんだね」

「……………」

大地は不思議そうな表情で首をひねった。

「ほら、八木という漢字は、八木の『八』を逆さまにして『木』にくっつけると『米』になるだろ。米に国をつけると…」

「米国……あつ、アメリカかあ！」

「で、開祖さまはそのまま綾部に帰られた…、というお話でした」

「んゝ、なかなかできないことですね」

ハンドルを握っていた北原もうなった。

初心不可忘

八木の町中を過ぎ、車中では昨夜の「えら飲ぎの座」の話題になった。

「えら飲ぎの座」とは一般的に聞き慣れない言葉かもしれない。講師を囲み、修行者それぞれが大道場修行を受講するようになったきっかけや修行の感想、信徒であれば入信の経緯や信仰体験談など、思い思いに語り合う、いわゆる座談会である。

一方的に講座を聞くだけでなく、同じ修行者の心の内に耳を傾けることにより、時にはそれが「えら気付き」や「えら学び」につながることもある。あるいは、講座の中で疑問に思ったことや理解できなかったことをあらためて講師に問い、講座の内容をより深めることもできる。

大地自身もその場で、修行に來た経緯や三日間の感想を語ったが、大地には一人の女性の話が印象に残った。

「あの宮崎から来られているかけはし梯さんは、とっても良いお話をされていましたね」
「そうそう、印象的だったなあ」

助手席の馬淵も振り返りながらあいづち相槌を打った。

「信者さんじゃないけど、なんだか、とっても素直な女性でしたね」

「また、かけはし」という名字もいいよね。梯洋子さんでしたね」

運転しながら北原が言った。

「おい、くつくくらいでしようかね？」

「四十二歳って聞いたけどね」

「さすが丸山さん、しつかり情報キャッチしていますね」

「はい、任せなさい」

また丸山のトークの流れになり、しばらく梯の話題で盛り上がった。

昨夜の「飲ぎの座」の講師は、修行前夜の「修行の心得」担当だった竹田^{つた}伝生^おだった。神教殿の講座室で、机を円形に並べ、午後七時から九十分間、竹田が進行役になって、順に話を引き出していった。分割受講の修行者もあり、大地たちのような全日程の受講者と合わせ十人ほどだったので、一人の持ち時間は十分もなかった。丸山が相変わらずちよつとしゃべり過ぎの感があったが、おのずとムードメーカーの役目を果たしていたので、終始和やかな中での座談会となった。

大地たちが印象的だったという梯は、インターネットで大本のことを知って興味を

持ち、*“自分探し”*のために大道場修行を受講したとのことだった。

「とても思い悩むことがあり、何か一つでも*“氣付き”*をいただけたらと、正直、する思いを持ちながら亀岡に来ました。初めてのところで、少なからず不安な気持ちもあったのですが、不思議なことにすぐに溶け込むことができました。

そのきっかけは、二日目の講座前の鎮魂でした。以前お寺で座禅を体験したことがあったのですが、鎮魂の姿勢は初めてでした。ところが、八雲琴の音色を聞いているうちに、自然と涙があふれてきたんです。自分でも、どうしてそうなったのか分かりませんでした。もちろん悲しくて涙が出てきたわけではなく、自然と胸がいっぱいになり：私の魂が喜んでいるのかも：と、自分を客観的に見ているもう一人の自分がいるような、そんな気分でした。

また、万祥殿での朝夕拝で、ピンと張り詰めた神聖な空気の中で、皆さんと奏上する祝詞には心が洗われるようで、とにかく気持ち良くて、不謹慎かもしれませんが、*“何だ、この快感は”*と思ったほどです。

とにかくこの三日間は全てが新鮮で、想像していた以上というか、予想を超えた充実した清らかな気持ちになることができたと思っています。講師の先生方や係の方々、それから皆さんにとっても親切にしていたいて、ありがとうございました」

梯は、大地たち修行者の顔を見回しながらお礼を言った。

「それは良かったですね。ところで講座の内容はいかがでしたか？」

竹田が質問した。

「お話の中では初めて聞く専門的な言葉もありましたが、講座は全てが私の心にすんなり入ってきたように思います。もちろん、内容を全て理解できたとは思っていませんが、何と云うのでしょうか、納得できたというか、抵抗なく心に響いてきた…という感じでした。大本の教えは、とても幅が広く、深いですね」

「そうですね」

「梯さんは、朝拝前の万祥殿のお掃除を、とつても積極的にされているように感じましたよ」

丸山が感心したような表情で言った。

「積極的だったかもしれません。自分でも不思議だったんですが、普段は自宅でも仕方なく掃除をしていました。掃除をした方がいいかな…とか、しなくちゃいけないなあ…とか、いつもそんな気持ちで掃除をしていました。ところが万祥殿では、生まれて初めて“掃除がしたい”と思ったんです。

万祥殿のようなとても神聖な場所をお掃除させていただいているんだと思うと、神さまはこんな私に、このような素晴らしい聖域に入ることをお許しくださったんだ。ありがたい！」と素直に思えました。すると鳥肌が立つようで目頭が熱くなりました」

「梯さんは、聖地での出来事全てを、とても信仰的に感じておられる。きつと求める心がそうさせているのでしょうね」

竹田は梯の思いを噛みしめるように、頷いた。

車はJR吉富駅前にさしかかっていた。

「丸山さん、あの梯さんの掃除に対する思いというのは、びつくりしました。というか、自分の掃除に対する心構えが恥ずかしく思えたんですけど…」

大地が昨夜の梯の言葉を思い出しながら、横の座席の丸山に話し掛けた。

「まったくその通りだね。この私でも、初修行の時には、梯さんと同じ気持ちだが、若干はあったなあ…、ということをお願い出したほど、初心をすっかり忘れてしまっていた。『初心不可忘、まさに初心忘るべからずでないといけないね』」

「なかなか難しいことですけど、初心に帰ることは大切なことですね。私も梯さんの

掃除に対する思いを聞いて反省させられました」

馬淵が振り返りながら言った。

「余談だけどね」

そう言つて丸山は話を替えた。

「初心忘るべからず、というのは、能を大成した世阿弥の言葉で、一般的には“はじめの気持ち、志を忘れてはならない”という意味で使われるよね」

「そうですね」

大地が相槌あいづちを打った。

「実はね、初心忘るべからずには、もう少し深い意味があるんだよ」

「えっ、どういうことですか？」

「世阿弥がこの言葉を残した『花鏡』かきようという伝書には、“初心忘るべからず”は三カ条

あるんだ。それは、

是非の初心忘るべからず

時々の初心忘るべからず

老後の初心忘るべからず

とあるんだね」

「三つもあるんですか？」

「そう、もともとは能役者が芸を極めるために必要なことを表した言葉の一つだということ、世阿弥は、能役者としての精進の段階で、いくつもの初心があると説いているんだね。

若い時の初心、人生の時々の初心、そして老いてからの初心とあるんだ。しかもその初心は、はじめの気持ち、志、つまり初志ではなくて、初心者の頃の未熟さやみつもなさ、とも言えるんだ。つまりは芸の未熟さ、みつもなさを折に触れて思い出すことによって、あの状態には戻りたくない」と反省することでさらに精進できるというんだね」

「なるほど」

「だけど、ついついそれが観念的になって、後悔先に立たずを繰り返しちゃうんだね…、私のように。

三代教主さまはご自身で『わたしもこれ（初心不可忘）を座右の銘にしています』とお書きになっていて、三つの不可忘の戒めは能楽に限らず、宗教にも芸術にも、処世にも、全ての道に大切な心構えであって、大本人も信仰者としてこの戒めを常に呼び起こして、身魂磨きをするようにとおっしゃっている。そして、お筆先の『ぬきみ

の中にいるような心でいてくだされよ』というのは、初心不可忘のことだ…ともお示しになっているね」

「何だか深いお話ですね」

「今の私はまさに、老後の初心忘るべからず、つてとこだね」

「なるほど、じゃあ私は、是非とも初心忘るべからずですね」

「そうそう、そういうこと（笑）」

丸山が高笑いした。

車が園部の町中に入つてすぐ、丸山が左手の方に顔を向けた。

「この左手の方に、『生身^{いきみ}天満宮』という大本とご縁のある天神さんがあるんだよ」

大地は、記憶の中にその名称を探した。

…確か。

「菅原道真が亡くなる前から、そこでお祀り^{まつ}されていたということで、日本で一番歴史の古い天満宮ですよね」

大地が言った。

「おや、よく知っているね。行ったことあるの？」

「いえ、以前祖父に話を聞いたことがあって…。生きているうちから祀まつられたっていうのが、妙に印象的だったので憶おぼえていただけです。それがここにあるんですね」

「雨宮君、たいしたもんだね。じゃあ、南陽寺のことも知ってるかな?」

「南陽寺? いえ、それは知りません」

「そうか。近くに南陽寺という曹洞宗のお寺があつてね。そこも大本とご縁があるんだよ。聖師さまは青年時代、園部で獣医学や牧畜の勉強をされていてね。その南陽寺に住んでいた国学者の岡田これひら惟平翁に師事されていたそうだよ。そこで岡田翁から、鎌倉時代に途絶えてしまった歌祭の由来や方法、歌垣の作り方などを学ばれたということだ」

「それは、明治中頃の話ですよね」

馬淵きが訊いた。

「そうですね、聖師さまが二十代前半の時です。聖師さまはそのことを長い間温めておられ、昭和十年に『大本歌祭』として、亀岡で復興させられ、第二次大本事件で中断の後、昭和二十五年から、二代教主さまによって再び復活されたわけですよ」

「なるほど、そういう歴史がこの園部にあつたんですね。面白いな」

丸山の説明に、大地は歴史の流れを感じていた。

天満宮と天神さん

「丸山さんは歴史に詳しいんですね」

ハンドルを握る北原が言った。

「ホント、勉強になりますね。ほかにもまだタメになる話、ありますか？」

助手席の馬淵が訊ねた。

「皆さん、よく注意して聞いてくださいよ。私の話は、けっこう出任せかもしれませんからね」(笑)

「えっ、でたらめってことですか？」

大地が驚いた。

「雨宮君、でたらめとは言っていないよ。で・ま・か・せ、です」

「出任せって、でたらめということじゃないんですか？」

「ちよつと違うかな。私の場合は、口から自然と、出るに任せる…ということですから、神さまのご内流のまにまにお話ししているということです」

「おゝ、なるほど」

「いやいや、これはでたらめかも(笑)」

「えー、どっちなんですか」

大地が反応すると、車内は笑いに包まれた。

「ごめん、ごめん…。じゃあ、おわびに雑学を一つ…」

「よっ、待ってました」

運転している北原がハンドルをたいた。

「では…」

丸山は一つ咳払いをして話を始めた。

「さつき、園部の『生身天満宮』の話が出ましたね。菅原道真が亡くなる前から、道真公をお祀りしていた日本で一番歴史の古い天満宮だ…ということをや雨宮君が知っていましたね」

丸山が確認した。

「はい、祖父に聞いた話で、生きているうちから祀られていたということ…」

「そうだね。ということは、神社の創建は道真公が亡くなる少し前ということになる。確か…、亡くなる二年前だったと思うけどね」

「そうなんですね」

「ところがね、全国には他にも天満宮と呼ばれる神社の中に、創建がそれより古いところもあるらしいよ」

「えっ、じゃあ、生身^{いきみ}天満宮が一番古い天神さんじゃないということですか？ おじいちゃんがでたらめだったとは…」

大地は首をかしげた。

「いやいや、そうじゃなくて、雨宮君のおじいちゃんは正しいよ」

「どういうことですか？ 丸山さんがでたらめ？」

「いや、正確に言うと、生身^{いきみ}天満宮は、日本最古の天満宮ではなくて、道真公^{まづみ}を祀^{まつ}った最初の神社として最古の天満宮ということ」

「つまり、もともとあった天満宮に、道真公が亡くなって以降、合祀^{ごうし}した神社もあるということですか」

馬淵が確認した。

「そういうことです。で、さっき雨宮君が生身^{いきみ}天満宮のことを天神さんと言ったけど、天満宮のご祭神：つまり道真公のことを天神さんと呼んだことから、天満宮のことを、親しみを込めて天神さんと呼ぶようになったようだね。実際には“天満大自在天神”

という名前とか、いくつものご神名があるようだよ。だから今では、一般的に天満宮と天神は同じだと思われるみたいですねあ」

「本来は違う神社だったということですか？」

「いろいろな説があるかと思いますが、道真公が祀られる前から天神社というのはあったんですね。古くは奈良時代創建の社もあるらしいんですよ。

それから、『天神地祇』という言葉があるように、もともと天神というのは、地祇、地の神に対して天神、天の神ですね。つまり地祇が国津神で天神が天津神のこと…。『天津祝詞』の天津神、国津神、八百万の神たちともに…の天津神ですね」

「丸山さん、話の腰を折るようですが、天津神と国津神というのは、どう違うんですか？」

大地が訊ねた。

「そうだなあ、大道場修行中の雨宮君なら、こんな回答はどうか。もちろんどちらも神さまだから目には見えないけど、お働きの立場や場所が違う。天津神は主に霊界でご活動の神さま方、国津神は主に現界でお働きの神さま方、ってとこかな」

「あゝ、なるほど、何となくイメージできました。ありがとうございます。で、天神

社のことですね」

大地が話を戻した。

「例えば京都にある北野天満宮は、全国に約一万二千社ある天満宮の総本社で、“北野の天神さん”と親しまれている神社でしょ。以前は北野神社とか天満天神と呼ばれていて、天満は“あまみつ”とか“そらみつ”と読んで、雨がみつる…雨がたくさん降るようにと願う雨乞いの神さま、つまりは雷の神さまということですね」

「面白いですね」

馬淵が興味深げに相槌を打った。

「実はこの話、京都大学の名誉教授だった上田正昭先生が、昔『おほもと』誌の座談会の中で話しておられたことなんだけど、すごく興味深かったんで憶えていたんですよ。歴史学の権威者の説だからたぶんそうなのでしょう。だからこの話は出任せでなくて、受け売りです（笑）」

「それなら間違いないでしょうね」

馬淵が笑顔で頷いた。

「ちなみに、その北野天満宮には、明治三十三年の鞍馬山くらまやまの出修の神事の時に、開祖さま、聖師さま、二代さまが参拝されているんですよ。そして開祖さまはその時に、道真公の不遇の晩年に触れられて、国祖・良の金神さまのご隠退のことを、涙をハラハラと落しながら語られた…ということなんです」

開祖さまの話題となり、丸山は急に真面目な顔になった。大地は、鞍馬山くらまやまの出修と聞いて、確か講座の中で聞いたような気がしたが、思い出せず丸山に訊ねた。

「雨宮君、そりゃあそだよ。初日の『大本の出現』の講座の最後に、時間切れで項目だけ読んで終わりだったからね」

「なんだそうでしたか、憶おぼえてないはずですよ。よかった」

「あつ、居眠りして聞いてなかったのかも」

「いえ、そんなことは…」

大地は顔の前で手を振った。

「ついでだから、天神さんについてももう一つ。京都の金閣寺の手前に“わら天神前”というバス停があるんだけど、それは近くに“わら天神宮”という神社があるからなんだね。正式名称は“敷地神社”というけど、京都では有名な安産の神さまで、妊婦

さんにお下げする安産のお守りの藁わらから、〃わら天神宮〃って呼ばれていてね。

でも天神だけど、主祭神は菅原道真ではなくて、木この花はな開さく耶や姫ひめ命のみことさまなんですよ。

神社の起源が道真公の時代よりずいぶん前だから、主祭神は当然違うわけですよ」

「なるほど、天満宮と天神さんは必ずしも同じでないということの実例ですね」

「そういうことです。でも、神社の起源や由緒というのは、古文書等ではつきり分かるものは別として、時代の流れで増えたり、人間の都合で変化した場合もあるようだからね。

道真公だって、崇たたり神として恐れられ、怒りを鎮めるために祀まつられたのが、そもそもの始まりだったわけですよ。それが時の流れの中で、道真公の優秀な能力にあやかりたいとして、民衆から学問の神さまとして崇あがめられるようになったわけですよ」

「ずいぶんな変わりようですね」

大地が頷うなずいた。

「道真公は千年の間に待遇が逆転したけど、国祖の神さまは、三千年以上も悪神、崇たたり神としてお隠れになり、世を忍んでこられたんですから、大変なことです」

「そうですね。その三千年も、人の歴史の三千年とは違いますからね」

馬淵が小さな声で言った。

「さっき話した開祖さまの北野天満宮ご参拝の折の話…、開祖さまは国祖のご境遇やご艱難かんなんを偲しのばれて、その思いを語られたんでしょなあ。われわれのような凡人では及びもつかないようなご苦勞をなさっている神さまのことを、開祖さまはわが身のように、いやそれ以上に痛切に感じておられたんでしょ」

しみじみと語る丸山は、さっきまでのひょうきんな表情と変わっていて、大地は丸山の信仰心の一端に触れたような気がしていた。

綾部へ

車は観音峠を越え、京丹波町に入った。頭上を横切る京都縦貫道の高架下を過ぎると、しばらく道路が片側二車線と広くなっている。

丸山の雑学によると、以前このあたりは渋滞することが多かったようだ。特に五月のゴールデンウィークや夏の海水浴シーズンには、丹後方面でのレジャー帰りの車で、京都方面へ向かう上り線がよく混んでいたとのこと。だが近年は国道の一部拡幅と縦貫道の整備で、渋滞することはほとんどなくなった。大地たちの車も綾部へ向かつて、順調に走行している。

国道九号線は、片側二車線が終わるところで分岐していて、分岐点である京丹波町の「蒲生」交差点から右折して北に進路をとると国道二七号線となる。正確に言うところ、そこが二七号の終点で、始点は福井県敦賀市である。

ちなみに大地たちが走っている国道九号線は、京都市下京区の「烏丸五条」交差点を起点に、山陰地方を経由して、終点の山口県下関市まで続く実延長六二・四キロメートルの長距離だ。国道四号、国道一号に続いて日本で三番目に長く、西日本では一

番長い一般国道である。

大地たちはそのまま国道九号線を直進した。聞くとどちらの道を進んでも綾部には着くようだが、直進し途中で国道一七三号線に入るルートの方が、二七号線を選ぶより五分ほど早いらしい。

「私が若い頃は、綾部へのルートは二七号線だけだったんですよ。でも、この先の一七三号線が綾部まで開通してからは、この道を通ることが多くなりました。でもね、二七号線を走る方が、景色はきれいなんだよね。特に五月のみろく大祭のころは、山々の新緑が本当に美しくて、私は個人的にはそちらの道の方が好きでね…。二七号線から見る遠くの山並みの新緑は、まるで聖師さまの耀盃ようわんを見ているようなんだなあ…。まあ、今は真夏だから、どちらの道もそう変わらないけどね」

「へえ、そうなんですね。今度ぜひ見てみたいですね」

丸山の説明に大地が応えた。
国道九号線を直進した車は、そろそろ国道一七三号線との交差点近くまで進んできた。

「そうそう、この辺りまで来ると、また一つ思い出す話があつてね…」

丸山が左手の窓外に目を向けながら言った。

「どんな話ですか？」

大地が訊ねた。

「その昔、この辺りであつた聖師さまのすごいエピソードだよ」

「えー、どんなすごいことですか？」

「それはね…」

丸山は一呼吸置いてから話し始めた。

「この辺り一帯は昔、ひのきやま 桧山と呼んでいて、今はもうなくなつたけど、たるや 樽屋という旅館があつてね。聖師さまはその旅館をよく使つておられたそうなんです」

「こんなところに旅館があつたんですね」

「今走っている国道九号線は、山陰道と呼ばれる街道で、ところどころに宿があつたんですよ」

「なるほど、宿場のような場所があつたんですね」

「さつき八木の虎天堰で、聖師さまと開祖さまの次女・福島ひささんが出会って、聖

師さま…上田喜三郎青年が、初めて綾部の開祖さまを訪ねられた話をしたでしょ」

「はい、確か高熊山での修行をされたあとでしたね」

「明治三十一年の旧八月に、聖師さまは初めて綾部へ行き、開祖さまとご対面されたわけですね。」

聖師さまは神さまから『一日も早く西北さして行け、お前の来るのを待っている人がある』と命じられて、八木でひささんに会い、綾部へ行かれた。一方開祖さまはお筆先を通じて神さまから『なおの力になる人をこしらえてあつて、そのお方をひきよせるから、何事でもたずねなさい』ということを聞かされていた。

つまりお二人は互いが“運命の人”であつたわけです。でも最初はすんなりといかなかった」

「どういふことですか？」

「開祖さまが聖師さまに、『お前さんは何神さんでございますか？』と聞かれると聖師さまは当時、駿河の稲荷講社というところに属しておられたので、そのことを伝えられると、開祖さまは『この神さまはそんなところに世話にはなれない』とおっしゃつたということなんです。開祖さまのそばにいた役員が、怪しいやつが来たと反発し

たこともあって、この時、聖師さまはわずか二泊して綾部を去られたんです」

「では会談は物別れに終わった、ということですか？」

「残っている記述から、そんなふうに取りられることもあるようだけど、違うように受け取れるところもあってね…」

丸山はそう言つて、以下の聖師さまの回顧歌集『霧の海』にあるお二人の初対面とお別れの場面を詠まれたお歌の概略を説明した。

三枚の半紙に筆先さらさらと

書きて開祖は吾^{われ}にたまへり

^{なんぢ}汝こそ神のよさしの神柱と

しるしありたりかしこき筆先

今^{しば}暫し時節はやし時来れば

迎へに行かむと開祖は宣^のらせり

「だから聖師さまは、開祖さまのお心を理解して、しばしお別れになった…とも取れるんですね」

「なるほど。で、聖師さまは、亀岡に帰られたわけですか？」

「いやそれが穴太の実家には帰らず、園部まで引き返されたんですね。おそらくそのことも開祖さまと別れられる時か、あるいは後日、所在を伝えておられたんでしょう。というのも、園部に滞在されている聖師さまの元に、開祖さまの指示で、綾部の四方平蔵さんからの手紙が届いているんです。

何と言っても聖師さまが帰られてから、お筆先に何度も聖師さまのことが書かれるようになったんです。開祖さまの力になるお方だとかね」

「そうなんですか。で、聖師さま……喜三郎青年は、園部で何をされていたんですか？」
助手席の馬淵が訊いた。

「知り合いの座敷を借りて、神さまのお道を宣伝されていたんです。だから聖師さまを信奉する人たちも増えていたようで、園部の町の有志は、信仰はともかくも地元の繁栄の一策として、園部の公園の中に布教所を建てて聖師さまを永住させようとしていたというんだね」

「そうすると、靈驗あらたかだったということですね」

大地が確認した。

「そうだね。ところがそこへ綾部から開祖さまのお使いとして、先に手紙を出してい

た四方平蔵さんが、聖師さまをお迎えに来たわけですよ」

「あらら、それなら園部の人たちのもくろみは外れてしまったんですね」

「そうなるね。聖師さまは最初、『綾部はもうこりごりしましたから、行くのはやめま
すワ』と言われたようだけど、よくよく話を聞くと、開祖さまと平蔵さんが相談の上
迎えに来たらしく、反対する役員にはナイショだったというんだね。で、いろいろと
話を聞かれて、聖師さまも覚悟を決め、綾部行きを承諾されたというわけです。

それでなんとその夜、聖師さまは往復八里というから三十二キロの道を穴太の実家
まで帰られて、おばあさんやお母さんに綾部へ行くことを告げ、産土の神さまに祈願
をし、明け方までに園部へ戻ってこられたということなんです」

「何という健脚…」

「今の人にはできないことだね」

「そうですね」

「そのことは平蔵さんも知らなかったようで、二人はそのあとすぐに綾部へ向かって
出発されたわけです」

「なんと…」

「で、その日の夕刻に、さつき説明した^{ひのきやま}松山の樽屋旅館に投宿されたというわけですよ」

丸山の説明に大地は無言で頷いた。うなず

「さあ、二人が樽屋たるやに入るとたちまちに大雨が降りだした。雷鳴轟とどろき、ものすごい豪雨になった。そんな中、二人は夜中まで話し込み、午前四時頃に起床されたようだけど、相変わらずバケツをひっくり返したような大雨が降り続いていたんだね。で、平蔵さんが心配して雨が止むやだろうかと聖師さまに訊ねると、聖師さまは『午前九時になればカラリと晴れます』と断言されたんですね」

「その時代、天気予報もないわけですよね」

「まだ夜も明けていない時だし、まさに大予言をされたわけです」

「へえ」

「それから聖師さまは、平蔵さんに不思議なことを言われるんですよ。一度も行つたことのない平蔵さんの家の周りの様子を言い当てられたんです。家の裏にきれいな水が湧くため池がある。前には枝ぶりのおもしろい松の木がある。近くには街道沿いに小さい店があつて六十歳くらいのおばあさんがいる……などとすべてピタリと当てられたものだから、平蔵さんはもうビックリ！」

「僕もビックリです！」

「でも平蔵さんはそれが稲荷使いじゃないかと心配するんですね」

「稲荷使い？」

「まあ、狐や狸きつね たぬきのような低級な霊を使つて、超人的なことを予言したり当てたりすること……でもいうのかな。だからそんな芸当を綾部でやってしまうと、開祖さまのまわりにいる役員らがまた大騒ぎすると心配したわけです。それで聖師さまに、綾部へ行ったらそんな魔法だけは使わないようにしてください、と頼まれるんです。

すると聖師さまが、そんな分からず屋ばかりなら綾部には行かない、と言いだされるものだから、平蔵さんはあわてちゃうんですね。今の時期は、綾部・和知川あいちの鮎あゆがおいしいだの、開祖さまのご内命で来ているので困るだのと、聖師さまを説き伏せられるんです」

「ここまで来て帰られたのでは、平蔵さんも開祖さまに合す顔がない……ということになりますね」

「そう。で、聖師さまは狐きつね使いや魔法じゃなくて、これは天眼通てんがんつうというものだから、それをあなたに授けましょう……ということになったわけです」

「おもしろそう！」

天眼通

大地は興味津々である。

…が、ちよつと待てよ、というような表情で、隣の丸山の顔をのぞき込んだ。

「あの〜」

「ん？」

「テンガンツウ…とか言われましたが、それはいったいどんなものなんですか？ 今伺った聖師さまと四方平蔵さんとのエピソードから、何となく分かるような気もするんですけど…」

「そうだよね、今の若い人たちには聞き慣れない言葉だよね」

「はい」

大地は頷きながら話を続けた。

「大道場の講座の中でも、大本独特の言葉があつたりしますよね。あれって僕も初めて聞いた時には分かりませんでした。講師の先生が、その言葉の解説をしてくださると理解できましたが、講座の中でサラッと使われると…えっ、今のどういう意味？…」

って感じで、頭をひねってしまいました」

「そうだね。宗教用語…特に仏教用語だったり、大本独特の言葉だったりするからね」
「大本はどちらかというと神道しんどうですね。なのに、どうして仏教の言葉が多いんですか？」

「仏教用語はお筆先の中にもいろいろあるけど、神さまはできるだけその時代の人々が理解しやすい言葉、あるいは時代を超えて親しまれている言葉を使われたんじゃないかなあ。そうしないと、雨宮君と同じように、みんながまったく知らない言葉だったら誰も理解できないからね。

『靈界物語』の中にも時々、かみよ神代言葉よが出てくるけど、それだけ読んでもチンプンカンプン。まあ、聖師さまが解説されているから分かるけど、そうでなければ、現代人にはまったく意味不明だからね」

「そんな言葉があるんですね」

「だから神さまは、少しでも靈界や神さまのことが人民に伝わるように、一般的に分かりやすい言葉を使われたんだと思うわけ。…って、私も先輩に教えてもらったんだけどね。受け売り、受け売り…（笑）」

丸山が笑顔で答えた。

「なるほど、そうなんですネ」

「大本では、理想世界、地上天国のことを“みろくの世”と呼んでいるけど、仏教でいうみろくの世はちよつと違うんですよね」

助手席の馬淵が言った。

「そう、馬淵さんはよく分かつてるんじゃないの」

「あつ、いや、そんなに詳しくはないんですが…。仏教のミロクの世は、昔、世上で盛んだったミロク信仰に由来してますよね」

「はい。馬淵さん、続けて…」

丸山が馬淵に話を続けるように促した。

「丸山さん、間違っていたら訂正してくださいね」

「いやいや、自信をもってどうぞ」

丸山は馬淵を促し、馬淵もまんざらではない表情で語りだした。

「日本でのミロク信仰は長い歴史があるようで、仏教が日本に入ってきた五世紀の後半から、すでに始まっていたらしいですね。」

簡単に言うと、お釈迦しやさんが入滅後…つまり亡くなつてから五十六億七千万年ののちの世に、弥勒菩薩みろくぼさつがこの世に下生げしやうして世の人々を救うという、一種の救世主信仰ですね。

高野山を開いた空海も、自分は死してのち、弥勒菩薩みろくぼさつの浄土である兜卒天とそつてんに生まれ、衆生を見守り、釈迦しや入滅から五十六億七千万年後に、弥勒菩薩みろくぼさつと共に下生して衆生を救うんだと誓願していたそうです。

世の人々は、お釈迦しやさんが入滅してから弥勒出現までの間、仏のいない世界になることを恐れて、現世を救うさまざまな仏さまを考えてきたということのようです。ですから、空海…弘法大師は亡くなつたのではなく、今の高野山の“奥の院”で生き続けていると信じられているんですね」

「だから、弘法大師を慕う人々がこぞつて奥の院にお墓を建てたんですね」

「そうなんです。一度高野山の奥の院に参拝したことがあるんですけど、もうびっくりしました。一番奥の弘法大師の御廟ごびやうまでの広大な場所に、二キロメートルの道があつて、その両側に、なんと二十万基を超えるお墓があるんです」

「えゝ二十万！ そんなにあるんですか？」

大地が驚いた。

「お墓といつても、遺骨を納めたものだけでなく、祈念碑や慰霊塔なんかたくさんあるんですよ。昔の諸大名の墓石もあれば、現代の大手企業関係者のユニークな慰霊碑なんかもあって、ちよつと別世界でしたね」

「いつだったかNHKの『ブラタモリ』で紹介していましたね。確か戦国時代のライバルだった上杉謙信と武田信玄の霊廟れいびやうというか供養塔も近くにあるとか…。

おつ、また何だか話がそれちゃったかな」

「すみません」

馬淵が小さく頭を下げ、話を戻した。

「仏教用語のことでしたね」

「はい」

大地が返答した。

「そうそう、『おほもとしんゆ』に『変性男子へんじやうなんし』というのがありますが、これも仏教用語ですよ、丸山さん」

馬淵が丸山に訊いた。

「はい、大本では『変性男子へんじやうなんし』は開祖さまのことで、肉体は女性だけど身魂みたまは男性…」

丸山が補足した。

「でも仏教用語には、その反対のへんじょうにょし変性女子しという言葉はないらしいんですが、『おほもとしんゆ』には出てきますね」

「大本ではへんじょうにょし変性女子しは聖師さまのことだと、講座で教わりましたが…」
大地が言った。

「その通り。でも仏教用語では、へんじょうなんし変性男子しだけ。これは古来、女性は成仏することがとても難しいとされて、いったん男性になること、つまり性を男子に変えることで成仏することができるようになったとした、一種差別的な思想からきている言葉のようですね」

「へえ、そういうことなんですか。じゃあ、大本で使っている意味とはずいぶん違うということですね。知らなかったな」

運転中の北原が感心したような声で言った。

「すごいなあ、そういうことですか」

大地もしきりにうなず頷いていた。

「丸山さん、みろく」という言葉は一般に仏教用語として使われてきたわけですけど、本当は違うそうですね」

馬淵が訊ねた。

「そうなんです。実は聖師さまも、みろくの世という言葉をもとに神道風に代えられないかと思っておられたんです。そこで開祖さまにお伺いされ、開祖さまも同意されて神さまにお伺いされたそうです」

「それで…?」

「すると神さまは『ミロクというのは神さまがお釈迦さまを通じて発せられた神の言葉である』とおっしゃったそうだよ。みろくとは『いよいよ革める力、はたらきのこと』だとも聞いています。」

…あれ、何の話からこうなつたかな?

丸山が首をひねった。

「すみません、天眼通の質問からです」

大地が答えた。

「はいはい、そうだったね。え、天眼通というのは、何でもできる霊妙な力…神通力の一つだね。これも菩薩に備わる特殊な六つの能力…六神通というのがあって、その一つ。ある物に対して普通の人が見ることでできないことを、自在に見透かす特殊能力のことですなあ」

「ということは、透視能力ですね」

「ん、ちよつと違うかもしれないけど、まあ、そういうことかな」

「なるほど。で、聖師さまはその力を持つておられたんですね」

「そういうこと。行ったこともない四方平蔵さんの家の様子を言い当てたエピソードが、まさに天眼通^{てんがんつう}。しかも、聖師さまはその力を平蔵さんに授けられるんですね」

「でも、特別な人が持つ特殊能力なんですよ。普通の人が簡単に会得できるものなんですか？」

「アハハ、平蔵さんも今の雨宮君と同じことを聖師さまに訊^{たず}ねているね。私のような素人でもそんな天眼通^{てんがんつう}ができますか？」 ってね」

「やっぱり」

「すると聖師さまは平蔵さんに、『天眼通^{てんがんつう}くらいは、すぐに分かるようになる』と言つておられる。ただし『真心になりさえすれば』という前提があつてのことだけどね…。

平蔵さんは素直な人だったんでしょう、聖師さまが言われるままに、座敷の真ん中に座つて、目を閉じて手を組んでみた。そして聖師さまが『それ見い！』と大声で言われた途端、目を閉じているのにもかかわらず、風景が浮かび上がってきたんですね」

「どんな風景だったんですか？」

「きれいな水が湧く池の近くに、古くて小さな藁葺きの家があつて、裏には大きな力ヤの木なんかがあつて……と見えた風景を細かに話されたんです。すると聖師さまは、それは自分が生まれた家だ、とおっしゃったんですね。つまり聖師さまは、ご自分のご生家を平蔵さんに見せられたわけです」

「へえ、そんなこともできるんですか。天眼通、恐るべしですね」

「だから、天眼通を授けられた平蔵さんは大喜びですよ」

「そりゃあ自分が特殊能力を身につけられたんですから、嬉しいですよね」

「いやいや、そういうことじゃなくてね」

「えっ？」

「平蔵さんは、『開祖さまは偉いもんだ』と喜んだんですよ。というのも開祖さまが、大勢の役員や信者に隠れて、喜三郎青年をお迎えしてこいとおっしゃっただけの価値がある……だから、この青年だったら神さまのご用が十分に務まるだろうと確信できたから、とっても喜んだということですよ」

「なるほど、平蔵さんつてよっぽど素直な人だったんですね」

大地が笑顔で言った。

「そうかもね。で、その後、二人は朝食をすませて準備をし、いざ綾部へ向けて出立となったんです」

「あつ、ひよつとしてその時間が、予言された午前九時ということですか」

大地が丸山の顔を見た。

「その通り！ それまで降っていた大雨がウソのようにピタリと止み、日本晴れの空が広がり、太陽が燦々と輝きだした。平蔵さんにとっては不思議なことの連続で、もうすっかり聖師さまにまいてしまったわけですよ」

「まさに予言通り、すごいエピソードですね」

大地は感心しながら何度も頷いた。

遷 極

車は国道九号線と一七三号線が交わる交差点を右折して綾部へ向かつて走る。

一七三号線は大阪の池田市を起点にして、梅松苑からほど近い綾部市の新綾部大橋を渡った二七号線との交差点まで続く国道である。

車の左手には田園が広がり、その向こうには小高い山が連なっている。それらに添うようにして、橋脚の上に京都縦貫道が走っている。

「さつきも話したけど、この国道は何年前だったか、ずいぶんあとになって綾部まで延長されたんです。大本信徒にとっては便利な道で、まあ、綾部への参拝道みたいなもんですなあ。ただ、山の中を抜ける道なので、起伏もカーブも多いけどね」

丸山が山手に視線を向けながら言った。

「昔は綾部までの旧道が、あの山の裾野辺りにあったようです。今はこうして車で楽に移動できるけど、大本の草創期、聖師さま方はその道を歩いておられたんですな」

「亀岡から綾部まで歩くとすると、相当時間がかかったでしょうね」

大地が訊いた。

「数年前に、本部の若い人たちが歩いたことがあったんだけど、確か一五、六時間か

ったんじゃないかな。もっとも昔の人は健脚だったから、もう少し早かったかもしれないけどね」

「それにしても大変ですね。僕には無理だな」

窓外を眺めながら、大地がつぶやいた。

「そうそう、聖師さまがご昇天になったあと、ひつぎ柩が亀岡から綾部まで遷うつされたんです。ご遷せん柩きゆうですね。大勢の信徒がお供して、その旧道を手で引いて歩いたんです」

「えっ、徒歩で？」

「そう。なんでも最初は列車でお運びしようと思いましたが、その次には靈れい柩きゆう車しやを頼もうとしたけど、当時はまだ木炭車しかなくて、峠がある雪の丹波路は通行が難しいとかで、断られたらしいね」

「木炭車って、炭で走る車ですか」

大地がビツクリした表情で言った。

「そういえば以前、大勢の人が柩ひつぎを引いて歩いている写真を見た記憶があります」
馬淵が思い出したように言った。

「信徒の大工さんたちが、真心込めて特別な霊柩車れいきゆうしゃを作ったとかで、その霊柩車れいきゆうしゃの柩ひつぎを納めた上屋の部分は、今も大切に保存してあるそうですよ。

聖師さまがご昇天になったのは昭和二十三年の一月十九日で、確か十日祭が済んでから、綾部へ渡られたんじゃないかなかったかな。真冬で、しかも夜中の一時頃の出発でね、そりゃあ、寒かったと思いますよ。

それでも実際に霊柩車れいきゆうしゃを引く志願者が大勢で、お供にはたくさんのお年寄りや女性までもが願ひ出たそうですね。途中で死んでも悔いはない”という覚悟の人たちが多かったというんだからね」

「昔の人の信仰心は、すごいですね」

馬淵が感心したように言った。

「今日は車で観音峠を通ってきたけど、当時の峠は相当厳しかったらしいね。けが人でも出たら大変だと、担当者は現場で声を枯らしてお供を断念するように説得して、ようやく大半の人が観音峠でお別れしたけど、それでもなお、四百人くらいの信徒は隊列から離れなかったというから、たいしたもんだね」

「四百人！」

大地は人数の多さに驚いた。

車は京都縦貫道の高架下をくぐり、直線から緩やかに左にカーブする坂道を上った。しばらくして丸山が左手の下の方を指差した。

「ほら、そこに大きな屋根が見えるでしょ」

大地たちも丸山が示した方に顔を向けた。今は金属で覆つてあるが、茅葺き屋根の面影を残す立派な屋根が目に入った。

「あそこは私の友人だった北村さんという方のお宅で、実は、聖師さまのご遷柩せんきゆうの途中、葬列が昼食のために休憩をしたおうちなんですよ」

「そうなんですか」

「あのおうちの向こう側の山裾が旧道だったそうです。北村さんはもう亡くなつたけど、昔、彼の家に行った時に、ご神前横の床の間に、しばらく聖師さまの靈璽れいじを安置して……って聞いたことがあります。彼は当時中学生くらいだったそうだが、びっくりするくらいの大勢の人が来て、みんなが聖師さまの靈璽れいじに向かってお参りしていたことを憶おぼえていると言つていたなあ。

綾部れい部きゆうからも霊柩車しやの引き手の助っ人が来て北村家で合流し、綾部には午後三時半こ

ろに到着したというから、すごいよね。だって午前一時に亀岡を出発して、午後三時半綾部着でしょ。全行程で十五時間かかっていないことになる。しかも重さ五百キロ以上の霊柩車れいきゆうしやを引いてだからね」

「そんなに重かったんですか。それなのに現代人がただ歩いてかかる時間と同じ時間で歩いたということですよ。なんとすごいパワーですね」

「まったく、昔の人はエライ！」

「そうそう、北村さんのことで今思い出したけど、不思議な話があるんですよ」

「え、どんなことですか？」

「ある日、三代教主さまが北村家にお越しになったことがあったそうです。その時三代さまが北村さんに、‘またちよくちよく来ることになる…通うことになる’という意味のことをおっしゃったそうです。」

で、北村さんは‘どういうことだろう？こんな山の中に、まさかそうたびたび来られることはないんじゃないかなあ’と不思議に思っていたそうです。

ところが月日がたって、家のすぐ上に思いがけなく新しい国道が開通したわけですよ。それ以降、三代さまは綾部にお渡りになるたびに、北村家のそばを通られるよう

になったわけです。

それで彼は「このことだったんだ！ 三代さまはいずれここに新しい道が通ることが分かっておられたから、たびたび通うとおっしゃっていたんだ」と話してくれたことがありました」

「なるほど、それがこの国道だったというわけですね。不思議な話ですね」

大地は頷きながら言った。

「はい、皆さん、あの辺り」

丸山は話を変え、大地の顔の前に手を伸ばし、窓外の右前方を指差した。

「さっきの北村さんとかからこの辺りの地名を質^{しず}志^しというんですけど、梅松苑内にある「木の花庵」は、ここから移築されたものなんです」

「あー、ここにあったんですか。移築されたことは何度も聞いたことがあります、元の場所がようやく分かりました」

馬淵が納得したような口調で言った。

「木の花庵？」

大地が、何ソレ…という表情で訊^きいた。

「あれ、雨宮君は知らないのかな？」

「はい、分かりません」

「梅松苑の金竜海の畔ほとりにある昔の典型的な農家の家なんだけど…。それを三代さまが譲り受けて移築されて、今では国の重要文化財になっている建物なんだよ。まあ、今説明するより、今日の午後からの神苑案内で、実際に見てからの方がいいかもね」

「は、はい」

「それがいいですよ」

馬淵も同意した。

「もう一つ、質しず志しには名所があつてね」

そう言いながら丸山は前方を確認した。

「あのカーブを曲がったらトンネルに入るんだけど、その直前の左側に鍾乳洞があるんです」

「鍾乳洞ですか」

「以前、北村さんも鍾乳洞の管理に関わっていたので、彼の案内で私も一度だけ入ったことがあったなあ。小さい鍾乳洞なんだけど、入口を入ってすぐにほぼ真下に降りる

階段があつて、なかなかのスリルなんですよ。それこそ今頃の季節に入つたから、中はヒンヤリとして涼しかったですなあゝ」

京都府内では唯一の鍾乳洞らしいが、ほかの三人は誰も入つたことがなかったので実感が湧かず、何となく聞き流していた。

丸山の説明が終わるころ、車はトンネルを抜け、そこから先はしばらく下り坂になつていた。

坂道はさらに傾斜が深くなり、下りきつた先でほぼ九十度の急な右カーブになつてゐる。しばらくすると「福知山市」という標識が目に入つてきた。国道一七三号線は、綾部市に入るまでに、途中福知山市内を通るコースになつてゐるのである。

ほどなく右手に擬宝珠ぎぼうしがついた朱塗りの小さな橋が見え、その先の石段の上には神社の屋根がそびえていた。

伊弉冉尊いざなみのみこと、天照大神あまてらすみこと、月弓尊つきよみのみことをまつる「大原神社」である。「おおはらじんじや」と読みがちだが、由緒書きによると「おおばらじんじや」とのこと。古来この地方の安産信仰を司る神社としてたくさんの人々が参拝に訪れ、そのことを古く「大原志おおばらざし」と言ひ、俳句の季語にも詠まれているという。

少女時代の三代教主さまが、よく馬に乗つて綾部からご参拝になつたという神社で

もある。

「ほらあそこ、田んぼの端に小さな藁葺き^{わらぶ}屋根が見えるでしょ」

丸山が右下の田んぼの中を指さした。ハンドルを持つ北原が少しスピードをゆるめ、すばやく右に視線を移した。

「あゝ、面白いものがあるんですね」

北原はすぐに前方に顔を戻した。

「ホントだ。あれは何ですか？」

大地も確認した。

「あれは“産屋”と言って、古来のお産の場所なんですよ。実際に大正時代までは使われていたとかで、古事記や日本書紀にもある安産、万物生産の神さまを生み出す場所ということがありますね。“産屋”は昔の風習を今に伝えている貴重な建物なんです。だから大原神社は、安産祈願の参拝者が絶えず、昔から出産の聖地と言われているそうです」

「由緒ある神社なんですな」

「それからもう一つ、とっても興味深い話があるんですよ」

丸山が大地の顔を見て、ちよつと得意げな表情で話を続けた。

松香館と玉水

「丸山さん、どんな話ですか？」

大地が訊き返した。

「それはね、節分の豆まきの話でね…。普通一般では“鬼は外、福は内”という掛け声を掛けるけど、大本では“鬼は内、福は内”と発声することは知っているよね」

丸山が訊ねた。

「はい、知っています。五年前に節分大祭にお参りしたこともありますし、今回の修行でも、『大本の出現』の講座の中で、豆まきのお話がありましたから…」

「そうだったね。ところがさっきの^{おおはろ}大原神社では、世間一般とはまる反対で、“鬼は内、福は外”って掛けるそうだよ。どう、面白いでしょ」

「へえ、また変わった掛け声ですね。どうしてですか？」

「それはね…」

と丸山は、以下の内容を概略説明した。

節分の口上で“鬼は内”とするのは、大本だけではなく、全国各地にある。大本の

ように、み教えに添って、鬼が鬼門の金神・国常立尊くにとこたちのみことだからという理由のところは

他に見つからないが、次のようにさまざまないわれを見ることができるといえる。

- ・鬼子母神きしもじんをご祭神とするから
 - ・寺に住む鬼が悪者を退治するから
 - ・祭っている神をまとめて鬼王というから
 - ・地名に「鬼」がついているから
 - ・商家で鬼を「大荷おに」として商売繁盛とつなげているから
 - ・内に招き、神仏の功德によつて鬼を改心させるから
- 大原神社では、最後の理由に近いが、悪さをする鬼を内へ迎え入れ、福の神としてお出ましただく…ということから、鬼は内、福は外との口上を行つていっているという。
- また、藩主が九鬼家であつたため、名前に「鬼」がつくからという説もあるが、定かではないようだ。

「悪いものは取り込み、良いものを施すって感じですね。それもまた素晴らしいですね。まあ、鬼が福の神に改心するのは、そう簡単じゃないような気がしますけど…。それにしても丸山さんはいろんなことをよくご存じですね」

馬淵が感心した。

「ほんと、博学ですね」

「いやいや、年の功というだけですよ」

「おかげさまで、退屈しない快適なドライブになりました。ありがとうございました」

「ありがとうございます」

馬淵に続いて、大地も礼を言った。

「私も眠くならず運転できました」

北原も感謝した。

「いやゝ、どういたしまして。さて、もうすぐ梅松苑に着きますね」

トンネルを抜け山間の坂道を下ると、右手に小高い井根山、前方には和知川に架かる新綾部大橋が見えてきた。車はその手前で左折。長生殿正門前を通り、坂道を下り切ったところでスピードを緩めて右折し、梅松苑内に入った。

…久しぶりだなあゝ。

大地は四年前のみろく大祭以来の来苑であった。

北原は松^{しょう}香^{こう}館^{かん}前に車を寄せ、大地たちは各自荷物を降ろした。

松香館は、信徒や来苑者のための宿舎・食堂・浴場が備えられた建物で、併せて梅松苑の本部事務所が置かれている三階建ての施設である。「松香館」の名称では、二世となる。

初代は第二次大本事件後の昭和二十五年、年々増え続ける来苑者に対応するために開設された。当時は新築でなく、ゲンゼ株式会社綾部本社の子員寮として使われていた建物を大本が譲り受け、増改築の後、昭和二十六年四月に完成した建物で、三代教主さまが「松香館」とご命名になった。以降、長く信徒に親しまれてきたが、長生殿完成後の平成七年、時代に合った姿で新たに建ち上がった。玄関右手上に掲げてある「松香館」の扁額は、昭和五十八年の尊師さまのご染筆によるものである。

大地たちは北原が車を駐車場に置いて戻ってくるのを待って、受付に行き、簡単な説明を受け、二階の宿泊部屋に入った。亀岡の安生館と違い各部屋畳敷きである。

少し遅れてJR組も到着し、それぞれ宿舎入りした。

綾部での最初のプログラムは、「神苑案内」である。しばらく休憩した後、午後三時、

修行者一同一階のロビーに集合した。

「皆さま、ようこそ綾の聖地、梅松苑にお越しくいただきました。ではこれから夕拝までの間、神苑内をご案内させていただきます。私は、今回、綾部での皆さま方のお世話係をさせていただきます村野文代と申します。どうぞよろしくお願いいたします」
和服に木の花帯姿の小柄な細身の女性である。

「お願いしまゝす」

「あら、丸山さん、また来られたんですね」

「はい、村野さんに会いたくて……」

丸山が茶目つ氣たつぷりに言った。

「あら、それはどうも。……はい、冗談はさておいて、早速参りましょうか。では、皆さん靴を履いて、玄関前にご移動ください」

村野は何やら笑顔で丸山の方へ目配せをしながら先導して外へ出た。

「丸山さん、なんだか面白そうな人ですね」

大地は丸山に近づきながら小声でささやいた。

「そう、分かる、彼女の案内はバツグンなんだよ。今日も村野節がさく裂するか、榮しみだなあ」

「村野さんはおいくつぐらいですか？」

「さあ？ 訊いたことないけど、還暦前くらいかな。まあ、私よりは若いね」

「それは、僕にも分かりますよ」

丸山がいつもに増してニコニコしているのが見て取れた。

一同靴を履き、外へ出た。亀岡よりはましな気がしたが、それでも夏の日差しはきつかった。

玄関前に出た村野は、松香館を背に説明を始めた。松香館建設の歴史を一通り説明し、話は尊師さまの扁額に及んだ。

「えー、四代教主さまは松香館という名前が美しいので、やはりこの宿泊施設を『松香館』にするとお決めになりました。その昔、旧松香館の時に、役員さんたちが松香館に看板を上げようとして、その文字をどうするかという会議をしていたんですね。そうしたところ、ちょうどその会議をしていた時間に、尊師さまがピッタシ『松香館』とご染筆をなさったというのですね。皆さんもうビックリですよ。やはり、会議でもうかつなことは言えないなあーということだったそうです。尊師さまは何もかもお見通しだったんですね」

「へえ、面白いなあ」

大地が思わず口にした。

「はい、皆さま足元をご覧ください。ここに敷き詰められています石畳は、元は本宮山の頂上にあつたものです。本宮山神殿前の参道の敷石で四代教主さまのご指示のもとに、ここへ移されたものでございます。そして、この松香館前の植え込み周辺にありますいくつかの石も、実は本宮山からこちらへ下ろされたものです。天の神が地に降りご神業のお手伝いをなさる」というその型を出されたのではないかとうかがっております。：はい、では玉水の方へ移動します。今日も暑いので、チャツチャと参りましょう」

村野は流れるような口調で説明をし、松香館前の駐車場のほぼ中央北側に立つ「玉水の泉」碑前まで案内した。

「皆さま、あちらをご覧ください。みろく殿の向こう側にあります金竜海の水に関して、以前は和知川の水を汲み上げて満たし、再び和知川に戻していました」

：へえ、そうだったのか。

「平成十三年、現教主さまがご就任後、最初になさろうとしたのが、実は井戸を掘ることだったそうです。なぜかというと、教主さまは近年の世界的な環境汚染や多発する水害を大変憂慮されていました。そこで金竜海をこの聖地から湧き出る清らかな水で満たし、その清水を金竜海から和知川を通して大海へと流す“世界浄化の型”を出すことを願っておられたそうです。」

そのお気持ちを受けて、専門家によって苑内を徹底的に調査し、ボーリングのポイントを絞り込み、最終的にこの場所が選ばれ、掘削されることになりました」

村野が「玉水の泉」碑を指さした。

「それが平成十七年の三月十五日のことでした。この日に工事の安全祈願祭が行われ、翌十六日から掘削作業が開始されました。」

工事が始まりますと教主さまは何度もここにお越しになって“神言”を繰り返し奏上なさっていました。するとどうでしょう、その日の内に早くも水脈に当たったのです。二日後には予定の百メートルに達したのですが、水量が思うように確保できず、さらに二十メートル延ばすことになりました。すると翌日には百二十メートルに達し、予定水量を十分に確保できるようになったのでございます。

水質検査の結果は“大変に清らかで上質の水”であると、専門家が太鼓判を押すほ

どでした。関係者のお話ですと、この場所は“天地人がそろった”誠に素晴らしい場所だったということでございます。

通常ボーリングには二、三週間はかかるそうですが、全ての作業がなんとたった五日で完了するという、まさに奇跡的な工事だったのでございます」

…ここでそんなドラマがあつたのか。

「はい皆さま、碑の後ろ側にお回りください。裏を見るのは初めてですか？」

大地が感心する間もなく、村野は説明を続けた。

「はい、初めてです」

東川^{むがし}芳^{かわ}が答え、つられるように大地ら数人も「初めて」とつぶやいた。

「まあ、良かった。では、よくご覧ください、ここに平成十七年六月九日と刻んでありますね。この日は人類愛善会創立八十周年の記念日で、かのモンゴルのウランバートルでは、人類愛善会モンゴルセンターの発会式が開かれておりました。

そしてこの場所では、教主さまご臨席のもと『梅松苑井水^{せい}汲^{すい}上げ^{くみ}始めの儀』が行われておりました。そうして、玉水はみろく殿前^{みたらし}の御手洗横^{みたらし}の泉から湧き出し、水路を流れて金竜海へと注がれました。このようにして聖地で湧き出たとても清らかな“玉水”というお水が、和知川を下り世界の海へと広がっていくことになったのでござい

ます」

…そういうことだったのか。

全員が感心した表情で頷うなずいていた。

「はい、では皆さまこちらへお進すすみください」

村野は修行者一同をうながして、みろく殿の方へ向かった。

いざ、天国巡覽へ

村野文代は修行者一同を先導し、駐車場から苑内の車道を横切り、みろく殿への短い坂の手前で立ち止まった。

「はい皆さま、ここが天国の入り口になります。みろく殿前のこの一帯が第三天国に相応します。そしてその上、長生殿が立つ鶴山^{つるやま}平^{だいら}一帯が第二天国に相応し、さらに歴代教主・教主補さまの奥都^{おく}城^きがあります天王平が、第一天国・最奥天国に相応します…、と聖師さまがおっしゃっています。決して私が申しているわけではありません(笑)」

「そりゃ、そうだ」

丸山が笑いながら相槌^{づち}を打った。

「はい、間違いないません。ではこれから『天国巡覽』に参りますが、天国でのお参りでは、あちこちで天津祝詞を奏上いたします。これから、皆さまには修行が終わるまで、なんと二十回ほど天津祝詞をあげさせていただくことになります」

「えっ、そんなに？」

大地は思わず口に出してしまった。

「アラ、なにかご不満でも？ えーと、雨宮さんでしたっけ」

村野は大地の胸の名札を見ながら冗談ぼく言つた。

「いえ、何もありません」

「そうですか、よろしゅうございました。はい、では早速参りましょう」

村野は笑顔を振りまきながら、一同を先導して歩を進めた。そしてみろく殿の正面で立ち止まり、梅松苑の神苑について説明を始めた。

「亀岡の天恩郷は、明智光秀の城址ですが、こちらはその昔、^く九鬼^き……九つの鬼と書く九鬼のお殿さまの城がありました。お城がなくなつてからは、小さな“本宮村”という集落がありました。私たちが今入つて来たところは当時、大島景僕^{けいぼく}さん宅の敷地でした。この土地のことについては、開祖さまのお筆先にいろいろと出てまいります。

『……神^{かみ}に因縁^{いんねん}のある屋敷^{やしき}であるから、此^この屋敷^{やしき}に大地^{だいち}の金神様^{こんじんさま}の御宮^{おみや}を建てるぞよ。

大島^{おおしま}の家売^{いえう}つて下^{くだ}されよ。角蔵^{かくざう}殿退^のいて下^{くだ}されよ。金助^{きんすけ}殿家持^{いえもち}つて退^のいて下^{くだ}されよ。

治良^{じろう}右衛門^{えもん}殿家持^{いえもち}つて退^のいて下^{くだ}されよ。氣^きの毒^{どく}乍^なら村^{むら}中家持^{ぢゅういえもち}つて退^のいて下^{くだ}されよ。

此^この村^{むら}は因縁^{いんねん}の有^ある村^{むら}であるから、人民^{じんみん}の住居^{すまい}の出来^{でき}ん村^{むら}であるぞよ』

と神さまが申されました。

そこで多額の保証金を用意して、皆さまに立ち退いていただいたそうであります。

その後、ここには『金龍殿』という建物が建ちます。そこには神さまが奉斎され、祖霊さまもお祀りしてありました。何とその当時は、二百人とも三百人ともいわれるくらい、修行者がお見えになつていたそうですよ。今とはずいぶん違いますね」

……すごいなあ。

大地はまた驚いた。

「それから金龍殿は、若き日出磨先生……つまり高見元男青年が、大先生……聖師さまと初対面された舞台でもありました。高見青年は金龍殿のご神前に座られたとき、止めどなく熱い涙があふれ、『どうしても解けなかった永遠の生命の謎を、ここは解いてくれるかもしれない』と思われたそうでございます。

金龍殿の右後方には『統務閣』という建物がございまして、そこでは開祖さまがお筆先をお書きになり、また三代教主さまがお茶やお花のお稽古をなさった……と史実に残されています。さらに統務閣の後方には、『教主殿』が立っております。

それから、向こうの松林の辺りですが……」

そう言つて玉砂利が敷き詰められた広場の先を指しながら話を続けた。

「あそこには『黄金閣』という建物と開祖さまのご神霊をおまつりした『教祖殿』という建物がぎざはしでつながつて立っていました。金竜海も今の倍くらいの広さでしたので、二つの建物は、金竜海にぽっかりと浮かぶように立っていたようです。そしてこちら…」

村野は、天に向かつて悠然と枝を広げ、風に葉をなびかせているご神木のえのき「榎」を見上げた。それに合わせて大地たち修行者も榎えのきに目を移した。

「大本は大正十年と昭和十年に、国家から不当な弾圧を受けました。昭和十年の第二次大本事件では、今ご案内した建物をはじめ、苑内の全ての建造物がごとごとく破壊されました。そんな中で唯一、この榎えのきだけが難を逃れ、残ったのでございます。」

この榎えのきは当時、四方源之助という方の家の中庭にございました。四方源之助さんは前綾部市長のおじいさまで村の世話役をされていたそうです。

榎えのきには八百万やおよろずの神々さまが宿つていたとのこと、開祖さまは『たくさんのえらい神さんがおられるのやで』とおっしゃっていたそうで、大本ではご神木でございます。樹齢約百六十年、高さ十八メートル…、今はもう少し高くなっているかと思います。

ちなみにあの“みろく殿”の屋根が二十一メートルですからね。

皆さん、榎の実えのきをご存じでしょうか？」

村野が丸山の方へ目を向けた。

「いや、知らないというか、気にしたことがなかったですなあ」

視線を感じた丸山が即座に答えた。大地も首をかしげた。

「まあ、そうでしょうね。ちょうど山椒さんしょうの実のようになるのですが、秋になると赤い小さな実をつけます。二代さまはこの実に、金の龍きんりゅうの夫：『金龍夫きんりゅうぶ』と名付けておられます。

はい、では皆さま、もう少し前に来てください。榎えのきさんの前でお待ちさせていただきますしよう。こちらで天津祝詞を奏上いたします。『ご神号奉称』はございません、
惟神靈幸倍かなながらたまはえませ“だけです。では先達を……”

と言いながら、村野は修行者の顔を一通り見回した。

「えつ、村野さんが先達するじゃないんですか？」

大地は、丸山に小声で訊きいた。

「彼女はいつも誰かに振るんだよ、交代でね」

「そうなんですか」

「やっぱりトップバッターは、年長者の丸山さんかな」

村野が指名した。

「ほら来た」

「ほんとだ、半強制的ですね」

大地は小声で言った。

「では丸山さん、こちらへ。よろしくお願いします」

「心得ました」

そう言うとう丸山は一同の前へ進み、榎前^{えのき}にある八足の中央へ進んで先達を務めた。

一同、丸山に合わせて天津祝詞を奏上した。

真夏の日差しが強いものの、時折頬に当たる風が心地良く、神苑の木々にしがみついて声を限りに鳴くセミの声も、一緒に祝詞をあげているようにも感じられた。

「丸山さん、ありがとうございました。では皆さま、続いて参りましょう」

村野は榎^{えのき}の右手の方へ歩を進め、三角形の大きな石碑の前で立ち止まった。

「はい、これは見てお分かりですね、『梅松苑碑』です。ここ綾部市本宮町一番地の大

本本部の神苑全体を梅松苑といいます。梅松苑は第二次の弾圧後、事件解決奉告祭が行われた昭和二十年十二月八日に聖師さまがご命名になったのですが、さて、この文字を書かれたのはどなたでしょうか？」

村野が誰ということなく質問し、全員の顔を見回した。

「四代さま？」

村野と目が合った一人の婦人が小さな声で言った。

「そうです、四代教主さまです。正解して良かったですね」

答えた婦人は、胸をなで下ろしたような笑顔を返した。

「で、四代教主さまのこうした碑は、綾部のここにしかありません。全国でも、これだけだそうです。ですから、とても貴重なのです。」

それで梅松苑はどういうところかというところ……天国の様子を地上に移写されたところで、天国の中でもおまつり……祭祀のありようを移されたところだということです。

私は最初、綾部は何となくホワーンとしているから天国かなあ～と思っていましたが、そうではなかったんです（笑）。天国を移写されたからなのです。

私たちは今、そこを歩かせていただいているわけです。そしてこの神苑には、神さ

まがいつぱいいらっしゃいまして、私たちがこうして歩くときには、神さまが道をあけてくださっているそうですね。ありがたいことですね。どうですか、見えましたか？丸山さん」

「いえ、見えません」

丸山が即答した。

「はい、私も見えません（笑）」

村野の返しに、笑いが起こった。

「では質問しますよ。この文字をお書きになった方は？」

村野が石碑を指さし、さらに一段大きな声で言った。

……なんだ、復習か。

いきなりどんな質問が来るのかと身構えていた大地は、少しホッとした。すかさず数人が声をそろえて答えた。

「四代教主さま」

「はい、四代教主さまですね。お懐かしい四代さまを、皆さまお忘れにならないようにお願いしますね。はい、それでは次はこちらへ…」

村野の演劇風のテンポある話し方が調子よく、つい引き込まれていく。

…面白いなあ。

大地がそう思う間もなく、村野は皆を促し、軽快に草履の音を響かせながら先へと進む。大地たちも遅れじと、村野のあとに続いた。

元屋敷

「はい皆さま、こちらまでお越しください」

梅松苑碑の西側、檜垣の手前の苔むした一角で村野が立ち止まった。

「ここはその昔、開祖さまがお過ごしになった出口家のお住まいがあったところで、『元屋敷』と呼ばれている場所です。明治二十五年旧正月、節分の夜に開祖さまがご帰神され、後にお筆先を啓示された由緒深い『大本発祥の地』です。大本はここから始まったわけです」

…そうか、ここが大本の発祥の場所なのか。

大地は心の中でつぶやいた。

「開祖さまは、福知山のご生家、桐村家からここに嫁いで来られました。ご養子先の出口家の大きなお屋敷が、かつてこの一帯にありました。当時はもともとと広かったわけです。ところが開祖さまがご結婚されて間もなくのこと、ご一家の生活は困窮を極め、田畑は人手に渡し、家財道具も次々に持ち出されます。そして暮らし続けた屋敷もとうとう売らざるを得なくなり、最後にはわずかな土地だけが残ったのです。さて、ここである方もお生まれになりました。どなたでしょうか？」

村野は目の前の修行者を見回しながら訊ねた。

「二代さま…かな」

馬淵光彦が小さい声で答えた。

「はい正解です、出口すみこ二代教主さまですね。二代さまは開祖さまご夫妻の八番目のお子さん、末っ子としてお生まれになりました。その時に産湯として使われたのが、元屋敷もとやしきの中央にあるこの『銀明水ぎんめいすい』の井戸です。

二代さまが後に書き残しておられるご著書『おさながたり』には、その当時、四十八坪の土地だけが残っていたとあります。

また、聖師さまはこの土地について、『古来坪の内つばうちと称し、平素空地あきちであつて作物もせず、建物もせず、人々の手を出さぬ所であつた』と示しておられます。神さまがそのようなさつていたのですね。

ちなみに、“坪の内”というのは、“建物や塀に囲まれた狭い庭”という意味があります。お茶室の庭のことを“露地ろじ”と言いますが、もともとは狭い路みちの地ということで“路地”と呼ばれていたようです。さらにそれ以前には、茶室に付随した狭い庭ということで“坪之内”と呼ばれていたみたいです」

「坪の内って、そんな意味があつたんですか。知りませんでした」

丸山が感心した表情で言った。

「はい、そうなんですよ。その坪の内の空き地に、明治九年、開祖さまと夫・政五郎さんご夫妻は山から材木を運ばれて、ささやかな藁葺きわぶきの家を新築されました。皆さん、講座で聞かれたように、政五郎さんは腕のいい大工さんだったわけですからね。でも、その建物は畳の間が二部屋と、二畳分の板の間と土間だけの小さな家でした。この時に、庭に井戸も掘り上げられました。それがここにある井戸で、後に『銀明水』ぎんめいすいと命名されたのです。

それから七年たった明治十六年の節分に、二代さまがお生まれになったのですが、その時にはすでに家の壁は破れ、屋内には吹雪が吹き込むような惨憺さんたんたる状態だったそうです。

今から数年前、その『元屋敷』の復元模型が製作されましたが、それを拝見すると、なるほど質素なおうちであつたことが分かります。丸山さん、ご覧になったことありますか？」

「はい、一度見ました。確かに質素な家でしたなあ」

丸山が記憶をたどるようにして言った。

「二代さまがお生まれになってからの出口家のご生活はとても苦しいものでした。まさに赤貧せきひんの状態だったわけです。運悪く夫の政五郎さんは、現場の庇ひさしから落ちて半身不随になって寝たきりになられ、途端に収入がなくなってしまう。開祖さまは四女のりようさんを背に、二代さまを懷に抱かれながら、毎晩遅くまで四升のお米を石臼で粉にひかれて、饅頭まんじゅう作りをされていました。次男の清吉さんがその饅頭を売りに歩かれ、家の軒先にも饅頭を並べて、開祖さまが子供をあやしながら売られていたのです」

……ここで饅頭を作っておられたのか。どんな饅頭だったのかなあ。

大地の知識では、想像することも難しかったが、大本の歴史が少し身近に感じられた気がした。

「それでも、饅頭売りだけでは生活が成り立たず、とうとう行き詰まってしまわれます。そこで明治十九年から、開祖さまは資材も資金もいらなかった紙くず買いを始められたんです。今の言葉で言うと『古紙回収業』でしょうか。開祖さまは朝早くから夜が

更けるまで、子供たちを家に残して働かれました。

後に神さまは、この紙くず買いは、神界からのお仕組みでさせられたもので、もとの正しい神々さまをひろい集め、世にお出する型であったと示されています。ペーパーのカミが、神さまのカミに通じていたわけですね」

…そんな型があるのか。

大地は不思議に思った。

「この時、二代さまはまだ三歳です。夜遅くなると、留守番をしていた幼い姉妹は心細くなり、家の外に出て、開祖さまのお帰りを待っていました。やっと開祖さまがお帰りになると、清吉さんや三女のひささんが手伝って、紙くず、ボロ布、毛類とより分ける作業をされました。

このような仕事は、現代の廃品回収のようなことではなくて、当時の社会では資源を再利用するリサイクルシステムとしての仕事としてあったそうですね。しかしながら当然、そんなに稼げるものでもありませんでした。

ということで、開祖さまはそれらをお金に換えて、わずかな利益で少量のお米を買い求められて、一家六人を養われていたんですね。これは今の私たちには想像もでき

ないようなご苦労だったと思います」

見ると近くにいた梯かけはし洋子は、真剣な顔つきで何度も小さく頷うなずいている。講座の中でも紹介された話であつたが、元屋敷もとやしきという現場で聞くと、さらに深く心に響くものがあつた。

「そんなお母さんのご苦労に日々接しながらもみじめな生活が続き、ある時ひささんが、こんなことをつぶやいてしまいました。

『お父さんもあんなにして生きとつてんよりも、いつそのこと亡くなられた方が楽であらうに』

すると開祖さまは怖い顔をされて、『世界中お前が鉄の草鞋わらじで探しまわつても、お前のお父さんという人はこの人一人やないか。病人は、世話するものが飽いたら死ぬということがある。私はまだ病人の世話には飽いとらん。生きておられる間に大事にしとかなんだら、死んでしまつてから涙が止まらぬことがある。お父さんのもの一つ見ても、もう少し孝行しておきたかつたと思ひ出して泣けるで、生きておられる間に充分に孝行してさえおけば、後悔が残らぬものじゃ』と、諭されたそうでございます。開祖さまの深い愛と慈しみの心が偲しのばれるエピソードだと思ひます」

村野の語り口調に、大地たちも神妙な表情で聞き入っていた。

「病床の政五郎さんは、最初わがままを言っておられたそうですが、だんだんと開祖さまのお心に感謝されるようになり、後には紙くず買いに掛けられる開祖さまの後ろ姿を寢床から、震える手を合わせて伏し拝まれていたそうです」

しみじみと語る村野だったが、急に明るい声になって、馬淵の方に目をやった。

「馬淵さん、奥さまに手を合わせたことはありませんか？」

「えっ、いきなりですね、どうでしょう？ お小遣いの値上げをお願いするときに、手を合わせたかも……」

馬淵の切り返しに、小さな笑いが起こった。

……馬淵さん、ナイス。

「あら、失礼しました。くれぐれも奥さまを大切にしてください。皆さまもね」

「はい、もちろん」

丸山が即答した。その答えに笑顔で軽く頷いたかと思うと、村野はすぐに口調を変え、また真剣に話した。そのしゃべりの変化がまた、一同の集中力を高めるようであった。

「そしてほどなく、政五郎さんは明治二十年に六十一歳でご昇天になつてしまいました。開祖さまは深い悲しみの中で、こうおっしゃったそうです。『生命いのちは助けていただけんでも、せめてもう少しお世話がしたかった』と…。何とも深いお言葉ですね。

そして五年後、いよいよ開祖さま五十七歳の明治二十五年の節分の夜、最初のご帰神があつたのでした。文字を読むことも書くこともできなかった開祖さまが、神さまが命じられるままに、筆をとつてお筆先を書かれたのです。

一連のことは『大本の開教』の講座でお聞きになつていらっしゃると思いますので、あらためては申しませんが、このように、さまざまな“ドラマ”の舞台となつたのが、ここもとやしき元屋敷でした」

村野の流暢な説明に、一同は頷うなずきながら耳を傾けていた。

「開祖さまはひたすら世の平安を祈り続けられました。生涯のご苦勞は並大抵のことではありませんでしたが、決してご自分のことを祈られることはなかったそうです。世界のため、人々のため、“世の大難を小難に、小難を無難に”という祈りに徹しておられました。この祈りのあり方が、私たち大本信徒の祈りのお手本です。

皆さまもせっかく大道場修行にいらっしゃったのですから、今日は父ちゃん、母ちゃん、子供のこと、家のこと、自分のことはちよつと忘れて、祝詞奏上の時には世界平和をお祈りいただきたいと思います。よろしいでしょうか？

…おや、皆さん、神妙なお顔をされていますね」

笑いを誘いながらであつたが、村野の言葉には妙な説得力があつた。

…分かりました。

大地も心の中で頷うなずいていた。

金明水

「では皆さん、回れ〜右！ 前へ〜、進め！」

村野は、体育教官調で発声。また笑いが起こり、大地たちは自然と、その掛け声通りに動いた。

「はい、ストップ。行き過ぎた人はバックしてください」

村野はそう言いながら、すばやく一同の近くまで走り寄り、説明を始めた。

「こちらが金明水の井戸です。さて、どなたの産湯に使われたでしょうか？」

「三代さまです」

すかさず馬淵が、今度は自信ありげに答えた。

「はい、正解。そうですね、三代教主さまの産湯に使われたのが、この金明水です。先ほどもご紹介しましたが、大本が開教したころ、この辺りには大島景僕けいぼくさんという方の屋敷がありました。この井戸もその敷地内にあつたものです。

さて皆さん、初日の講座で聞かれたことと思いますが、大本の草創期に一連の“出修しゅつしゅうの神事”があつたことを憶おぼえていますか？ 憶おぼえている人？」

村野は拳手を促すように、すばやく自分の右手を上げた。それにつられる者はなかつたが、大地ら数人が、少し間を置いて小さく手を上げた。正直、大地は自信がなかつたが、とりあえず場の雰囲気を読んでそうした。中には首をかしげる人もあつた。

「あら、手の上がってない方もありますね。どういうことかしら？ 講座中、夢の中でしたか？」

また笑いが起こつた。

「大本には、独特の祭儀である“出修しゅつしゅう”という神事がありました。聖師さまが大本入りをされた翌年の明治三十三年旧七月、開祖さま、聖師さま、二代さまによつて、”

冠島開きと杳島開き”の出修の神事が行われましたよね。

そして、その翌年の明治三十四年四月、「元伊勢お水のご用」の出修の神事がありまして、丹後の元伊勢にある、産盥・産釜からいただいた清らかな「水晶のお水」が、この井戸に注がれました。

この出修の神事が行われる前には、「世界広しといえども、生粹の水晶のお水というのは、元伊勢の天の岩戸の産盥、産釜のお水よりほかにはないので、その水晶のお水を汲んで来ねばならぬ」という意味のお筆先が出ていますし、良の金神の指示でないと、このお水は滅多に汲みには行けんのであるぞよ。この神が許しを出したら、どこから指一本さえるものもないぞよ」とも示されています。

それから同じ年の七月、開祖さま、聖師さま、二代さまご一行は、今度は島根県の出雲大社にも行かれて、ご神火と清水と社の砂を持ち帰られています」

…あゝ、確かそんなお話を聞いたような。大地は、初日の講座を思い出していたが、やはりうる覚えだった。

一連の村野の説明は、聖師さまの「わが半生の記」（『出口王仁三郎全集』第八巻）をもととしていた。それが以下の文章である。

明治三十四年旧五月十六日、出口開祖はじめ上田会長（聖師さま）、出口澄子（二代さま）、四方平蔵、中村竹造、内藤半吾、野崎宗長、木下慶太郎、福林安之助、竹原房太郎、上田幸吉、杉浦万吉等一行十五人は、皐月の曇った空を目当てに、徒歩にて出雲の大社へ神命を奉じて参拝することとなった。……（大社にて）二、三日逗留の上、神火と御前井の清水、社の砂を戴き、二個の火縄に火をつけて帰途につき……又もや山坂を越えて、旧六月の四日、福知山まで数百人の信者に迎えられ、ようやく綾部へ歸つて来た。……

それからその火を百日間埋み火として役員一人が昼夜保存し、百日目に十五本の蠟燭に火を点じ、天照大御神さまへ捧げることとした。また砂を本宮山や龍宮館の周囲に撒布し、三、四方所の井戸に水を注ぎ、大島の井戸へ天の岩戸の産盥の水を一緒にしてほり込み、金明水と名をつけたのである。その水を竹筒に入れ、その年の六月の八日に開祖は会長、澄子その他四十人ばかりの信者と共に杳島へ渡り、その水を海に投じ、この水が世界中を廻った時分には日本と露国との戦争が起こるから、どうぞ大難を小難に祭りかえてもらうように、元伊勢のお水と、出雲のお水と龍宮館のお水と一緒にして龍神さまにお供えするといって、祈願をこめて歸つて来られたが、それ

からちようど三年目に、日露戦争が起こったのである。……

村野はこの聖師さまのご文章をかみ碎き、“出雲火のご用”や元伊勢の水晶のお水が、この井戸に注がれたあとに金明水と命名されたことなどをかいつまんで説明した。

「元伊勢の水晶のお水が注がれた金明水は、国祖ご退隱の地・杳島めしまと冠島おしまの中程ほどの間……大本で“竜宮海”と呼ばれている海域に注がれ、世界を清める重要なご神業に用いられました。なんとそれからちようど三年目に、日露戦争が起こったんですね」

……そうそう、日露戦争のことも講座の中で聞いたような気がするぞ。
大地は、記憶をたどっていた。

「このお水は、今に京都、大阪からももらいにくるようになる」とお筆先にあり、実際今、その通りになっていますね。

“そんなことは珍しいことじゃないんじゃないの”……と思われるかもしれませんが、そのころの交通手段からすると、綾部から見ると、京都や大阪もかなり遠い所でしたから、きつと“ホントかな？”と思われた人もあつたでしょうね。でも、今では全国

の多くの方々が金明水を持ち帰られ、おかげをいただかれています。ねえ、丸山さん」
村野が丸山の方に目をやった。

「そうですよ。私の周りでも、金明水のご神水でおかげをいただいた人が何人もおられます。とてもありがたいお水です」

丸山が言った。

「そんなありがたいお水ですが、実はあのみろく殿前の大きな手水鉢ちようすのお水は、この金明水の井戸から汲くみ上げて送っているものです。手水鉢ちようすの後ろには、蛇口が設置してあって、そこからも金明水を汲くむことができます。ですから皆さん、いつでもいただくことができるんですよ。実際、綾部の市民の方や、信者さんでない人も汲くみに来ておられます」

村野の説明に、手水ちようすとして使っている水が金明水であることを、初めて知ったように驚く修行者もあった。

「それから、長生殿やみろく殿などでの朝夕拝のお給仕や月次祭でお供えするお水も、金明水を使わせていただいているんですよ。ですから、老松殿のご神前でいただけるご神水は、神さまにお供えしたお下がりの金明水です。あとで夕拝に参りますが、皆

さまざまご神水をいただいて、しっかりと神徳をお持ち帰りくださいね」

「はい」

丸山が元氣よく返事をした。

「昭和十年の第二次大本事件では、先ほどの榎えのきだけが残って、あとはすべて破壊され、この一帯はグラウンドになっていたということをお話ししましたが、事件後のことです。開教六十年を翌年に控えた昭和二十六年の七月十八日、この綾部の神苑復興の手始めに行われたのが、金明水の井戸を掘り上げることだったのですね。

当時ご奉仕していた若い人たちは張り切りました。地面は埋められて元の敷地よりも高くなっていました。苑内の様子が変わって、井戸の場所もすぐには特定できず、古い図面や写真、それぞれの記憶をたどって掘っていったんだそうです。

七月も半ばですから、きつと暑かったでしょうが、女の人たちも立ち交じって作業をしていったそうです。

するとその日の夕方、一点ポコッと穴が開いて「見つかったぞ」と声が上がったのです。さらに一鍬くわ打ち下ろすとカチツと音がして、井戸枠の一部が顔を出したんです。「あった！ これだこれだ」とみんな大喜び。十五年もの間、土中に埋もれていた金

明水の井戸が、再び現れた瞬間でした。

さっそく亀岡におられた二代さまに電話でご報告したそうです。二代さまもさぞお喜びになったことでしょうね」

まるで見て来たかのような村野の語り口調に、大地たちも話に引き込まれていった。

「翌日も作業を続けると、出るわ出るわ、石燈籠いしどうろうのような大きなものから、石のお宮の一部、神具かむらけや土器のかけらがザクザクと出土したのです。それらがうず高く積みれるほどでした。

それに加えて、百個にはなると思われるほどの聖師さまのお手造りの楽焼き茶盃わんの破片が出てきたんですね。その中には、奇跡的に完全な形のお茶盃わんもあったそうです。ほかにも大本の歴史上、貴重な品々もいくつか発見されました。

ちなみに、その時の記事が当時の機関誌「愛善苑」に掲載されていて、その中に、団扇うちわを持たれた飛びきり笑顔の二代さまのお写真が掲載されているんです（前頁カット写真）。その写真説明には“出土品をご覧になる苑主”と記されています。

そのお顔を拝見すると、思わずうれしくなって、こちらも笑顔になるんです。当時

の人たちは、本当に大きなご用をなさったんだなあ、としみじみ思います。皆さんは今、こうして美しくてすがすがしい神苑をゆつくり拝見させていただけるわけですが、その陰には先人の方々の献身的なご奉仕の力があつたらばこそなんですね」

村野がしみじみと語った。

…ありがたいなあ。

大地の胸に、じんわりと熱い気持ち湧いてきた。見るとほかの修行者の表情にも、同じ思いが表れているようだった。

みろく殿

「では皆さま、みろく殿の方へお戻りください」

村野が促した。大地たちは、梅松苑碑の前を通り、榎えのきの前まで戻ってきた。気温もだいぶ上がってきたようで、蟬せみの鳴き声が一段と賑にぎやかになっているように思えた。

「皆さまよくご存じのみろく殿です。大きいですねえ。このご神殿は、第二次大本事件が解決し、大本が再発足してから初の神殿建築物です。

ですから、両聖地の中で現存する神殿では最も古い建物ということになります。

平成四年に長生殿が完成するまでの四十年間、みろく殿は綾の聖地の中心神殿として、数多くの歴史的な祭典が執行されてきました。

現在は、『祖霊殿』として、大本信徒の先祖をまつる『祖霊社』や、戦争や災害、不慮の事件・事故などの犠牲となった世界の多くのみたまをおまつりする『万霊社』があり、とても大切な『みたままつり』が日々厳修されています。

あの玄関の扁額へんかく『弥勒殿』は、事件前の旧五六七殿内の拝殿正面に掛けてあった聖師さまご揮毫きごうの書を写真複写で縮小し、檜ひのきの板に彫ったものです。ここからだとなに大きくないように見えますが、おおかた畳一枚ほどの大きさがあるんですよ」

…そんなにあるのか。

大地はちよつと驚いた。

「みろく殿は、拝殿だけでも七百八十九畳敷きの広さで、鉄骨材と木材を巧みに組み合わせて建てられております。そして、平成二十六年四月二十五日に、正式に国の登録有形文化財に登録されました。〃物資不足の昭和二十年代によく工夫された大建築物〃との評価を受け、文化財の登録となったんですよ。おめでたいことですね」

…へえ、みろく殿って、文化財なんだ。

「現在のみろく殿は、二代さまのお言葉によつて建設が始められ、昭和二十八年四月に大神さまをお祭りする神殿として完成しました。残念ながらその約一年前、二代さまは完成をご覧になる前にご昇天になりましたが、建設前にはみろく殿を建てる意義を訴えておられました。

当時は戦後の物資不足はもとより、信者さんたちもその日の生活に懸命だった時代でした。ですから当然教団の財政も厳しかったわけですね。事実、昭和二十五年の年末には、当時の金額で百二十万円の赤字決算が見込まれていて、秋に開かれた全国の

支部長会議で、その窮状が報告されていたんです。

教団の執行部も、できるだけ信者さんに負担を掛けたくないと思っていたようで、無理に神殿を建てなくてもいいのでは…という考えが主流だったようです。

それでも、二代さまは、みろく殿を建てる意義を信徒に訴えておられました。それは神さまがぜひともと望んでおられるから…というものだったんですね」

と説明しながら、村野は昭和二十五年八月二十五日の瑞生大祭で、参拝者に対して述べられた二代さまの以下のお話の要約を、綾部弁を交えながら語り口調で伝えた。

「どうしてもここに宮（みろく殿）を建てたいのや、これはみんなして、たとえ十円ずつでも誠の者がさしていただいたらできるのや、そのつもりでたと働いて始末して、ためておくんなはれや、頼みます。（中略）

次々と皆にはご苦労じゃが、遠慮しておったり控え目に言うておつたら、神の思惑たとんと神さまが言うてんのや、人間心を捨ていと言うてんやさかい（後略）」

〔愛善苑〕昭和二十五年九月十五日号

…神の思惑がたとんと神さまが言われているって、なんかスゴイなあ。

大地が胸の内で呟いた。

「さあ、このお言葉ですぐに建設計画にかかりました…、と言いたところなのですが、なかなかそこは、執行部も信徒に負担が掛かることを懸念して、すぐには腰を上げなかったようです。丸山さん、どう思います？」

「まあ、赤字決算だと、普通はためらってしまうでしょうなあ」

丸山がポツリと言った。

「ですよね。で、結局、計画が前に進みだしたのは、七カ月もあとだったそうです」

「ほほお」

「それもですよ、綾部市長から、舞鶴の旧海軍航空隊が使用していた飛行場の鉄骨の建物を払い下げてもらってはどうか、という提案を受けたからだっただけですね。

で、それはいいね、ということになったわけです」

「村野さん、なぜ綾部市がそんな提案したんですか？」

「いい質問ですね、丸山さん」

村野が返した。

「実は、その一年前、綾部市が水道施設を計画するに当たって、どうしても本宮山の一部を使用させてほしいと大本に申請があり、二代さまがこれを快諾なさっていました

た。本宮山では当時、その上水道工事が進められていたんですね。それで執行部がその見返りに、飛行場の建物、…飛行機の格納庫が何かでしょうか…、それを綾部市に購入してもらって、大本に払い下げてもらえないかと願い出たわけですよ。要は交換条件だったわけですね」

「なるほどね」

丸山が頷いた。

「ところがですね、待てど暮らせど、一向に話が進展せず、半年後の十月の月次祭の夜、業を煮やされた二代さまが、みろく殿建設についての強烈なお言葉を述べられたのです。それをもつて、教団の空気が一変することになりました」

村野のジェスチャーを交えた語りに、大地も身を乗り出すような気持ちになって耳を傾けた。例によつて村野が少し間を置いてから、以下の二代さまのお言葉を、緩急付けて語った。

「これから先、世界に大本の道がひろがって、人がドシドシ来たりすると、この祭（月次祭）でさえ一杯いっぱいやのに、節分には寒い外に立ってお礼をせんなんから、みろく殿が早

う建たんとかなわんわい。しかしそうかといって金がないわい。こういうても仕方ないし、建てかけたら出来るのや。(中略)

あの頃(旧五六七殿建設当時)には信者がなかったやろ、それでいて始めて、あんな立派なものに出来上がったのや。今のように、大本のたくさんの信者が全国に何万というほどこいて、みろく殿一つもよう建てんようでは、ヘン笑われるでつ。(中略)

とにかくみろく殿を建てるには、金はあらへんわ。そこをするのが神さまのご都合や。

(中略)

もつとはげみなはれ！」

〔木の花〕昭和二十七年十一月号

「当時、二代さまのお言葉を直接伺った信徒は一樣に、神さまから“一喝”をいただいたようだったと思つたようです。そして、そこから一気に気合いが入つたそうですよ」

「それはそうでしょうなあ」

丸山が頷きながら言つた。

「それで、軍の資材の払い下げ…、つまりは中古物件を諦めて、新しい資材で建てる方向へと根本から一変し、一気にみろく殿建設の盛り上がりを見せるようになったの

でした。めでたし、めでたし……です」

「まあ、でも、国祖の大神さまをお祭りするのに、中古物件じゃ申し訳ないですなあ。ましてやこの綾の聖地の中心的神殿でしょ。神さまが許されなかったんじゃないかなあ……って、独り言ですよ」

丸山がそう言っていると、馬淵も、そうだそうだと言わんばかりに相槌を打った。

「……ですよ。それによくよく考えたら、二代さまが一喝された時期は、ご昇天になる半年前のことなんですよ。きっと二代さまはもう、時間がないということもご存じだったのではないでしょう」

村野がしんみりと呟いた。

……あつ、そういうことか。

大地はあらためて、神さまの言葉……神意が、教主さまの口を通じて伝達されたという事実に気付かされた思いがした。

「さて、いよいよみろく殿の建設計画が決議され、方向が定まってスタートしました。秋の大祭では二代さまが再び、『貧しくなっても神さまはあとで万倍にして返されるのや。(中略)しっかりして働いて、なんばでもご用をしな、ひっこんでいたらあかんで!』

とおっしゃって、会場から笑い声とともに、大きな拍手が湧き起こったということでした」

「さすが二代さまですね」

馬淵が言った。

さらに村野は話を続けた。

「ようやくみろく殿の造営局が発足したのは、昭和二十六年の末のことです。その後、京都府の建設許可がわずか五日という異例の早さで下りたとか、危うい事故も間一髪で人命に及ばなかったという奇跡的なおかげをいただいたとか、いろんなエピソードがあつたようですが、今日は時間もありませんので、省略します」

…アララ。

「ただ、残念なことに、二代さまは工事が始まってしばらくした昭和二十七年の三月中旬から、ご病氣のために、亀岡・天恩郷の瑞祥館でご静養に入られました。

その月の二十八日には、みろく殿の上棟祭が行われましたが、祭典では、三代さまのご先達で神言が奏上され、餅撒きが行われ、大勢の参拝者で賑わったそうです。二

代さまは、『今日はみろく殿の棟上げだな。今頃は餅を撒まいているだろうなア』とおっしゃって、やがて床の中で、棟上げの音頭を歌われたそうです。

その三日後、昭和二十七年三月三十一日、二代さまは、安らかに天津御国あまつみくにへとお帰りになりました。急な訃報にみろく殿建設の作業員は工事を中止し、翌四月一日から十日のご葬儀まで、二代さまの奥都城造営おくつぎに全員で着手することになりました。

道統を継承された三代教主さまは、『私はひたすらに、教祖たちの残された教えと母の念願のみろく殿を、りっぱに再建したいとねんじております』と機関誌上で発表され、一年後、昭和二十八年四月のみろく大祭に併せて、みろく殿完成奉告祭が執行されました。

それが今、皆さまの目の前に立つ、このみろく殿なのです」

…そんなドラマがあつたのか。

大地は、村野の話に胸が熱くなる思いで、懸魚げぎょに輝く十曜の神紋を見上げていた。

金竜海

「では皆さま、金竜海の方へ参りましょう」

村野の声に、一同がみろく殿前から金竜海へ向かつて歩きだした。

おおやしま 大八洲神社を正面に拝する遥拝所ようはいまで来ると、例によつて村野が先達を指名した。

「では、次は…、馬淵さん」

有無を言わせなかった。丸山は…ナイスチョイス…と思い、小さく拍手をしながら、大きく頷うなずいた。

「分かりました」

馬淵は遠慮気味に前に出た。

おおやしま 「大八洲神社でのご神号は、おおもとすめ 大本皇大御神です。では、よろしくお願いします。はい、

皆さんも、もう少し前に来て」

村野の手招きする仕草しぐさで一同が何となく整列し、心静かに礼拝を行った。

「巡拝では、あと二カ所でお参りしますので、馬淵さんよろしくお願いしますね」

「はい、了解しました」

馬淵が答えた。

指名されたらどうしよう、と思つていた大地は、ホツとした。

「向こうに鎮座しています大八洲神社は、みろくの大神さま、そして巖の御霊、瑞の御霊をお祭りしています。初日の講座の中でもご紹介があつたかと思いますが、大正五年に、聖師さまによつて今の兵庫県高砂沖の神島で“神島開き”が行われ、この世を陰から守護されていた“坤の金神さま”を綾部にお迎えし、当時の金竜海の大八洲に造営された大八洲神社にお祭りされました。坤の金神さまは、“天のみろくの大神さま”です。

修行を終えられた皆さまは、最後に、この大八洲神社のみろくの大神さまに、み教えを頂いた御礼とみろくの世建設のお手伝いをお誓い申し上げるために、あそこにある…」

村野は左手の方に目をやり、金竜海の舟屋に係留してある小舟を指さした。

「“りゅうぐうまる”に乗つて、お参りさせていただきます。明日は、良いお天気だそうですね、渡ることができるとしよう。皆さんの日頃のご精進の賜物ですね」

「ありがたいですねあゝ」

丸山がしみじみと言った。

「さあ、では先へ参りましょう」

村野が歩を進め、また直ぐに立ち止まって振り返り、両手を横に広げた。

「この金竜海は、大正三年から三年間かけて築造されました。世界の五大州のひな型として造られ、こちらには沓島・冠島神社もあります。この右手の二つの島がそうですね。さあ、どちらが沓島でしょうか？ 分かる人」

「え〜と、確か…、冠島じゃない方です」

「そう、冠島じゃない方ですね…つて、コラ、また丸山さんは…」
笑いが起こった。

「正解は北側、手前の島が沓島ですね。遥拝所から見ると、手前が冠島で奥が沓島になるわけです。覚えておいてくださいね。」

そうして、沓島・冠島を除く、この金竜海とその周辺で、世界の五大州のひな型になっているわけです。さて、どんなひな型か、言えますか？ はい、今立っているところは…」

「ユーラシア大陸ですか？」

馬淵が答えた。

「はい、そうですね。ここ…金竜海の周辺が、世界で言えばユーラシア大陸。日本で言えば本州の型です」

「あの…」

「はい、何でしょうか、雨宮さん」

大地が質問した。

「金竜海は、この大きなのに、池でもなく堀でもなく、どうして海なのですか？」

「そうですね。普通だったら、湖やお堀よりも小さいですから、確かに池ですね。でも、お筆先の中にも『此の大本にありたことが、世界には皆でて来るぞよ』とあるように、大本は世界の鏡、型を出す尊い霊的な地場だと示されています。

そして、この金竜海は、聖師さまが高熊山ご修行の折、霊界でご覧になった信州の皆神山から見た麓の様子を型取り、そのご指示によって世界の国土の型として作られたのです。ですから、世界の“海の型”でもあるんですね。

実は、大正時代の開掘の時に、実際“金竜池”と呼ぶ信徒もいたそうです。それを耳にされた開祖さまは、

『そんな小さな池ではない、金竜海やがな、この海には八百万やおよろずのご竜体の神々さまが

皆お集まりなさるのやから、人間から見たら泥水でも、神界から見たら金の水になっているのや』

と、おっしゃったそうですよ。靈的には、きっと広い海洋なのでしょうね。そういう大きな気持ちで、この金竜海をご覧くださいね」

「はい、分かりました」

大地が頷いた。

「で、さきほどの大八洲おおやしまが、アフリカ大陸と九州のひな型です。その南側の六合大島くくひろしまが北アメリカ大陸、北海道。そのまた南側、塩釜神社あたりが南アメリカ大陸と台湾に相応します」

「以前から思っていたのですが、塩釜神社は島ではないですよね」

馬淵たすが訊ねた。

「そうですね、今、塩釜島は陸続きになっていますね。でも実は、事件前の神苑案内図を見る限りでも、やはり、陸続きになっているんですね。ただ、塩釜神社のところから六合大島くくひろしまへは“天浮橋”という小さな橋が掛けられていたようです」

「そうでしたか、分かりました」

馬淵は納得した表情ではなかったが、小さく頷いた。うなず

村野は、あらためて話を始めた。

「大正三年から始まった工事は、すべて聖師さまのご指示で進められましたが、金竜海がある場所は、町の高台になっています。ですからいくら掘っても水が出る気配はないわけで、当然、町の人たちからは、あんなところに大きな池を掘って池の水はどうするんだろうねえ、ってバカにされたんですね」

…それはそうだろうなあ。

大地もそう思った。

「一年掘っても、二年たつても水が出てこないとなると、さすがに池を掘っている信者さんたちも、だんだんと不安になってきますよね。やる気も薄くなってくる。

そんな冬のある日のこと、聖師さまが工事を進めるよう指示して出掛けられました。ところがその日の夜、帰苑されてみると、工事が予定通り進んでいなかった。さあ大変、聖師さまは激怒されました。夜中に老人、婦人までもたたき起こして、みぞれが降る中、作業をしたこともあったそうです。とにかく、神命第一だったわけですね」

村野がしみじみと語った。

「そうして三年がたち、ようやく五大州の島々がほぼ完成しました。でも、いっこうに水が出る気配はないわけです。ところがです…」

村野の声がひととき大きくなった。

「なんとそこへ綾部町から、大本へ申し出が来ました。それは当時、町が整備していた水路を大本の敷地内に通させてほしい、というものでした。

こうして、金竜海は、満々と水をたたえることになったわけです。めでたし、めでたし」
修行者の中からは、ほお、という声が漏れてきた。大地も初めて聞く話に感激した。
…すごいなあ。

「しかし、そうした苦勞の末に出来上がった立派な金竜海も、それから二十年足らず、昭和十年の第二次大本事件で、無残にも埋め戻され、何と郡設のグラウンドに変わってしまいました」

つらい話に、大地は心の中でため息をついた。

「でも、事件後の昭和二十三年元旦から、埋められた金竜海の再掘が始められ、島々を復元するため、全国から大勢の信者さんたちが食料持参で駆け付け、手に手に道具

を取って掘り続けました。

そして、全体がおおよそ元に戻り、最後に大八洲神社おおやしまが完成し、作業開始から三年後、金竜海が復元されました」

「めでたし、めでたし」

「もう丸山さん、私のセリフを取らないで」

「失礼……。でも、昔の信者さんたちは本当にすごいですなあ。そのおかげで、こうして今の私たちは、このすがすがしい聖地で、ゆっくりお参りさせていただけるわけです」

「ほんとにそうですね」

馬淵も同調した。

「ところが、その復元作業でも、なぜか大和島やまとだけがないまま、半世紀以上がたっていました。それで現教主さまが、開教百二十年の先駆けの事業として、『玉水の泉』と『大和島』の復元を指示なさいました。そうして、平成十七年の十一月、大本開祖大祭の日に『大和島』が完成し、この松造ひのきりの『みろく橋』の渡り初めが行われました。それはとても感動的なシーンでしたよ」

「そうでしたね」

丸山が言った。

「では、私たちも渡りましょう」

村野の先導で、全員がみろく橋を渡った。

「この大和島がオーストラリア大陸、そして四国のひな型です。これで五大州がそろったわけですね。北原さんは四国の方でしたね」

「はい、徳島です」

北原剛が笑顔で答えた。

「教主さまは後に、『不思議ですね。陸続きだったところに水路を掘って大和島ができたことで、金竜海の水に、潮のような流れが生まれてきました。これで金竜海が“海”になりました』と述懐されたそうです。やはり、ご神業としてはとても大きな意義があつたのだと思います」

村野の話を聞きながら、大地は足元に目を向け、もう一度地面を踏みしめた。

塩釜おひねり

「この大和島^{やまとしま}を築造する時に…あれは平成十七年八月末、夏の暑いときでしたが…、三日間で約二百人の信徒が集つて、金竜海の泥上げの献勞作業を行いました。その時に、あの辺りだったそうですが…」

と村野は、大和島^{やまとしま}の北側の方を指さした。

「作業中の泥の中から三個のきれいな玉が発見されるという出来事があつたんですよ。ねえ、北原さん」

「そうそう、私もその時の献勞には参加して見て見ましたが、いやゝ、びっくりしました」

北原が思い出したように答え、村野が指で丸く玉の大きさを示しながら話を続けた。
「大きさは大、中、小とあつて、どれもまん丸の美しい玉でした。大きいのがきれいな薄桃色の玉。中ぐらいの玉が傷一つない透き通つた水晶玉で、小さいのは勾玉模様が入つた青みがかつた玉でした。」

その玉の由来は分かりませんが、教主さまは、大、中、小の三個の玉が出てきたことは、『何か大きな意味があり、神さまから大きな宝をいただいたと、ありがたく思つていま

す』とおっしゃっていました。

あら、雨宮さん、今、どんな玉が見てみたいなあ、と思ったでしょう」

「えつ、はい」

大地は意表を突かれた。

「見てみたいです。どこへ行けば見られますか？」

「残念！」

丸山が口を挟み、今は…、と言って沓島神社と冠島神社を交互に見た。

「あれ、どっちだったかな？」

「どっちでしょう」

村野が答えた。

「何のことですか？」

大地が村野に訊ねた。

「実は、その年の十一月に三個の玉は、教主さま箱書きの桐箱に納めて、あの冠島神社に安置されたんです。小雨の中の祭典・儀式でしたが、とても厳肅な雰囲気でした。…ということ、残念ながら今はお見せすることができないんです」

「なんだ、そういうことですか。それじゃ仕方ないですね、諦めます」

大地の返答に、村野は笑顔で頷いた。

「では先へ参りましょう」

村野は金竜橋を渡り、全員がその後続いた。一同が橋を渡りきった頃合いを見て村野は、こちらが…、と説明を始めた。

「長命水ちようめいすいです。命を長らえる水と書きます。ありがたいお水ですよ。鶴山山麓の湧水で、その昔、この水の周りの本宮村の村人たちの中には、長生きの人が多かつたようです。それは、飲料水や生活用水として利用していたこの泉の水が良いからだと言えられていたのです。それで大正十三年ごろに、長命水ちようめいすいと命名されています。

長生きしたい方は、お水のご神徳に浴してお帰りください。どうぞ丸山さんも…」

また笑いを誘った。

「さあ、では杳島めしま・冠島神社おしまにお参りさせていただきます。北原さん、ご先達をお願いします」

「はい」

北原が前に出て先達を務め、一同で天津祝詞を奏上した。

終わって、村野がすかさず全員に向かつて言った。

「さて、どちらが杳島めしまでしたか？」

村野と大地の目が合った。

「手前が杳島めしまです」

大地が自信を持って答えた。

「はい、ご名答。皆さん、お忘れなきように。…では、お隣へ」

村野は弾むような声で、全員を塩釜神社しおがま前まで移動するよう促した。

「こちらが安産のご守護をいただける大本塩釜神社しおがまです。ご祭神は、伊邪那岐大神いざなぎのおおかみ・伊邪那美大神いざなみのおおかみ・乙米姫命よねひめのみことさまです。

聖師さまが大正十二年に、二十七日を…当初は旧暦でしたが…塩釜しおがまの日」と決められました。それから毎月二十七日に月次祭を執行しています。

かつて、『お産のことなら、どんなことでもかなえてやる』と開祖さまを通して神さまがおっしゃったと伝えられていて、多くの信徒、また一般の方々もおかげをいただ

いています」

…そうなのか。

「懐妊したらまず『塩釜^{しおがま}おひねり下付願』と共に、塩釜神社に安産のご祈願を申し込
みます。併せてお腹帯のご下付もお願ひします。お腹帯は教主さまが『八百路^{やほじ}の塩の
八百路^{やほじ}の道あけて守らせ給へ塩釜の大神^{かみ}』とご染筆されたサラシ布をご下付願ひ、そ
れを腹帯に縫い付けて締め、ご守護を願うものです。

一般では懐妊五カ月目の戌^{いぬ}の日に『帯祝い』を行いますが、大本では五カ月目の
塩釜神社月次祭の日、つまり二十七日に腹帯をするようにとも示されています。

私も、塩釜おひねりと教主さまご染筆のお腹帯を締めておかげをいただき、無事出
産することができました。皆さんの中にも、おかげをいただかれた方が…」

村野はそう言いながら、修行者を見回した。頷^{うなず}いていた婦人と目が合い、胸の名札
で名前を確認して声を掛けた。

「えー、熊本からお越^こしの古竹^{ふるたけ}さん、いかがですか」

「はい、私も出産の時にはお世話になりました」

分割修行で、今期の修行に途中から参加した古竹奈瑞^{なずな}菜が答えた。四十代半ばだろ

うか、細身の女性である。

「私も三人の子供の出産でお世話になりました。お腹帯は長女の時に下げたいで、下二人の息子の時にも使わせていただきます」

「そうですね。二人目以降は、『お腹帯再使用下付願』を申し込んでいただければ、何回でもお使いいただけますからね」

村野の返答に、東川芳が口を開いた。

「あの、私はまだ独身ですから、よく分からないのですが、一度お下げいただいたら、そのままでは使えないのですか？」

「出産後は大切に保管していただき、二人目からもお使いいただけます。ただ、生まれてくる子供は違うわけですから、あらためて教主さまにお許しいただき、ご神前でご奉告してご守護を願うために、再使用下付という手続きがとられています」

「あゝ、なるほど、そういうことですね」

東川は納得した表情で頷いた。

「特に初めての出産のときには誰もが不安ですから、塩釜しおがまさまのおひねりさんをいただけるのは、心強かったですね」

「おひねりさん…?」

古竹の話に、東川が首をひねった。その様子を見て、村野が口を開いた。

「東川さんはこれから体験されるでしょうから、ちよつと説明しますね。」

『おひねり』というのには、教主さまがご祈願してご神名…神さまのお名前をお書きになった和紙を細く切り、それを折りたたんでひねり小さな粒状に丸められたものです。で、『おひねり』には、『病氣おひねり』と『塩釜おひねり』の二種類があります。どちらも信仰的な感謝と畏敬の念を持つて、ご神水と一緒にいただくもので、体の中からも神さまのお力とご守護を頂戴することができます。

『病氣おひねり』は、二体入っていますが、薬のように気安くいただくものではなく、よほどの病氣の時か、まさかの場合にのみいただくものですね。

そして『塩釜おひねり』は、一包に三体入っていて、まず、懐妊したと分かった時に一体、胎児・母胎共に丈夫で、月満ちて無事安産できるように祈念していただきます。二体目は、産気づいた時に、いよいよ安産のご守護をお祈りしていただきます。

三体目は、産後に母子共に健康で母乳もよく出るようにお願いしていただきます。古竹さんもそうされたと思います…」

「はい、そのようにしました。あの…、笑い話なのですが、私、ご下付いただくときに勘違いしたことがありました」

「とうとう？」

村野が訊いた。

『塩釜おひねり』は三体必要だと聞いたもので、私は三つご下付いただかないといけないと勘違いしていたんですよ」

「えっ、あ、一つに三体入っているということをご存じなかった、ということですね」

「そうなんです。三体だから、三つ必要だと…」

「それは説明不足で失礼しましたね」

「いえ、そこから思ったことですが、なぜおひねりさんは、[〃]体と数えるんですか？」

古竹が村野に訊いた。

「するどい質問ですね。実は以前にも同じような質問を受けたことがあるんです。『おひねり』は、確かに形の上では粒状ですから、一粒とか、一つとか呼んでもいいように思いますが、慣例で[〃]体と数えています。それに、信仰的にいただくものであって、ご守護の大きさや権威を考えると、一粒、二粒というのでは軽い感じがしますしね。」

物の数え方を助数詞といいます。一般では、「体」の助数詞は、主に仏像や彫刻像などに使われるようです。そう考えると粒状のおひねりに「体」を使うのは、適切ではないのかもしれないですね。

ただ、「神」の助数詞も「体」ということなので、そこからきているのかも。ほら、拝む対象を「ご神体」と言うでしょ。大本でも、ご神体は「体」で数えています。おひねりも、信仰的にはご神体に準ずるような扱いだからかもしれないね
「なるほど」

「それで、教典の中にこのことに関するお示しがないか、調べてみました。
すると『靈界物語』の第三十七巻の中にあつたんです。三十七巻は、聖師さまの自伝が綴つづられています。その第二十四章『神助』というところで、『教祖様から頂いたおひねり二体を口に含ませ……』という記述がありました。聖師さまが当初から開祖さまのおひねりを「体」で数えておられたんですね。

それで私自身は、靈界物語にあるんだから、おひねりは「体」で数えていいんだ……と納得しました。いかがでしょうか、古竹さん

「そうなんです。よく分かりました。ありがとうございました」

「ほ、なるほど。いやあ、ありがとうございました」

何度も小刻みにうなずきながら聞いていた丸山が、大きな声を発した。

木の花庵

「さあ、それでは奥へ進みましょう。と言つても、すぐそこに見えていますけど…」

村野の声で、塩釜神社右手へ歩を進める。小さな石橋を渡ると、辺りの空気が少し変わったような気がした。

「苔むした庭と古い民家…、なんとも雰囲気がありますね」

大地が言つた。

「雨宮君、これが道中話していた“木の花庵”だよ」

丸山が耳打ちした。

「ああ、これですか。確か、三代教主さまが持ち主から譲り受けて移築された家でしたよね」

「そうそう、茅葺きの外観が見事だろう」

丸山が自慢げに言つた。

入口手前で村野が説明を始めた。

「昭和四十四年のことです。地元の京都新聞に“重文級民家を取り壊される”という

記事が掲載されました。それは、江戸中期の典型的な農家形式の建物で、当時で築三百年ほどの貴重な民俗資料ともいえるものでした。

今日、亀岡から車でお越しになった方は通って来られたと思いますが、今の京丹波町しずし質志という所にあつたものです。

おかばな岡花金五郎さんという方が所有されていたのですが、傷みがひどく個人ではとても維持できなくなり、取り壊しを決めたとの内容でした。

記事をご覧になった三代教主さまは、三日後に現地を訪ねられました。そして持ち主に『私が住んでおつた家によう似とつてやし、欲しいなあ』とおっしゃつたそうです」

この三代教主さまのお気持ちを受け、教団と岡花家の間で話し合いが進められ、無償で譲り受ける代わりに、移築や復元に伴う費用は大本側が負担することになったのである。

「こうしてめでたく復元保存することになりました。でも、当初は亀岡・天恩郷の今の木の花平辺りに移築の予定だったのですが、建築法の関係で亀岡には建てる事ができなかったそうです。それで、ここ金童海東側に移築復元されることになりました」「移築するのに、かなり時間がかかったんじゃないですか？」

馬淵が訊いた。

「解体開始から復元完成までは、約二年かかったそうですよ」

「二年！ やはり大変な作業だったんでしょうね」

「そうですね。当時としては一大プロジェクトだったのではないのでしょうか。」

二年の歳月をかけて移築され、昭和四十七年の五月に復元完成し、三代教主さまが「木の花庵」とご命名になりました。合わせて進めていた申請が認可され、完成の十日後くらいには「旧岡花家住宅」として、国の重要文化財に指定されました。

なんと皆さん、京都府下では、重要文化財に指定されている民家は、あの有名な京都市内の冷泉家ほか、全部で十四軒ありますが、その中で木の花庵が、農家としては府下第一号の指定になったのですよ」

「農家としてはかなり大きいものじゃないですか？」

丸山が訊いた。

「そうなんです。こんな大きな入り母屋造り茅葺きですから、十七世紀当時としては、相当の財力を持った農家だったようです。さあ皆さん、どうぞ中へお入りになって、靴を脱いでお上がりください」

薄暗い屋内に入ると、土間の向こうの囲炉裏からたき火の煙が立ち上がり、雰囲氣を一層引き立てている。まきの素朴な香りも、どこか懐かしさを誘っているようだ。

大地らは村野の案内で、囲炉裏の左手の間に入って、床に掛けてあるお軸に一礼したあと、畳に座って西側の庭に目を向けた。

「ここからの景色もまたステキですね」

東川芳が感激した表情でつぶやいた。

「三代さまのご意向を受けて、お茶室として使われるようになり、今も時折、野だての立礼席と併用して、お茶席として使っているんですよ。夜間には、あんどんをともして、幻想的な茶室として使うこともあります。毎年三月末に開催している高校生講座に参加した高校生が、とても良い感想を残していましたね…」

そう言って村野は感想文の内容を紹介した。

“木の花庵でのお茶室入席で、あらためて日本の伝統文化、自然の良さを感じました。雨の中、木の花庵からお庭を拝見したときは、感動で涙が出そうになり、日本人に生まれた幸せを感じました”

…日本人に生まれた幸せか——、なんと感性の鋭い高校生なんだろう。でも、ここ

にいます、その気持ちがちよつと分かる気がするなあ…。

大地はあらためて苔むした庭に目をやった。

「はい皆さん、お名残惜しいでしょうが、こちらへどうぞ。少し休憩しましょ」

村野が囲炉裏端へ誘った。

「今は真夏で暑いですから、火のそばは敬遠されるでしょうが、冬場の神苑案内だと、この火もありがたういゝご馳走^{ちそう}になるんですよ」

「そうそう、前回、冬場に来た時は、この囲炉裏^{いろり}の火が、ありがたかったなあ」

「そうでしたね、丸山さん」

「あの時は、この囲炉裏^{いろり}で焼き芋をごちそうになったけどね…」

丸山が口元を手でぬぐうしぐさをした。

「ごめんなさい、夏場はちよつとね」

「いえいえ、催促したわけではないですから…」

丸山が笑顔で言った。

「皆さま、念のために言っておきますが、このたき火は、焼き芋のためにたいている

のではないですよ」

「えー、そうなんですか？」

「もう、丸山さん、知っているくせに」

また笑いが起こった。

「かつての日本…、茅葺^{かやぶ}き屋根の家屋内では、こうして火をたいて囲炉裏^{いろり}で暖をとり、かまどで煮炊きする生活をしていました。すると日々立ち上る煙が家屋の耐久性向上に、とても良い役割を果たしていたのです。煙の成分が茅^{かや}や木材をコーティングして、防菌や防虫、それから腐敗に対しても優れた効果があったのです。ほら、上を見てください。煤^{すす}で黒光りしているでしょ」

「ほんとですね」

東川が天井を見上げながら言った。

「薰蒸保護ということですね。でも、木の花庵のような文化財で、普段人が住まず何もなかったら、当然たき火効果はなく、家屋の耐久年数が極端に短くなるそうです。だから、このたき火は、木の花庵を護^{まも}るとしても大切なご用なんです」

「なるほど、そういうことですね」

大地は村野の説明に頷^{うなず}き、あらためて重厚な梁^{はり}や天井を見回した。

「こうした日本の古い伝統的な建造物や文化を後世に残すことは、大本の大切な用だと思えます。そのことは大本のみ教えに根ざした三代教主さまの深いみ心によるものです。」

先ほどお話しした高校生の感想のように、日本の良さを口で説明するよりも、実際に昔の日本人の生活や環境の一端にじかに触れることによって、より日本人としての感性を呼び起こすことができるのだと思います。

私たちは、三代さまのみ心と残していただいたご功績に感謝しないといけません。ね、丸山さん！」

「はっ、その通りでございます」

今度は丸山も神妙な顔で相槌^{づち}を打った。

「三代さまは、『日本の国を、美しい自然のままの日本の国らしい国にさしていただくことが、この国土に生を受けた民族の使命です』とおっしゃっています。ということは、私たち大本信徒の使命でもあるのだと思うのです」

村野はそう言って、以下の三代教主さまのお示しをかみ砕いて説明した。

『日本人の生き方、そこに求められる道徳や礼儀作法は、やはり、日本特有の自然風土がもつ性格を媒介として生まれてきたものであるとおもいます。

日本の山、日本の野、日本の川そこに生きるもろもろが、こまやかな四季のつながりとともにある姿、そこにみる万象の美しさが、わたくしたちの衣服に、調度品に日用の雑器にも、密接につながって日本的なものを生みだしたように、道徳や礼儀作法も、日本的なところをもつて育てられてきました。

近頃、日本の山野が荒れるにしたがつて、日本人の道徳や礼儀も荒れてきました。なにか日本の誇りが地に落ちてゆくようにおもわれ嘆かれてなりません』

木の花庵では“庵”の歴史の重みと醸し出す素朴な空気感によって、誰もがほつこりと落ち着いた雰囲気包まれる。

特に大道場修行者らは、四日間、聖地の靈氣に浸り、神さまのみ教えに接しているだけに、村野の言葉が、砂地に水が染み込むように、素直に響いてくる。

時折笑いを誘う話題も飛び出し、大地たちは、しばし和やかなひとときを過ごした。

その後一同は、修行者のみが特別に許されている茶室・鶴山居かくざんきよの庭の見学を行い、続いて緑寿館ろくじゆのやかたに参拝（現在は最終日に実施）。

ここでは、尊師さまがご昇天までお過ごしになったお部屋を拝見するなど、大地にとっても初体験の連続で、あつという間の二時間だった。

「丸山さん、綾部の神苑案内は、いろいろと盛りだくさんですね」

「だろう。『村野節』も最高だしね。ほかにも何人かの講師がいるけど、それぞれに個性的で、毎回楽しみなんだよ」

「そうなんです」

♪ドーン、ドーン、ドーン！

長生殿への参道を登っていくと、夕拝の始まりを告げる報鼓の音が聞こえてきた。

天国に貯金

大地たちはつくばいで手と口を淨めた後、亀の間入り口から長生殿に入った。夕拝には、大地たち修行者の他に、数人の本部職員や参拝者の姿があった。

大地にとって長生殿で参拝するのは、五年前の節分大祭と昨年のみろく大祭に続いて三度目であつた。最初に節分大祭に参拝した時には、まさか修行者として長生殿に参拝することになるとは夢にも思っていなかった。それに、少人数で平日の夕拝に参拝するのは、大勢の大祭参拝者の中でお参りするのとは違い、心穏やかな気分なのが自分でも不思議であつた。

…修行も四日目だからかな？

大地は思った。確かに自分の気持ちが初日とは何となく変わつてきており、綾部に來てからは、そのことをより強く意識していた。やはり天国に相應する聖地・梅松苑の持つ靈氣、雰囲氣のなす技のように思えた。

長生殿での夕拝を終え、大地たちは参道を北へ下り、みろく殿へ向かった。
「今日はだいぶ歩いたね」

丸山が言った。

「そうですね、大丈夫ですか、丸山さん」

「なに、まだまだ大丈夫……と思っっているけどね。それに修行で綾部に来て長生殿に参拝すると、いつも気分が良く、元気をいただくからね」

「はい、僕もそう思っていたところです」

「さあ、長生殿からみろく殿まで距離があるから、急がないとね」

「丸山さん、みろく殿の夕拝って、時間は決まっていますか？」

「さあ、どうだろう。いつも大方の参拝者がそろえば始まるという感じかな」

「そうなんです」

大地たちは、たわいない会話をしながらみろく殿前に着き、正面玄関のすのこに上がり下足をそろえた。

「この階段を見ると、思い出す話があるんだよ」

丸山がポツリと言った。

「えっ、何ですか？」

「あゝ、もう夕拝が始まるから、また後で教えてあげるよ」

「はい、分かりました」

大地は残念そうに答えた。

みろく殿の夕拝では、中央の大神さまに天津祝詞を奏上。続いてご神前右の祖霊社で祖霊拝詞、左手の万霊社では万霊拝詞で、それぞれ礼拝を行う。終わると午後六時を回っていた。

「おなかすいたなあ」

思わず口をついて出た。

「私もよ、雨宮君」

みろく殿玄関ですぐそばにいた東川芳がかおる相槌あいづちを打った。

「ですよ。さあ、これから僕の副守護神を満足させないとね」

「そうそう」

「綾部の食堂は初めてだし、楽しみだなあ」

「そうなんだ、きつとおいしいよ」

大地は修行・参拝者の流れに付いて松香館の食堂へ入った。

手を洗い、おかずをお盆に取り、所定の位置でご飯、味噌汁をよそった。

「雨宮君、そのテーブルにある副菜も、好きに取ったらいいいからね」

丸山が誘った。

「ビュッフェスタイルで、いろいろありますね。どうしてこんなにあるんですか？ 亀岡ではなかったですよ」

「雨宮君がおなかをすかしているだろうから、たくさん準備してくださったんだよ」

丸山が真顔で言った。

「ほんとですか？」

「ハハハ、そんなわけないだろう」

「もう、丸山さん」

「綾部は毎日祭典があるから、当然お下がりも多い。それを食堂の人が上手に料理して出してくださるそうだよ。ありがたいね」

「なるほど、そういうことですか。たくさんあつてうれしいですね。尾頭つきの鯛の塩焼きまでありますね。おいしそう」

大地は好みの惣菜を、取り皿いっぱい盛った。

大地ら修行者は、同じテーブルに集まって席に着き、合掌して二代さまの三首のお歌を拝誦した。

「いただきます」

大地は、食作法で習った作法を意識しながら箸を進めた。どれもおいしく、自然と笑顔になり、会話も弾んだ。

大地が、ふと思い出した。

「そういえば丸山さん、さつきみろく殿前でおっしゃっていた話って、何ですか？」

「おう、そうだったね」

丸山も思い出したように言った。

「これはね、私の大先輩から聞いた話だけど、本当におもしろいというか、不思議な話なんだよ。ほら、今日の神苑案内で、村野さんが、みろく殿建設の歴史を話してくれたでしょ。実は、それにまつわる献金の話なんだけど……」

そう言いながら、丸山はご神徳談を紹介した。

みろく殿の建設が始まったのは、戦後の物資不足の時代であった。大本信徒の多くも、その日の生活に懸命だったところである。その上、昭和二十五年の年末には、教団は赤

字決算が見込まれていた。そのため当時の教団執行部は、二代教主さまのみろく殿建設のご発意を受けても、すぐに腰を上げなかった。

「もつとはげみなはれ！」

その後、二代さまの強烈なお言葉から、その熱いご希望を知った信徒たちの気持ちが一つになり、一気にみろく殿建設のご用が盛り上がりを見せるようになった。それが二代さまご昇天の数カ月前、昭和二十六年の末のことであった。

その熱意が地方へも伝わり、みろく殿建設のための献金のご用が、全国的に始まった。これを受け、ある機関でも管内の信徒に献金のお願いがなされ、その機関では、「一日十円で月三百円」という具体的な金額を呼び掛けた。信徒は皆、苦しい生活の中であったが、神さまの大切なご用だと、積極的に取り組むことになった。しかし、

「わしはでせん！」

「うちは無理だ」

そう言って献金のご用に参加しなかった信徒が三人だけあった。

献金の機会は人為的なものではない。ご神意であり、巡り来る神機である。本人がご神業としてお仕えする気持ちは何より大切であるから、機関役員も無理強いをしなかった。その三人は結局、献金のご用にはお仕えしなかったのである。

昭和二十八年四月、みろく殿が見事に完成した。全国から晴れの慶事を祝うため、大勢の信徒が次々に梅松苑に集った。

参綾する団体も多く、この機関でも団体参拝者を募り、綾部に向かった。その中には、くだんの三人の姿もあった。

綾部に着き、一行は青空にそびえるみろく殿の雄姿を見上げた。

「…ということで、団体参拝を引率した私の大先輩の玉津さんが、みんなと一緒にみろく殿の階段を上がろうとした、その時だよ」

丸山の口調が強くなった。

「正面玄関の階段ですね」

「そう、あの階段を上がろうとした時に、階段の手前で立ち止まって、もがいてるような人がいたんだ。しかも三人。玉津さんが何をしているんだろうと思って尋ねると、足が言うことを聞かず、前に動かなくなっているというんだね」

「えっ、どういうことですか？」

「足が固まっているような状態で、玉津さんは、その三人の顔を見て、すぐに理由が分かったそうだ。『ハハー、献金しなかったからだ』と。」

「エーッ、献金しなかったからですか。神さまは、厳しいなあ」

「いやいや、雨宮君、神さまじゃないよ。神さまはそんな小さいことはされない。玉津さんが言うにはね、〃丸山君、祖霊さんが入殿することを止められたのや、先祖として恥ずかしい、とね〃。この話を聞いて、私もびっくりしたよ」

「で、その三人はどうしたんですか？」

「玉津さんは三人に、自分が感じたままのことを話したそうだよ。で、三人はその場で、神さまと祖霊さまにおわびし、〃遅くなりましたが、これから少しずつ献金させていただきます〃と反省し、今後のことを誓ったそうだね。すると三人の足が一斉に動くようになって、無事に階段を上がり、参拝することができたそうだよ」

「エー、ホントの話ですか？」

「そう、玉津さんは、〃丸山君、ホントなんやで。不思議やろ。祖霊さんからしたら、どうして献金してくれなかったんだ、という残念な気持ちだったんだね。だから子孫が祖霊さんに恥をかかすようなことをしたらいかんのやなあ〃と、しみじみ言っておられたんだ」

「怖い話ですね」

「献金のご用は、現界での現実的なご神業のお役に立てるということだけでなく、霊界にも響く大切なご用ということだね。よく、天国に貯金する」と言われるけど、まったくそういうことなんだよ」

「いやいや、ビックリだな」

「そんな話、初めて聞きました」

「天国に貯金、って良い言葉ですね」

近くの席に座っていた北原剛、馬淵光彦、梯^{かけはし}洋子と古竹^な奈瑞^{ずな}菜^ならも、丸山の話に聞き入り、異口同音に驚きの声を発した。

「丸山さん、僕は献金したことないんですけど…」

大地が言った。

「あのく、私もです」

東川も同じであった。

「またそのうちに機会があるよ。そのときは、しっかりご用してください。雨宮君は梅木家のことだから、おじいさんかお母さんが、君の名前で献金もしているんじゃないかな」

「そうかなあ？ 一度訊きいてみます。丸山さん、スゴイお話を、ありがとうございますました」

「さあ、夜の講座があるから、そろそろ行きますか。では、ごちそうさまでした」
「ごちそうさまでした」

全員そろって手を合わせ、二拍手した。

和みの輪ができたような、楽しい夕餉ゆうげのひとつときとなった。

冠婚葬祭

大道場修行四日目、午後七時から松香館二階の講座室で、夜間の講座「みたままつり」が始まった。この講座は、家々の祖霊祭祀について学ぶ時間である。

祖霊祭祀とは、その文字のごとく、祖霊…つまり各家の先祖の御霊を、祭祀…まつることであり、大本では「祖霊祭祀」と書いて、「みたままつり」とも呼称している。

家ごとに神とみたまを祭らねば

この世のもつれはとくる日のなき

と二代教主さまが詠まれているように、大本の霊界観による「みたままつり」は、子孫にとって欠くことのできない大切な務めと示されている。

しかし物質中心に傾く現代、目に見えない霊界との関わりがなおざりになっている家庭も多く、そのことがひいては家々が抱える諸問題の原因の一つになっているといえるのではなからうか。

さらに大本では、祖霊祭祀の道が途絶えた御霊、戦争や飢餓、病氣、不慮の災害や事件・事故などで亡くなった世界中の人々の霊魂を救い上げ、丁重におまつりする道が示され、日々祭祀が厳修されている。

「皆さんは今日、みろく殿にお参りされたのでお分かりかと思いますが、殿内中央には大神さまをお祭りし、向かって右に祖霊社、左に万霊社ばんれいしゃがありますね」

講師の下川宙ひろしが説明した。

「二代教主さまは昭和二十五年一月十九日、聖師さまの二年祭の日から、天王平の今は新霊社しんれいしゃと呼ばれている当時の齋納社さいのうしゃで、救われていない万霊ばんれいをおまつりなさいました。その時に、次の二首の歌をお詠みになっています。

ありがたや幾萬年いくまんねんをくるしめる

みたまらすくひの舟に乗るなり

霊界にくるしむみたまを世にあげて

いつきまつるぞうれしかりけり

そうした世に落ちて苦しんでいる万霊ばんれいは、今、みろく殿の万霊社ばんれいしゃでおまつりされています」

下川は種々解説した後、〃修行のしおり〃にある以下のお示しを読み上げた。

このたびの万霊社ばんれいしゃのご用は、昭和二十五年から二代教主さまが霊界で苦しむみ霊たまや

世界中の「おちしみたまたち」を救われた万霊祭祀ばんれいさいしを継承した、大本ならではの大きな救いのご用でございます。今後継続して毎日のお給仕、朝夕拝が行われ、毎日の祖霊社例祭に引き続いたの礼拝、月次祭、春秋の慰霊大祭が丁重に執行されることになっております。皆さまには祖霊さま同様にまごころこめてお参りいただきましたら嬉しく思います。

まことに厳しい、乱れた、騒々しい、不安定な世の中ですが、これらの救いのご用を通してもつれた糸が少しずつほぐれていきますように、人の心が穏やかになり、人と人、国と国の関係もよりよくなりますようにと心より祈念しております。（平成二十年 教主さま「みろく大祭ごあいさつ」）

「みろく殿では毎日午後一時から、例祭が行われているわけですから、みたまにとつてはこんなありがたいことはないわけです。

例祭のほかにも、みろく殿では毎年大切な慰霊祭が六回行われています。それは……と、以下の慰霊祭を紹介した。

三月十一日 東日本大震災犠牲者慰霊祭

六月二十三日 第二次世界大戦沖縄戦全戦没者慰霊祭

八月六日 広島原爆犠牲者慰霊祭

八月九日 長崎原爆犠牲者慰霊祭

八月十五日 第二次世界大戦万国犠牲者慰霊祭

九月十一日 世界平和万霊慰霊祭

「この六回のおまつりも大変重要な慰霊祭です。こうして日々の例祭、慰霊祭で霊界が救われることによつて現界も救われ、多くのみたまさま方も喜び勇んで、共に地上天国建設というご神業にご参加いただけます。そうして霊界、現界が一つになつてご用にお仕えさせていただくことが、私たちの大きな使命だと確信しております」

下川は、大本の祖霊祭祀さいしの概要を説いた。

「ところで話は変わりますが、皆さまは冠婚葬祭という何を思い出されますか？」

…冠婚葬祭といったら、結婚式と葬式だよな。

大地は心の中でつぶやいた。

「東川さん、いかがですか？」

下川が後列の席に座っていた東川芳かおるを指名した。

「えつ、はい、結婚式とお葬式だと思いますが…」

「はい、期待通りの答えをありがとうございます」

…じゃあ、違うのか？

大地は手を挙げなくて良かったと内心ホッとした。

「あつ、丸山さんは答えなくていいですからね」

正解を言おうとしていた丸山の機先を制した。

「あら残念」

またみんなの笑いを誘った。

「人生にはいろいろな節目があり、日本人は古来、節目を大事にしてきた民族です。人生の節目、季節の節目、時代の節目などがあり、それが各地のさまざまな風習や年中行事などにもつながっています。

もっとも、神さまの目から見たら、うしろ良の金神の調伏行事として受け継がれてきた悪しき風習もあります…」

ともかく、節目を大切にしてきた日本人一人一人の人生の中で、最も大切な節目を

表すのが冠婚葬祭です。ところが世のほとんどの冠婚葬祭場と称すものは、さきほど東川さんがおっしゃったように、結婚式と葬式を行う所のように思われていますから、本来の意味と違うように受け取っている方も多いのだと思います。

実は、冠婚葬祭というのは人生の重要な四つの節目の儀式を表しているのです」

…四つなのか？

大地は驚いた。

「つまり、漢字一文字ずつがそれぞれ節目の儀礼を表しているんですね。冠婚葬祭の二つ目の「婚」が婚礼で、三つ目の「葬」が葬祭、お葬式です。

で、最初の「冠」が古来の元服、今で言う成人式です。元服とは、数え年十二歳から十六歳の男子が、氏神さまの前で大人と同じ髪型を結って、冠かんむりを着けてもらっていました。それが「冠」の由来だといわれています。

今では「冠」は成人式だけでなく、初節句や七五三、入学や卒業、就職などのライフイベントを含む祝い事とされることもあるようですが、本来は元服、成人式を指しています。

そして最後の「祭」。これが実は「祖霊さい祭祀し」、つまり先祖をまつる「みたままつり」

なのです。仏教では、法事やお盆などを指すようですが、大本で言う葬祭後の節目節目のみまつり、毎十日祭や五十日合祀祭^{ごうし}、年祭、慰霊祭に当たるものですね」

…へえ、知らなかったなあ。

大地は感心した。

「冠婚葬祭の“冠婚”は現界的なことであり、“葬祭”は現界と霊界双方のことですよ。また“冠婚”は自分自身で行うこともできますが、“葬祭”は子孫に行ってもらいものですね。

そう考えると、昔の人々は、この世に肉体を持つて生きている間も霊魂になってからも、一続きの人生の節目として大切にしていたのではないのでしょうか？」

…なるほどなあ。

大地は心の中で頷いた^{うなず}。

その後、下川は大本のみたままつりの基本である祖霊社への「復祭」や「合祀祭」^{ごうし}など、その種類や手続きについての概略を説明した。

大地は五年前、初めて節分大祭に参拝した後、祖父の梅木松太郎に連れられ、みろく殿に年祭の申し込みをしに来たときのことを思い出していた。

…そういえばあの時、おじいちゃんから、大本のみたままつりのことを詳しく聞いたことがあったなあ。そうだ、確か僕の妹の二十年祭をお願いしたんだっけ。ん？
ということは…、今年は二十五年の節目になるはずだよな。

大地の脳裏に、流産児であった妹・雨宮香のことがよぎった。

講座が一応終わり、下川が「では、何か質問があればお受けします」と投げ掛けると、次々に質問が飛び出し、祖霊祭祀への関心度の高さがうかがえた。

霊界の祖霊の向上が、現界の子孫の繁栄に直結していることを聞いた後だからだろうか、質問する人は、皆一様に真剣で、内容も具体的である。大地も手を挙げた。

「はい、雨宮さんどうぞ」

下川が指名した。

「あの、流産児だった私の妹が今年でたぶん二十五年になると思うんですが、やはり年祭をしないといけないのでしょうか？ 確か三月だったと思いますので、もう命日は過ぎています。祖父がお願いしているかもしれないかもしれませんが…」

「二十五年祭は、しなければいけないということはありません。霊界のご先祖さまに

とっては喜ばしいことですから、もちろん毎年行っても差し支えありません。

年祭の執行は基本的に、亡くなって五年までは毎年行います。以降は五年、十年、十五年、二十年と五年ごと。そして、二十年祭以降は、三十年、四十年、五十年と十年ごとになります。五十年の次は百年です」

「良かった。ではあと五年後ですね」

大地は安心した。

「雨宮さんのおじいさまは、綾部の梅木さんでしたよね。だったら大丈夫。梅木さんならぬかりはありませんよ。確か先日、百五十年祭もされていましたからね」

「えゝ、百五十年祭ですか」

大地は驚きながらも、ゞさずがおじいちゃん！と心の中でつぶやいた。

修行修了奉告

「修行・参拝の皆さま、おはようございます。すがすがしい聖地の朝がやってまいりました。洗面が終わりましたら、各自のお部屋、廊下、お手洗いの清掃をお願いします」
亀岡での宿舎・安生館と同じように、綾部の松香館でも、起床の音声が流れてきた。そのバックには、能楽の笛と小鼓こつづみの音が響く。五日間の大道場修行で毎朝、いや応なしに耳に入ってきた音である。

大地は最初、聞き慣れない音楽に違和感を持ったが、毎日聞いていると、心地良く感じるようになったのも不思議であった。というのも普段は早起きが苦手の大地だったが、修行の間はすんなり床を離れることができたからだ。この朝も爽やかに目覚め、洗面と清掃を済ませた。

スピーカーからの音は、能楽の囃子はやしから愛善歌の合唱になった。「瑞声」など数曲が流れ、聞き終わったところに松香館二階から玄関に下りた。すでに数人の修行者がそろっていた。

大地は丸山と連れだって長生殿の朝拝に向かった。

「丸山さん、あの起床の音楽は、何ですか？」

「あれねえ、雨宮君は好きかい？」

「好き嫌いとはともかく、目が覚めますよね」

「まあ、そうだね。いつだったか一緒に修行した人に訊ねたことがあったけど、眠たいのに起こされるからキライ！　って言う青年もいたし、あの音源が欲しい！　と言う年配の女性もいたなあ」

「そうなんですか」

「以前、雨宮君のように、あの音楽が何なのか訊かれたことがあって、その時は知らなかったで、本部で音源を制作した人をつかまえて訊いたことがあるんだ」

「そうでしたか」

「あれは能楽の『翁』^{おきな}という曲で、その中でも『三番叟』^{さんばそう}というものだそうだよ」

「おきな？　さんばそう？」

「翁^{おきな}は能にして能にあらず」とか言われていて、神事のようなものらしいね。だから、謡の文句も今の言語とは違う言葉のようだね。で、通常の能では小鼓は一人だけど、翁^{おきな}のときには三人で打つんだよ。だから、起床のテープでも小鼓の音や掛け声が複数聞こえてくるんだ」

「そうだったんですね」

「そしてもう一つ、あの起床の曲は、平成四年に長生殿が完成した翌年の五月、長生殿能舞台の舞台^{びち}抜きで奉納されたものだということだね」

「あの老松殿から見える野外舞台ですよ」

「そうだよ」

「じゃあ、大本にとつてはとてもおめでたい時の曲じゃないですか」

「ということだね」

「あの笛と小鼓は、プロの方ですか？」

「そうだよ。私も舞台^{びち}抜きの時に拝見したけど、良かったなあ。何とも言えない幽玄の世界に浸れて、とっても感激したことを憶^{おぼ}えているね。あの小鼓は、後に人間国宝に認定された京都の曾和博朗^{ひろし}先生親子三代で打たれているから、貴重なものなんだよ」

「そういう曲だったんですね。もっと早くいわれを聞いていたらよかったなあ」

「そうか、今朝で最後だからね。雨宮君、またいつか修行に来たらいいよ」

「アハハ、そうですね」

長生殿、みろく殿での朝拝が終わり、大地たちが食堂に入るころ、小雨が降りだしてきた。朝食の席では、この雨がやむかどうか心配する修行者もいたが、丸山は「お舟に乗るころにはきつとやみます！」と妙な自信を見せていた。

午前八時から、「うぶごえ浄写」の時間。修行者は墨をすりながら「鎮魂」し、三代教主さまがお書きになった「うぶごえのご染筆」を半紙の下に敷き、心静かになぞりつつ、神さまのみ声をいただくのである。

大地は墨をするのも筆を持つのも久しぶりで、心地良い緊張感があつた。隣を見ると、丸山は慣れた手つきで墨をすっている。

…さすが丸山さん。

一昨日だったか本人の話によると、丸山は日課のように『おほもとしんゆ』の浄書をしているとのことだった。

…やっぱ、実践している人は違うな。

大地も心を鎮め、半紙に筆を下ろした。

「うぶごえ浄写」が終わると、一同は用意されたワゴン車に乗って、天王平^{てんのうだい}へ向かった。前回、奥都城に参拝したのは、去年の五月、みろく大祭の時だった。奥都城祭典に参拝するシャトルバスの中で、一帯の呼称である天王平^{てんのうだい}や彩霞苑^{さいかえん}の名前の意味や「おくつき」の漢字表記の違いなど、祖父・松太郎から詳しく教えてもらったことを思い出していた。(第62・63回参照)

その折は祭典前に時間があったので、初めて梅木家の墓に参拝した。「お墓は亡くなった人の魂とのつながりを確認できる場所」と感じたのもその時だった。

「はい、到着しました」

村野の案内で、最奥天国に相応する「奥都城」に参拝。教御祖^{おしえのみおや}さま方に修行の御礼を申し上げた。

お参りを終え、辺りを見回した大地は、風に揺れる松の緑が、ことさら輝いているように感じた。

引き続き長生殿で、修行の修了奉告が行われ、全日程を終えた一同が修了証を拝受した。皆、緊張の面持ちの中にも、一様に安堵感^{あんど}と充実感で満ちているようであった。

「皆さま、五日間ご苦労さまでございました。そして、おめでとうございます」

村野が祝福した。

「ありがとうございます」

丸山がひときわ大きな声で答えて、また場が和み、全員が笑顔になった。

「なんだか、うれしいですね」

大地が丸山に声を掛けた。

「そう、この瞬間は何度体験してもうれしいもんだよ」

「では皆さん、これからお舟に乗りますので、金竜海までご移動ください」

「まだ雨が降っていますかねえ？」

東川芳が心配そうに言った。

「まだ降っているみたいですね。まあ、でも…」

村野は意味ありげに笑顔で言葉を濁した。

一同は、亀の間玄関から外へ出て金竜湖畔へ向かった。すると、みろく殿前広場でさしかかった時、傘に落ちる雨の音が小さくなってきた。

「あれ、丸山さん、小降りになってきましたよ」

大地は思わず大きな声で言った。

「やっぱりね」

「えっ、どういふことですか？」

「いやね、以前も同じようなことがあったんだよ。二年前だったかな、暮れに修行を受けたことがあったんだけどね。その時は、最終日は朝からシンシンと雪が降っていたんだ。でね、この場所まで来るとね、それまで舞っていた雪がやみかけたんだよ。それでお舟に乗ることができて、いざ出発となったら空が明るくなって、金竜海を渡るころにはパァーッと青空が見えて、なんと太陽が顔をのぞかせたんだよ」

「えゝ、スゴイ！ 何とドラマチックな演出ですね」

「だろう、もう感激で胸がいっぱいになったんだよ」

「……って、丸山さん、本当に雨が上がりましたよ」

大地が驚いた表情で空を見ながら言った。

丸山がニヤリと白い歯を見せた。

「皆さまの日頃の行いが良いのでしょうね。今日はお清めの雨をいただいておりますが、このようにピタリとやみました。では、これからこの“りゅうぐう丸”に乗って大八洲神社おおやしまに参拝させていただきます」

金竜海舟着き場の横で、村野が案内した。

…何だかドキドキするなあ。

大地はそう思いながら乗舟した。

係の職員が舟の舳先^{へさき}に座り、もう一人が竿^{さお}を操^{あやつ}り、りゅうぐう丸はゆつくりと離岸した。

「では、ご一緒に天津祝詞を奏上させていただきます」

先達に合わせ、一同心静かに天津祝詞を奏上。りゅうぐう丸は水面を滑るように進んでいった。しばらくすると、眼^めを閉じてご神号を奏上する大地のまぶたが、急に明るくなった。

…あれ？

目を開けると、雲の切れ間から太陽の光が差し込み、水面に反射していた。

…うそ！ 丸山さんの話と同じだ。

大地は、今までに経験したことのない温かく心地良い不思議な空気に包まれ、ずっとこのまま舟に揺られていたいと思った。

…天国ってこんなところなのかな。

「^{かむながらたまはへ}惟神靈幸倍ませ」と唱える声にも気持ちが入り、胸に込み上げてくるものを抑えて

いた。

りゆうぐう丸は、ほどなく大八洲おおやしまに接岸。一同は舟から下りて草履を履き、石段を上がり、大八洲神社前で先達に合わせて天津祝詞を奏上。『みろくの大神さま』に、このたび大道場修行を受講できたことを感謝申し上げた。

「皆さまは、修行を通して神さまのみ教えをいただかれ、国祖の神さまの弟子となりました。みろくの世建設という尊いご神業にお仕えすることをお誓いになったわけですから、これから、それぞれができるご用に精いっぱいお励みくださいますようお願いいたします。五日間、本当にご苦労さまでございました」

「ありがとうございます」

一同、晴れやかに声をそろえた。

りゆうぐう丸が舟着き場に戻ると、天からは再び、小雨がぱらついてきた。

神苑の景色を映しながら風に揺れる水面は、まるで天国の姿を写し出しているかのようであった。

心の扉

りゅうぐう丸から下船した大地たちは、松香館の講座室に戻った。

「さあ皆さん、これから五日間の総仕上げの感想文書きですよ」

村野が満面の笑みで言った。

……、作文は苦手だなあ。

大地は笑いながらも、そう思った。

「原稿用紙一枚で結構ですので、お願いします。たくさん書ける方は、何枚でも構いませんので、思う存分お書きくださいね。で、書き終えられたら、その場に伏せて置いてください。それで解散となります」

村野の案内に少々焦り気味になりながらも、大地は五日間を振り返り、心に残ったことを書き綴^{つづ}った。

感想文書きが終わり、二、三の修行者はすぐに帰途についたが、残りのほとんどが食堂に向かった。大地も丸山らと一緒にテーブルを囲んだ。

「村野さん、ここ空いていますよ」

昼食のトレーを抱えて近寄ってきた村野を、丸山が手招きした。

「まあ皆さん、おそろいで…。では、お邪魔します」

村野は大地の斜め前の席に着いた。

「村野さん、お世話になりました」

丸山があらためて礼を言った。

それに続いて、一同が声をそろえた。

「ありがとうございます」

「こちらこそ。皆さん、おぐたびれになったんじゃないですか？」

「多少はね。でも、とつても心地良い疲れですね」

馬淵光彦が言った。

昼食の席はにぎやかな空間となり、“修行談義”に話が弾んだ。

「それにしても、今日の大八洲神社おおよしまの参拝は良かったですね」

丸山の一言に、馬淵が反応した。

「いやホント、スゴイ“演出”でしたね。私も感動しましたよ」

「同感です。実は…」

梯かけはし洋子が高ぶった声で言った。

「いろいろな思い悩むことがあって、今回修行を受講させていただいたのです。ところがですよ。さっきお舟にらせていただき、天津祝詞を奏上しながら、あの石橋?…」

「金竜橋!」

「そう、お舟が橋の下に入ってぐり抜けたら、雲の切れ間からお日さまの光が目に入っただけです。そうしたら自分を覆おおっていた何かが剥はがれ落ちて、それまでの悩みがパアッと消えていくようで、心が急に軽くなって、自然と力が湧いてきたんです。苦しみが楽しみに変わったような気持ちというか。こんなこと初めてでしたから、とてもありがたくて…」

そう言いながら、梯は少し目を赤らめていた。

「大きなおかげをいただきましたね」

村野の言葉に、梯は小さく頷うなずいた。

「梯さんは、飲ぎの座の時にも話しておられたけど、八雲琴の鎮魂に感激されたり、朝夕拝の祝詞奏上で不思議な“快感”を覚えられたりと、今回いろんな体験をされたとおっしゃっていましたよね」

大地が訊ねた。

「そうなんです。聖地って不思議なところですね。亀岡も綾部も素晴らしい環境で、お会いした方も皆さん親切で、とても居心地がいいんですね。

その環境の中での大道場修行は、規則正しい生活を送りながら、日々神さまを拝み、自然の中に溶け込み、人生の在り方を学べる場所だと思いました。

あつ、それと、聖地でいただく食事が、おいしいの！ 私、普段の一・五倍は食べている感じで、今、体重計に乗るのが怖いんです」

梯が楽しそうに語った。

「それ、私も同感です」

古竹奈瑞菜が同調した。

「そもそも、主婦にとつては、毎日の献立を考えなくていいことが幸せ！ それに食事の支度や後片付けをしないでいいってことは、本当にありがたいことですしね」

その場に笑いが起こった。

「古竹さんのお宅では、食事の手伝いはしてくれないんですか？」

丸山が訊いた。

「主人ですか？　とんでもない、台所仕事は一切しませんよ。もう典型的な『肥後もっこす』ですからね。何でもお母さんから『男子厨房に入るべからず』って言われて育ったそうですよ」

「今どき、それは通用しませんよね」

梯が笑いながら、丸山や馬淵の方を見た。

「そ、そりゃ、そうですよ」

馬淵が顔の前で手を振り、私は違いますよ、という表情で言った。

「私もね、自分自身の心の変化を感じています。今回、『人は神さまの分霊である』ということのを再認識し、自分の意識が変わったように思うんですね。『いつも神さまと一緒にいるんだ』と思いながら物事に取り組めば、苦勞も楽しみに変えられるんじゃないかと思えるようになりました。大道場修行では、講座を聞いてみ教えを学ぶだけではなく、魂で神さまを感じることが大切なんですよ。それが今回、少し分かったような気がしています」

馬淵が目を輝かせながら言った。

「馬淵さん、素晴らしいですね。それこそ大きなおかげですね」

「でも、日常生活に戻ってからが問題です。この気持ちを持続するのが、なかなか難しいんですね」

「そうですね、がんばってください」

「はい」

村野の言葉に、馬淵が大きく頷いた。

「東川さんはどうでしたか？」

丸山が訊いた。

「実は私も人生に対する迷いや、職場での人間関係などで、心身共に気持ちが落ち込んでいました。正直、修行を受けたからと言って問題が解決するとは思っていませんでした。」

でも綾部に来て、思いが変わりました。松香館の部屋に二代さまの伝記『おさなごたり』が置いてあったでしょ」

「あった、あった」

「読み始めたら夢中になって、夕べは遅くまで、二代さまの波瀾万丈のご生涯に吸い込まれていきました。講座で伺った開祖さまのご苦勞や二代さまのご幼少期のお話が、

より鮮明になって心に響いてきました。

開祖さまも二代さまも、私なんかとてもじゃないけど耐えきれないほどのご苦勞の連続なのに、二代さまはそれをユーモラスに語っておられる。その器の大きさ、懷の深さは、とてつもなく大きなものですよね。とにかく心打たれました。

で、『おさながたり』を読み終えたら、自分に起こること全てに意味があり、神さまの“お仕組み”なんだと思えるようになりました。

そうしたら、これまでの私の小さな“行”に対して、素直に“ありがとうございました”と感謝できたのです。それが自分自身不思議で、ありがたく、お舟に揺られている時は、自然と涙が流れてきました。こんな気持ちになったのは初めてでした」

「それは良かったね」

丸山は東川の表情が、初日とは見違えるように晴れやかになったことを感じていた。「自分が変われば、世界が変わる」。教主さまがそうおっしゃっているから、東川さんにも、これからきつと良いことがあるんじゃないかな」

「そうですか。丸山さん、ありがとうございます」

東川は小さく頭を下げた。

「皆さん、素晴らしい！ 私なんかは、毎回、前よりは少しは進歩したかと思って修行に来るんですけど、なかなかどうして。いつも神さまから“慢心するな！ 前向きに勉強を続けろ！”って、お叱りをいただいているように感じてるんですよ。毎回、新しい発見もあって、それがまた楽しいんですね。だから、まだまだハナタレ小僧です」

「丸山さんがハナタレ小僧なら、私はまだ赤ん坊ですね」

北原剛が笑いながら言った。

「そうですね、丸山さんのおかげでとても楽しい五日間でした。それに講座以外にも、いろいろ教えていただきましたから…」

馬淵が言った。

「そうそう」

全員が笑顔で^{うなず}頷き、丸山は照れくさそうに笑った。それぞれの思いを聞いていた村野も、自分のことのように^{うれ}嬉しくなり、つい話を続けた。

「皆さん、神さまのお光をたくさんいただかれたんですね。本当に良かったですね。聖師さまのお示しにこういうお歌があります。

^{あま}天津日の高くかがやき照るとても

戸閉せし家は真暗がりなる

太陽が煌々こうこうと輝いていても、扉を閉め切っていたら、家の中には光が差さず、真つ暗闇……。ということは、扉を開け放てば、自然と光は入ってくるんですよ……。とお示しだと思えます。ですから、心の扉を開きさえすれば、いつでも温かい神さまのみ光を、浴びることができるといふみ教えですね。

今、お話を伺っていると、皆さんはこの五日間で、心の扉の開け方を学ばれたようです。でも、もし扉が閉まりそうになったら、修行のことを思い出してください。そしてまた聖地にお越しくださいね。いつでもお待ちしておりますので……」

「ありがとうございます」

全員が村野に礼を言い、しばらく談笑ののち、二拍手して昼食を終えた。

「アツ、おじいちゃん」

大地は笑顔で歩み寄った。

手を振りながら松香館の玄関に入ってきたのは、梅木松太郎だった。松太郎は綾部市内の自宅から、大道場修行を終えた孫の大地を迎えに来たのだ。

「ヤア、大地。修行、ご苦労さま」

「ありがとう、迎えに来てくれて…」

「大道場修行で、大地もだいぶ成長したかな？」

「さあ、どうかな？」

大地はニコリと首をかしげた。

脚下照顧

「梅木さん、お久しぶりです」

ロビーにいた丸山が松太郎に気付き、声を掛けた。

「おや、丸山さんじゃないですか。遠路ご苦労さまです」

「今回の修行では、お孫さんとご一緒させていただきましたよ」

「そうでしたか、それはお世話になりましたなあ」

「おじいちゃん、丸山さんにはいろいろと教えていただいて、本当にお世話になったんだよ」

「博学の丸山さんと一緒だったら、退屈しなかっただろう、大地」

「そうそう、丸山さんは何でも知っているからね」

「いやいや、私も元気な青年と一緒に、若がえりましたよ」

松太郎と丸山は、しばらく話が弾み、大地はその間にロビーに置いていた荷物を取り、部屋の鍵を受付に返して二人のところへ戻ってきた。

「丸山さんは、瑞生大祭に参拝されるんですよ？」

「はい、大祭に参拝してから帰ります」

「そうですか。で、これから亀岡までは電車で？」

「いえ、このあと修行仲間に亀岡まで送ってもらえるので…」

と言いながら、丸山は傍^{そば}にいた北原と馬淵を紹介した。

「昨日亀岡からは、僕も北原さんの車に乗せてもらって来たんだよ」

「そうでしたか、それはありがとうございます」

松太郎が北原に礼を言った。

「じゃあ行こうか、大地」

「はい。皆さん、ありがとうございます。お気を付けてお帰りください」

「雨宮君は、しばらく綾部にいるんだね」

「それも、これからおじいちゃんと相談します」

「じゃあ、また。すぐに亀岡で会えるかな？」

「んー、そうなるかも」

大地と松太郎は丸山たちと別れ、松香館を出て、駐車場に向かった。

「丸山さんと一緒だったなら、修行も楽しかっただろう」

松太郎が訊^きいた。

「とても楽しかったし、いろいろ勉強になったよ」

「それは良かったなあ。帰ってからゆつくりと話を聞かせてくれるかな」

「うん。僕もおじいちゃんにいろいろ訊きたいこともあるしね」

「ほく、そうか、難しい質問はだめだぞ」

「大丈夫、丸山さんが、梅木さんなら何でも知っているから……って言ってたからね」

「そりゃ、買いかぶりだな」

駐車場まで来ると、大地は自分の荷物を軽トラの荷台に載せ、みろく殿の方を向いて一礼した。松太郎はその様子を心地良く見ていた。

二人は車に乗り込み、梅松苑をあとにした。

「帰ったよ」

松太郎が玄関から声を掛けた。

「お帰りなさい」

家の中から懐かしい声がした。

「こんにちは」

大地が元気な声で言った。

「大地、いらっしやい。待っていたよ」

大地の祖母・ともが笑顔で出てきた。

「おばあちゃん、お久しぶりです。元気だった？」

「はい、おかげさまで。さあさあ、上がって」

「おじやますす」

「よう来たねえ」

大地は、ともの笑顔が嬉^{うれ}しかった。

「おっと」

玄関を後ろ向きに上がろうとした大地が、何か気付いたように言った。

「脚下照顧…」

そうつぶやきながら、大地はもう一度前を向き、あらためて玄関を上がって向き直り、右手で脱いだスニーカーの向きを変えて揃^{そろ}えた。

「おっ、早速修行の成果が出ているようだな」

「まあね、でもいつまで続くかな」

と照れくさそうに言った。

「ちよつとお参りしてくるね」

大地は荷物を置いて、ご神前へ進んだ。

松太郎とともは嬉し^{うれ}そうに、顔を見合わせた。

夕食の時間、〃履物の始末〃についての話題になった。

「たかが〃履物の始末〃、されど〃履物の始末〃だね、おじいちゃん」

「そうだな、頭では良いことだと分かっている、自然にできるようになるには、相当時間がかかるもんだよ。無意識のうちにできるようになればいいんだが、わしもまだまだで、いつも反省しとるよ。つい横着して後ろ向きに上がってしまうからな」

「おじいちゃんでもそうなの？」

「そうだよ。修行が足らんな」

「じゃあ、僕ができないのは無理もないか」

大地は苦笑いした。

「いやいや、年は関係ないから、大地の方が早く身につくかもしれないよ。

そういえば昔、子供たちが小さいころ、うちによく友達を連れてきていてね。その時、

玄関の靴が乱れていたら、＼はい、集合＼ ってみんなを集めて、こう言っていたものだよ。

＼わが家には決まりがあります。脱いだ自分の靴は、きちんと揃えること。梅木家では、これを守ってください＼ ってね。

小学生くらいだと素直だから、次に遊びに来た時には、みんなちゃんと揃えるようになっていたな

「それはスゴイね。まあ、子供たちからは、＼あそこのお父さんは厳しい＼ って思われていたかもね」

「そうだろうな。それでも履物を揃えることが、心のどこに残っていたらそれでいいと思っていたよ」

「そうだね」

大地は頷いた。
うなず

「大本では、夏期学級というのがあるんだけどな…」

「知ってる。僕も子供のころ、お母さんに勧められて、長野で一度だけ参加したことがあるよ」

「そうか。四代教主さまは、ある年、その夏期学級の記念品として、ご染筆の色紙をお下げになったことがあって、そこには『朝夕のお祈り はきものの始末』とお書きになったんだ。で、四代さまは、『その二点がきちんと身につけたいへん結構だと思います』とおっしゃっていたんだ。朝夕のお祈りは基本。そして夏期学級での目標の一つとして、履物の始末ができるようになれば、それで十分だともおっしゃっていた。あれもこれも詰め込んだら、子供はくたびれるし、嫌になるだろ。これだけを夏期学級で覚えて帰ってもらえればよいとね」

「そういえば、僕も参加した時に、履物を揃^{そろ}えるように言われていたような気がするなあ。それに、うちではお母さんがうるさかったから…って、あれはおじいちゃんのことだったんだね」

大地は今更ながら納得した。

「作法を堅苦しいと思う人もあるようだけど、履物を揃^{そろ}えるということは、自分の足をよく見て確かめ、身近なことに気を付け省みるということだからな」

「脚下照顧だね」

「脚下照顧は、もともと禅語…禅宗の言葉で、鎌倉時代の禅僧が弟子から禅の極意を

問われて答えた「脚下を照顧せよ」という言葉が元になっているらしいな。

脚下は足元のこと、照顧は照らし顧みるということ。つまり自分の行いを省みることから、己の心、精神を省みるということなんだ」

…そうか、照顧の「顧」も「かえりみる」と読むのか。反省の「省みる」という字と同じ意味ということなんだ。

と、大地は心の中で思いながら、真剣な表情で「なるほどね」と頷いた。

「それに、三代教主さまがご自身の座右の銘になさっていたということで、大本でも大切なお示しになっているわけだ」

「一霊四魂の一霊…直日みたまの霊のもつとも大切な「省みる」という働きなんだよね」

「そうだな。よく覚えていたな」

松太郎は目を細めた。

「禅寺などに行くと、よく玄関やトイレに『脚下照顧』と書いた紙が貼ってあることがあるんだ」

「なるほど、履物を脱いだり履き替えたりする場所だからだね」

「そうだな、足元を見なさい、履物を揃そろえなさい、という標語のようにして貼ってあ

るんだろ。うな。

でも、お寺は神聖な場所ということと同時に、お坊さんたちの修行の場でもあるだろう。だからいつも、掃除や整理整頓が行き届いたきれいな状態を保つことも、お坊さんたちの修行ということだ。その一つに脚下照顧があつて、履物の脱ぎ方に、その人の精神状態が現れるし、きちんと整える行為が、自分の心を見つめる修行につながるということだな」

「講座の中で講師の先生が、玄関を上がり振り返つて見る靴に、今の自分の姿があるのです」つて言つていたけど、そういうことなんだね。なんだか深い話だね」

松太郎も黙つて頷いた。

「脚下照顧は大本の教風の一つ。これを大本の信徒全てが、日常的にできるようにすれば、それだけでもたいしたものだけだな」

「やつぱり、たかが、履物の始末、されど、履物の始末」だね」
「そうだな」

松太郎は大地の真剣な表情を見て、わが意を得たりと思つた。
傍にいたともも、やさしくほほ笑んでいた。

前世の記憶

「この刺身、おいしいね」

大地は一切れ箸でつまみ口に運んだ。

「やっぱり長野より新鮮だね」

「綾部はまだ海が近いから、鮮度はいいはずだな」

「おじいちゃん、この魚は何？」

「それはカンパチ、うまいだろ。おじいちゃんも好きなんだよ」

「へえ、カンパチって言うんだ」

「取れたてを切り身で買って、冷蔵庫で寝かして旨味^{うま}を引き出すんだ。大地が来るからって、一昨日ちようど舞鶴まで行っただんで、知り合いの魚屋から買っておいただよ」

松太郎が自慢げに言った。

「え、そうなの、ありがとうございます」

「大地、ドンドン食べてよ。まだあるからたくさん食べて帰ってもらわないとね」

「おばあちゃん、ありがとう。しっかりいただきます」

大地は何度も刺身に箸をのばした。

「そうだ、さつき丸山さんと会ったときに、別れ際にお土産をいただいたんだ」

松太郎はそう言って、冷蔵庫に入れていた小瓶をとにも取ってもらった。

「これこれ、北海道の山わさび。長野はワサビの産地だけど、この山わさびもいけるぞ。まろやかな辛味で、刺身に合うんだ」

「へへ、珍しいものだね」

「これは、焼き魚や肉類にも合うんだよ」

「そうなの？」

大地はたまりしうゆにつけたカンパチの上に山わさびを少しのせ、口に放り込んだ。

「ホントだ、おいしいね」

「丸山さんに感謝だな」

「そうだね。丸山さんには本当にお世話になったんだよ。とても面白い人だしね」

おいしい料理は“笑顔をつくる”というが、今夜も楽しい時間になった。久しぶりに飲んだビールが、会話の潤滑剤にもなった。

大地が話を変えた。

「おじいちゃん、大本では霊界のことを詳しく教えているじゃない。まだ僕にはよく分からないけど、なんかすごいよね」

「そうだな。聖師さまは霊界のことを事細かに説かれているからなあ」

「それに、大本の人って、霊的な体験をしている人が多いんじゃないの」

「どうしてそう思うんだ？」

松太郎は興味ありげに訊いた。

「修行の三日目の夜だったかな、座談会でそんな話がいくつもあつたんだよ。面白かったなあ」

「ほー、どんな話だい？」

あのね…、と大地は座談会での話を思い出しながら二人に伝えた。いずれも子供の前世に関わる興味深い話だった。

一つは、熊本から参加していた古竹奈瑞菜^{なずな}の体験で、大地はそれを再現するように語った。

古竹は、とってもかわいい話なんですよ、と前置きし、うれしそうな表情で話し始

めた。

「今、小学一年生の息子がいるんですけどね。その子が二歳くらいのころだったかな。何かおしゃべりをしているとき急に、『ボクね、お空の上からお母さんを見ていたんだよ。でね、この人、かわいいなあと思って、お母さんのところに来たんだよ』って。ね、かわいいでしょ」

古竹は満面の笑顔になった。

「わあ、本当にかわいいお話ですね」

「それは面白い話だな」

聞いていた誰もが驚いたが、それでいてほほ笑ましい体験談でもあった。

「おじいちゃん、この話って、子供が親を選んで産まれてきているってことでしょうか？
よく、子供は親を選べないから、って不足を言う人の話を聞くけど、そうじゃないかもしれないね。僕もちよつとびつくりしたんだよ」

「そうだな、大本では生まれてくる子供は、その両親と何かしらの因縁があつてこの世に誕生すると教えられているからなあ。それに三歳くらいまでは、前世の記憶がすすかに残っているらしいな。今の話の子も、たぶん前世の記憶の一部を憶おもえていたん

だらうな」

「そうなんだよ。古竹さんは息子さんが三歳を過ぎたころに、もう一度同じ話を訊きうとしたら、僕知らないよ、って素っ気ない返事だったらしいよ」

「なるほどね、やつぱり忘れてしまっうんだな。ん、待てよ、大地のお母さんも似たような話をしてなかったかな？　なあ」

松太郎はともに訊きいた。

「ああ、ありましたね。あれは大地のことじゃなかった？」

「そうだ、大地の話だ」

「えっ、僕の手？」

「そうそう、確か大地が五歳くらいの時だと言ってたね。家族で水族館に行つて、水槽の魚を見ていた大地が、突然お母さんに向かつて、『ボクもね、お母さんのおなかにいる時は、泳いだり、丸い船に乗ったりしていたんだよ』と言ったんだってね。両親とも、びっくりしたってね」

ともが思い出しながら言った。

「えー、ホントに？　そんな話、初めて聞いたよ」

「おや、そうかい。お母さんも忘れているのかも」

ともは首をかしげた。

「そういえば、大地のお父さんは、しばらくしてから、その水族館のことをもう一度大地に訊いたらしいね」

「で…」

「やっぱり、シラナイ、って言っていたらしい」

「僕は、まったく記憶にございません」

「ま、そうだろうな。普通、前世の記憶は産道を出る時の苦しみで忘れてしまうというからね」

「そうなの？」

「実際、生まれた直後の赤ん坊は、顔面も体も真っ青で、羊水を吸いだして顔色がパッとピンク色に変わって初めて『オギャー』って産声を上げるからね。相当苦しいんだと思うよ」

「なるほど、その苦しさで、前世の記憶がなくなるってことなんだね。ん？　じゃあ、産道を通らず、帝王切開で生まれてきた場合はどうなの？」

「それはまだ実証してないので、分からないんだけどな。でも、帝王切開は…、それはそれとして赤ん坊にとっても大変な苦勞なんじゃないかな。まあ、赤ちゃんに訊いたことはないけどね」

松太郎は苦笑いしながら答えた。

「そうだろうね」

「でも、誰だったか二歳児くらいを持つ信者さんのお父さんに訊いたことがあつただけだな。子供が時々、部屋の天井の隅の方をジッと見つめていて、何か実際に見えているような表情をすることがあるんだと。その子は帝王切開で生まれてきた子だと言っていたな」

「そんな子もいるんだね」

「それは実はあまり珍しいことじゃなくて、普通の親は、そんなことに気が付かないだけかもしれないよ」

「なるほど、そうかもしれないね」

大地は頷いた。

「あつ、そうそう、さっきの座談会の続きだけどね…」

大地は、もう一つ面白い話があった、と話した。

それは宮崎から受講していた梯^{かけはし}洋子の体験談だった。古竹の長男同様、二歳くらいの時に、生まれる前の記憶を母親に語ったという。

その子も、空の上から出生先のことを眺めていて、その時の記憶を母親に話している。それが何ともユニークであった。

梯の娘は、やはり生まれる先の家を選んできたという。一方はお金持ちの家で、そこへ生まれることもできた。しかし、そちらを選ばず、貧乏だけ何だか面白そうだったからという理由で、もう一方の家を選んで生まれてきた。それが梯家だったというのである。

そして、梯自身も娘の出産前に不思議な体験をしていた。

梯によるとこうである。

「子供がおなかにいる時に、名前を何にしようかと何日も迷っていました。そんなある夜、奇妙な夢を見たんです。夢の中に三つ編みの女の子が現れて『かな』にしてください、と頼まれたんです。

翌日、主人にその夢のことを話して、子供の名前を『かな』に決めました。ただ、

どんな漢字を使うかを決めあぐねていました。

するとまた夢に同じ女の子が出てきて、^{しおり}「葉」と菜の花の「菜」にしてほしいと言ってきたんです。

私は「葉」と「菜」で「かな」と読むとは思っていなかったの、目が覚めてから漢和辞典で調べてみました。すると「葉」は「かん」とも読むことを初めて知りました」

「それで梯さん夫妻は、夢の中で言われたように、娘さんの名前を「葉菜」にしたんだって」

「ほー、それは面白い話だ」

「ほんとにね。でも、自分で生まれる先と名前まで決めて生まれてくるなんてね。きつとその子には、大切なご用があるんでしょうね」

とても感心した様子で言った。

「でしょ。でもね、まだ続きがあるんだよ。その葉菜ちゃんがまだ小さい時に、両親と大道場修行に来たんだって。その時にある外国人の親子と会ったらしいんだね。す

ると栞菜ちゃんは、外国人の同年代くらいの女の子を見つけると、何の言葉を交わすでもなく、いきなり抱き合ったんだって。

それでその親子と話をしているうちに、その子も栞菜ちゃんと同じように、母親の夢の中で言った名前を付けたことが分かって、お互いにびっくりした……という話だったんだよ」

「それもまた興味深い話だな。大地、講座以外にも、たくさんの学びをいただいたようだな」

松太郎は、大地のグラスにビールをつぎ足した。

「はい、おかげさまで」

大地は、手にしたビールを飲み干した。

情けは人のためならず

「あゝ、うまいっ！」

「大地、飲みっぷりがいいな」

「普段はあまり飲まないけど、今日は調子良いみたい。修行が終わったからかな？」

「そうだろうな、やけに冗舌だぞ」

「お酒を飲むと、いつもよりよく舌が回るような気がするんだよ」

大地はおいしい調子が上がってきたようである。

「でも、顔が真っ赤だね」

ともが心配げに言った。

「僕ね、飲むとすぐに顔が赤くなるんだよ。だから周りも遠慮して、あまり勧めないんだ」

「その方がいいかもね」

「そうなんだ。まあ、もともとあまり強くないけどね。でもお酒の場の雰囲気は好きなんだ」

「こんなジジ・ババ相手じゃつまらんだろうがね」

「何をおっしゃいます。今日はこんな機会をいただけて、僕はとっても嬉しいんだよ。ありがたいなあ〜」

「そうかい、それは嬉しいねえ」

松太郎とともは、孫とのひとときを心ゆくまで楽しんでいようであった。大地もいつになく酒が進み、ほろ酔い気分になってきた。

「おじいちゃん、話は変わるけど、情けは人のためならず……って言うじゃない」

「ああ」

「これって、よく意味を間違えて、誤った使い方をしている人がいるっていうでしょ」

「そうだな」

松太郎が頷いた。

「実は僕も小学校の時に、意味を間違えて憶えていたんだよ。で、中学生になって友達に笑われてしまってたね。あれは恥ずかしかったなあ。でも、本当の意味を教えてください。友達がいって、それから胸を張って使えるようになったんだけどね」

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥……とも言ってた。分からないことは、恥ずかしがらず人に訊くのが一番じゃよ」

「だよね。それでね、その『情けは人のためならず』ってことの実例を聞いたんだよね」
「ほう、道場講座でかい？」

ともが興味深げに聞いた。

「一緒に受講した人から聞いたんだ。この話がとっても面白かったんだよ」
大地は楽しそうに話した。

ちなみに、文化庁が平成二十二年に行った「国語に関する世論調査」でも、「情けは人のためならず」の正しい意味を答えられたのは約四十七%という結果だったというから、日本人の約半数は間違っているという結果も興味深い。

「情けは人のためならず」という格言は、『武士道』の著者で、旧五千円札にも描かれた新渡戸稲造（にとべ）が作った詩の一部分から引用されたものといわれていて、原文は大正四年発売で、人生に役立つ言葉が三百六十六日分示された書籍『一日一言』にも登場してくる。

全文は以下の通り。

施せし

情は人の為ならず^{なさけ ため}

おのがころの

慰めと知れ

我れ人に^わ

かけし恵は忘れても^{めぐみ}

人の恩をば

ながく忘るな

この原文からすると、情けは他人のためではなく、自分の心の慰めにもなり、見返りを求めるものではない。だから自分が他人に与えた良いことは忘れてもかまわない。でも、人から受けた恩は決して忘れてはいけません、という意味のようである。

一般の辞書に載っている「人に対して情けをかけておけば、それが巡り巡ってまた自分にもよい報いが返ってくる」というのは、新渡戸稲造の詩を元として、教訓になるように分かりやすく改変されたものなのかもしれない。

「でね、おじいちゃん、情けは人のためならず」を地で行くような恩返しの話でね、さっきの話題の中でも紹介した古竹さんのお母さんの体験談なんだよ」

「ほう、どんな話かな」

ともが大地の顔をのぞき込んだ。

「古竹さんの実家は、熊本の田舎だって言っていたけど、お母さんはきれい好きで、よく家の前の掃き掃除をしていたらしいね。ちょうど近所にある小学校の登下校時間ころに掃除していたらしい。で、田舎のことだから、家の前を通る小学生は、元氣よくあいさつしていくらしいんだよ」

「はいはい、ここらでも昔はそうだったね」

「そうなの？ 今は？」

「あいさつする子もいるけど、昔よりは少なくなっただけかなあ？」

ともが言った。

「まあ、ここも田舎だけど、この間用事で北の宮津の方へ行った時、道を歩いているとすれ違いざまに、地元の小学生が大きな声で“こんにちは”って言うてくれてね。わしもびっくりして、あいさつを返したけど、気持ちが良かったね。こう、心がすがすが

しくなるっていうか、ほっこりしたね」

「そうなんだ。でね、古竹さんのお母さんもよく子供たちに、いつてらっしゃい、おかえり、と声を掛けていたんだって。

それで時々、下校時間に急に雨が降りだして家の前を濡れながら歩いている小学生がいると、古竹さんのお母さんは見かねて傘を貸していたんだって。その時は、いつも「古い傘だから返さなくてもいいよ」って言うてね。でも、みんな律義で、後で必ず返しに来ていたらしいね」

「その古竹さんのお母さんは、子供たちの家のことを知っておられたのかね」

「さあ、どうだろ。話の内容からすると、知らない子もいたようだったなあ。そんな子が何人かいたらしいね。で、ある一人の小学生が、古竹のおばさんが傘を貸してくれたことをとっても喜んで、家に帰ってから、母親にうれしそうに話していた、ということが後で分かったんだね」

「ほう」

松太郎とともに、笑顔で頷いた。

「それから三十年近くたってからの話なんだけどね」

大地は、ビールを一口飲んで、テーブルに置き、口元を手で拭った。

「何、そんな前の話だったのかい」

「そうなんだよ。古竹さんのお母さんは、九十歳近くになられて、最近になってデイサービスを利用するようになったんだって。するとね、担当のケアマネージャーさんが、確か吉川さんって言ったかな…、その吉川さんが、古竹さんのお母さんに、仕事以上にとっても親切にしてくれるんだって、満面の笑顔でね。どうしてかなあ…って古竹さんが思っていると、吉川さんから思いがけないことを言われたわけ。

「その節は息子がとってもお世話になりました」とお礼を言われたんだって。古竹さんは最初、何のことだか分からなかったんだね。それでよくよく聞いてみたら、吉川さんは、かつて雨の日、古竹さんのお母さんが、傘を貸した小学生の母親だったんだって」

「へえ」

松太郎は、驚いた。

「あの当時、学校から帰ってきた息子は、それはそれは喜んでいて、その嬉し^{うれ}いそうな息子の様子が強く印象に残っていたんです」、って吉川さんは、とても感謝されていたそうだよ。だから、古竹さんのお母さんは今デイサービスで、その恩返しを受けてい

るそうで、古竹さんはとてもありがたい話だと、みんなに紹介してくれたんだよ」

「三十年もたつてねえ…、すごい話だね」

ともが感心した様子で言った。

「古竹さんがお母さんにその当時のことを聞くと、お母さんは忘れてしまっていたよ
うだけど、しばらくして思い出されたみたい。で、古竹さんはその当時、自分の子が
もし雨に濡れていたらと思うと居ても立ってもいられない思いになって親切にしてい
たそうだよ」

「その親切心が、小学生にとつても、その子のお母さんにとつても、忘れられないほ
どの良い思い出だったんだね」

「吉川さんは、職場で古竹さんの苗字と住所を聞いて、懐かしい思い出がよみがえつ
てきたんだろうね。でも、そんな巡り合わせがあること自体が不思議だし、そのこと
をずっと憶おぼえておられたことも、とつても尊いことだと、僕は感動しちゃったなあ」

「いい話だ。聞かせてもらっただけで、私らも心があつたかくなつたよ」

「ほんとだね」

松太郎とともが、しみじみと言った。

「情けは人のためならず…の実践だ」

「ほんと、そうだね」

「そういえば、尊師さまの『信仰覚書』の中に、『施した恩は忘れてしまえ。受けた恩は忘れるな』っていうお言葉があるな」

「ん、なるほど。おじいちゃん、まさにそのお示し通りだね。」

古竹さんのお母さんは、施した恩を忘れてしまっていたけど、吉川さんは受けた恩、しかも息子が受けた恩を忘れずに、ずっと心に持っていたんだから、立派だよね。

『施した恩は忘れてしまえ。受けた恩は忘れるな』…か。尊師さまのお言葉は、分かりやすく、心にストンと落ちるね」

大地はお示しをかみしめるようにつぶやいた。

「大地は、たくさんおかげをいただいたようですね」

ともが松太郎に言った。

「そうだな、ありがたいことだ」

松太郎は目を細め、大地のグラスにビールを継ぎ足した。

(続く)

目に物見せられて

「もう十分いただいたなあ」

グラスに溢れそうになったビールを一口飲み、大地も松太郎に勧めた。

「そろそろ日本酒にするか」

松太郎が独り言のように言うのと、ともに阿吽の呼吸で台所に行き、しばらくして冷酒を持ってきた。

：おばあちゃんはずいなあゝ、ちゃんとおじいちゃんのことを分かっているんだ。わが家だったらこの場合、お母さんはたぶん聞こえないふりするんじゃないかな…。いや、お父さんなら自分で取りにいくか。

と、二組の夫婦を比べながら、大地は一人ほくそ笑んだ。

ともに丸盆に氷ポケットのついたガラス徳利と、ガラスの杯、ぐい呑みを二つずつ乗せ、松太郎のそばに置いた。

「ありがとう。さあ、大地もどうぞ…」

「いえいえ、つがせてください」

松太郎の言葉をさえぎるように大地は手を伸ばし、先に徳利^{とっくり}を取って松太郎に酒を勧めた。

「そうか、じゃあ」

松太郎は嬉し^{うれ}そうに、備前焼のぐい呑^{のみ}みを手にした。大地は徳利^{とっくり}から慎重に酒をついだ。松太郎は一口飲み、満足^{うなず}そうに頷いた。

「さあ、大地も一杯」

「ん、じゃあ、ちよつとだけ」

「大地はこっちのガラスの杯の方がいいかな」

「では…」

大地が円錐型の上品なガラス杯を選ぶと、松太郎はなみなみと酒をついだ。大地はゆつくりと杯に口を近づけ、すするように日本酒を口に含んだ。

「おつ、おいしい！」

芳醇^{ほうじゆん}な香りで、まったりとした深みとフルーティな味が口の中に広がった。

「うまいだろう、これは奈良の有名な酒蔵の純米大吟醸だからな」

「そうなんだね。僕は日本酒のことはあまり分らないけど、濃厚でおいしいね。でもあまり飲むと一気に酔いそうだな」

「まあ、チビチビと…」

「大地、あまり無理はしないでよ」

ともが優しく言った。

大地がぐい呑みに酒をつぎ足すと、松太郎はゆつくりと味わった。

「毎日元気で、おいしくお酒をいただけるっていうのは、おかげだなあ」

松太郎がしみじみと言った。その表情を見ると、大地も自然と笑みがこぼれた。

「おかげと言えば、大本ではたくさんのおかげ話があるそうだね」

大地が訊ねた。

「そうだねえ、大本の信者さんたちはそれぞれにたくさんのおかけをいただいていると思うなあ」

「ねえ、どんなのがあるの？」

「そうだな…」

松太郎は印象に残っているご神徳談を思い出そうとしている様子で、目を閉じて日本酒を飲み干し、ぐい呑みをテーブルに置いた。

「そうそう、この話は大本の昔の機関誌で読んだご神徳談だけだな、面白くて印象に

残っているんだ」

「へえ、どんな話？」

「ある人が、大本に入信する動機となつた話なんだ。ご神諭の一節に、『天地に神があるかないかを明白に解^{あきら}けて見せて…』とあるんだけど、それを実証するような体験談だな」

「あの、わけてみせる…つて、何かを分割するつてこと？」

「あつ、いやそうじゃないんだ。『解^わけて見せる』というのは、人々に分からせてやる…ということ。つまり、この世界に神さまが存在するか、しないかということを、人々にはつきりと分からせてやるぞ、ということだよ」

「なるほど。そうかなあ…とは思つたんだけど、さっきおじいちゃんから、『聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥^{いつとき}…』つて教えてもらったので、質問しました」

「ん、それでいいんだ」

「はい」

「その青年は公務員で、以前から『神なんかあるものか』という、いわゆる無神論者、

唯物論者で、物質一辺倒の思想の持ち主だったんだね。まあ、ほとんど信仰とは無縁の人ということだ。それが、ある出来事からコロツと変わったという話なんだよ」

「へえ」

「青年は事情があつて、ある家に養子に入ったんだね。養家の両親は、いたつて真面目な夫婦で、しかも古くからの熱心な大本の信者さんだった。まあ、そのひたむきな信仰ぶりは、当時の現代教育を受けた青年にとっては、まったくの“迷信”としか映らなかったらしいね。

昔のことだから、その家には、日常的に信者さんたちが出入りしていて、みんな素直な良い人ばかりだったんだけど、青年の目には、何だか世間離れしたような非常識な人たちに見えて、何というか、不愉快さを感じていたらしいね」

「ちよつと分かるような気がする」

「そうかい？　だから、当時の無信仰の青年にとって、その家の雰囲気は耐えがたくて、そこにいること自体が苦痛だったんだね。でも、養子という立場だったから、卒直に反抗できず、一人悶々とした日々を送っていたわけだよ」

「かわいそうにね」

大地はビールを一口飲んだ。

「ある夜、青年はたまりかねて、その家のご神前に行つて、神床の前に仁王立ちになり、神さまに向かつて文句を言つたんだ」

「え、おじいちゃん、その人は神さまを認めてなかったわけでしょ。なのに、何で神さまに文句が言えたんだらうね」

「おつ、確かにそうだな」

松太郎は少し考えて答えた。

「おそろく、神さま…というより、物質である大神さまのお宮に対して、思いをぶちまけたんだらう…な」

「なるほど。で、何て言つたの？」

「ッ、バカ神、なんだ人をだましやがつて、神なんか性根しやうねがあるのか、性根しやうねがあるなら俺の前に出て来てみろ！ ほら、出てこれないだらうが、バカヤロー！」 って、怒鳴りつけたんだ」

「性根しやうねって？」

「根性こんせいってことかな。本当に神かみっているのか？ いるならその証拠を見せろ、出てきてみろ…ってことだ」

「なるほどね、そうやってストレス発散したんだね」

「まあ、そんなところだな。神さまをののしって、たまっていたうつぷんを晴らしたわけだ。それでスッキリして床に入ったんだね」

「ぐっすり眠れたらうね」

「ここからは、夢の中の話だ。しばらくすると青年の前に、ずいぶんと大きな、しかも威厳に満ちた一人の翁おきなが現れたんだ」

「翁？」

「立派なおじいさんってとこかな」

「なるほど、年寄りの巨人」

「ちようど大きなワシがスズメでもつかみ上げるように、青年はその巨人に片方の腕をつかまれて、グイッと中空につり上げられた。それから腕を持たれたまま勢いよく振り回された。こんなふうだね」

松太郎は、そばにあったタオルを持って、それを頭の上で振り回して見せた。

「青年は、急速度で円形を描きながらブンブンと回されたものだからたまらない。だんだんスピードアップして、もし手を離されたら、どこに吹っ飛んでいくか分からない」

い状況になってきたんだね。

青年は目も開けられず、口もきけない苦しさで、まったくたえようのない恐怖に襲われたんだ。だからもう、無我夢中で、ごめんなさい！ お許しください、助けてください” って、もう一心不乱に念じたんだな」

松太郎はまるで見てきたかのように、情景を説明したあと、手にしていたタオルで額と首筋の汗を拭った。

「苦しい時の神頼みってやつかな」

大地は苦笑いしながら言った。

「まあ、巨人に振り回されているんだから、まさに切羽詰まった”祈り”だな」

「それで…」

「もうダメだ、息も切れそうだ…と諦めかけた瞬間、青年は大きな岩の上に降ろされたんだ。

ヤレヤレと思った途端に目が覚め、気が付くと自分の布団の上にうつ伏せになって、全身汗びっしょりで、泣いていたというんだね。

そして、アア、何という恐ろしい目にあつたのだ。神さまはいるんだ、いや、いらっ

しゃるんだ”と反省したそうだ。

そしてもう一つビックリ。自分の布団の周りを見たら、汗がまるで水をまいたように円形に飛び散っていたというんだよ。不思議だろう」

「えゝつ、それじゃ、本当に振り回されたみたいに汗が飛び散っていたってことなの？」

「そう」

「へえゝ、不思議な話だね」

「だから、青年は二度ビックリして、神さまがいらっしゃるということを、身をもつて体験したわけだね。だから頑固な無神論も唯物主義もいつぺんに吹っ飛んで、青年は神の実在を認め、それから絶対の信仰をするようになった…という話なんだよ」

「目に物見せられたって感じだね。それにしても面白い話だなあ」

大地は感心しながら、杯を空けた。

「神さまの存在を認めるきっかけは、人によっていろいろ違うと思うけど、このおかげ話のように、強烈なインパクトを受けて信仰に入る人もいるんだな。

“おほもとしんゆ”の中に、

『人民は実地に、目に物を見せてやらねば改心が出来ず、実地が在りては成らず、是
には神も閉口いたすぞよ』(明治四十二年旧十月二十九日)

という一節があるんだが、まさにお示しのままのご神徳談だな
「そうだね」

大地は大きく頷きながら、松太郎のぐい呑みに酒をついだ。

お土とお松

「大地、そろそろご飯はどう？」

ともが訊いた。

「そうだね、少し頂きます。おじいちゃんは？」

「ん…」

「おじいちゃんは、お米のエキスを飲んでゐるから、食べなくても大丈夫なのよ」
ともが笑顔でささやきながら台所へ向かった。

「この年だから、飲んだらご飯は食べない習慣になつていてなあ」
松太郎がぐい呑みを顔の正面でささげるようにしながら言った。

「へえ、そうなんだね」

「大地のお父さんは、どうだい？」

「僕のお父さんは、飲んだ後も、しっかりご飯を食べてゐるかな。もっとも普段は、
そんなにお酒を飲まないけどね」

「そうかい、それは良いことだ」

松太郎が冷酒を飲み干すのを見て、大地はすぐにガラス徳利とっくりに手を伸ばした。

「あつ、もうないかも」

顔のそばで徳利とっくりを振りながら言った。

「そうかい。おゝい」

松太郎が台所に向かつて声を掛けた。

「おじいちゃん、僕が取ってくるよ」

大地は徳利とっくりを手には台所へ入った。

「おばあちゃん、お酒の追加をお願いします」

「おや、すまないね。冷蔵庫の一番下に入っているんだよ」

ご飯をよそっていたともが、振り向きながら言った。

「あ、これかな」

「そうそう」

大地は四合瓶を取り出し、冷酒を徳利とっくりに満たし、リビングに戻った。

「はい、おじいちゃん」

「おつ、ありがとう」

大地は松太郎のぐい呑みに冷酒をついだ。程なく、ともが飯わんと漬物を大地の前

に置いた。

「うわあ、おいしそう。いただきます」

添えられたキュウリのつくだ煮をつまみながら一口食べた。

「ん、おいしい。これ、おばあちゃんが作ったの？」

「そうだよ。裏の畑で採れたキュウリでね」

「キュウリの歯ごたえと、ゴマと昆布の風味が絶妙だね」

「塩昆布がいいアクセントになるんだ」

松太郎が自慢げに言った。

「これは、ご飯が進むね」

「たくさん作ったから、お土産に持って帰ったらいいよ」

ともが笑顔で言った。

「うれしい、ありがとう。お母さんもきつと喜ぶよ。それからこの梅干し、しっかりと酸っぱいけど旨味うまがあつて、最高だね」

「そうかい。これは去年漬けたものだけど、上出来だと思うよ。今年もようやく土用干しが終わったところでね。これも少し持って帰るかい？」

「え、梅干しもいいの、うれしいなあ。僕もちあき（妹）も大好物なんだよ。でも、司（弟）

は、まったく駄目なんだ」

「おや、司君は食べないのかい」

「そうなんだ、なぜか全然食べないんだよ。シソの“ゆかり”すら、駄目なんだ」

「あらそう、残念だね。“ゆかり”も持たせようと思ったんだけどね」

「おばあちゃん、大丈夫。僕とちあきは大好きだから、頂きますす！」

笑顔の大地を見て、ともは嬉し^{うれ}そうに頷^{うなず}いた。

大盛りだな…と思ったご飯も、つくだ煮のおかげであつという間に完食。大地は満足げな顔になった。

「あゝ、おいしかった」

「はい、お松茶」

「あゝこれね、大道場修行の時も講座室の横にいつでも飲めるように置いてあつて、休憩の時に頂いていたよ。最初はなじめないかなと思ったんだけど、すぐに慣れて、飲んでいると何となくスッキリした気分になったなあ」

「そうかい、本部のお松茶と同じ味になっているかは分からないけど、体に良いのは確かだからね。私たちも毎日頂いているんだよ。」

もともと松は、薬用植物でもあつて、血をきれいにして、リラックス効果もあるんだつて。若い大地には関係ないけど、高血圧や老化防止にもいいそうよ」

「そうなんだね。道場の係の人に聞いたけど、大本では、お土とお松を大切にしているんだよね」

「そうだよ。開祖さまは大本の開教のころに、『この大本は、お土とお松で開いてくだされよ』と厳しくお諭しになったんだ」

「ん…、おじいちゃん、それどういうこと?」

「そうだな、ピンときにくいの無理ないなあ。でも、お土とお松で開く」というのは、究極の例えと言えるかもしれないな」

松太郎は自身で納得するような表情で話を続けた。

「大地、今、この地球上のあちこちで環境破壊が進んでいるのは分かるよね。それも人間が原因している」

「うん、地球温暖化も、人間の飽くなき経済優先主義から自然を破壊していることに始まっているというのは、知識としては知っているよ」

「その自然が壊され続けて、もしこの大地がなくなり、土の上に人が立つことができ

なくなったらどうなるかなあ？ 大地もよく考えてごらん、踏みしめている土があるからこそ、そこに立っていることができるよね」

「そうだね。僕も土の上に立っている」

「大地が『大地』の上に立っている……ってことだ」

松太郎が笑いながら言った。

「あはは……まあそうだね、って、おやじギャグ？」

大地が苦笑いした。

「つまり、もし、この大地……お土がなければ、人は居場所がないわけだ。家も建てられない。空中に浮いているわけにはいかないからね。しかも踏みしめられているお土は、文句一つさえ言うことはない」

「それはそうだけど……」

「今、大地は、だって土があるのは当たり前のことだから」と思っただろう」

「うん、おじいちゃん鋭い！」

「だろう、お土はあつて当たり前、ないこと自体が考えられないわけだ。人をはじめ、多くの動植物は、地上で生活している。地上というのは地の上、言い換えれば土の上だ。

土がなければ、人も動物も植物も生活する場がなく、そもそも存在自体が不可能になる。
二代さまは、

日の御恩月のお恵み土の恩

はなれて人の住むところなし

と詠まれているんだ」

「普段考えたこともなかったけど、そう言われれば確かにそうだね」

大地は大きく頷いた。

「大地、その生命の根本を支える土台である土に対して、一度でも感謝したことはあるかい？」

「えっ、……ないです」

大地は即答した。正直である。

「まあ、普通そうだな。空気があって当たり前というのと同じで、ほとんどの人は、その恩恵に気付いていないんじゃないかな」

「だと思う。そういえば、亀岡で高熊山に参拝した時、岩窟前で『靈界物語』の拝読を聞きながら鎮魂をしたけど、その中で聖師さまは衣食住の恩と同じように、空気の

大恩を感じられた、という一節があつたなあ」

「おゝ、大地はそこを憶^{おも}えていたか、大したものだ。その空気の恩、お土の恩、日と水のご恩ということは、つまり “天地のご恩” ということだな」

「じゃあ、お松というのにもそれに含まれるということなの？」

「松が代表するのが植物と考えてもいいだろうね。もちろん、草木や樹木もお土がないと育たないからね。それから、松は “常磐の松” といわれ、大本では変わらない心を象徴する “まつごころ” という言葉で表されているんだ。ほら、青年部の機関誌の名前も、そこから三代教主さまが “まつごころ” と命名されたんだよ。 “まつごころ” は、神さまに対する終生変わらない信仰心を表すともいえる。

こうやって考えていくと、天地のご恩に報いる変わらない信仰心を伝えていくこと。つまりは、まことの神さまのお道を伝えることを『お土とお松で開いてくだされよ』と示されているんじゃないかな」

「なるほど、深い意味があるんだね」

大地はお松茶を味わうように一口飲み、湯呑^{ゆぐみ}みの中をのぞいた。

「あゝ、おじいちゃん、大道場修行の時、お松茶には雌^め松を使うと聞いたんだけど、

オ・マ・ツ・でもいいの？」

「ん？」

「僕はよく分からないんだけど、松にも種類があるでしょ。例えば、雌松でなく雄松でも良いのかなって思ってたね」

「あゝ、雄松ね。おとこ松、黒松でもいいかってことだな。それなら、答えはノー。雄松は使わないんだよ。雌松、つまり赤松だけだ。大本では、神さまにお供えする立松や玉串松もすべて雌松を使うように示されているからね」

「へえゝ、駄目なんだ。どうして？」

「理由は二つ。一つは、大本の教えでは、この大地ができた時に最初に生えた植物が雌松だったこと。とても尊い木だから、松は木の公きみと書くだろ」

「確かにそうだね」

「二つ目が、雄松と雌松は、別物だから」

「えゝ、同じ松じゃないの？」

「植物の分類では同じマツだけど、聖師さまがそう示されているんだよ。

ちなみに、カラマツやトドマツ、エゾマツのように、マツと名が付きながらマツ科じゃない樹木もあるけどな」

そう言いながら松太郎は、聖師さまの以下の一節を引用しながら大地に説明した。

男松おまつと女松めまつとは種類が違ふ。男松は男松を生み、女松は女松を生む。男松にも雌雄しゆうがあり、女松にもまた雌雄がある。赤い松の中で葉が短いものは、女松の中の男松である。たいてい女松の下には松茸が生える。神様におあげするのは女松に限る。男松は、本当の松でないのである。（『水鏡』）

「ん…、そういうことなのか」

大地は頷うなずいた。

「アツ、おじいちゃん、僕の名前が大地でおじいちゃんが松太郎でしょ。ちょうどお土とお松だね」

「そうだよ。大地、今、氣付いたかい」

「そういえば、僕の名前は……」

大地が、松太郎の顔をのぞき込んだ。

信仰の絶対境

「確か、おじいちゃんが名付け親だよね」

「まあ、ね」

松太郎は、またニヤリと笑った。

「一度訊きいておきたかったんだけど、どうして『大地』って名前になったの？」
大地が身を乗り出した。

「それはな…」

松太郎はぐい呑のみをテーブルに置いて話し始めた。

「大地の出生地は、知っているだろう？」

「綾部の病院で生まれたんだよね」

「そうだな。京子が長野から帰省してきたのは、大地が生まれる一カ月くらい前だったかな。その時に、大地の両親から生まれてくる子の名前の相談があったんだよ」

「そうなんだ」

「話を聞いた時には最初遠慮したんだ。京子は雨宮家に嫁いだ身だし、夫婦二人で考えるか、雨宮のご両親にお願いした方がいいんじゃないかと言ったんだけどね。でも、

剛君（大地の父親）がぜひにと言うものだから、受けることにしたんだ」

「あの時は、教主さまにご命名のお願いをしようかとも思っただけだね」

ともが言った。

「そうだったな」

「どういうこと？」

「今、大本では、自分たちで命名した子供の名前を、教主さまにご染筆していただくことができるんだけど、大地が生まれたころは、教主さまにご命名をお願いすることができたんだ。『京子』は、三代教主さまに頂いた名前なんだよ」

「お母さんの名前はそうだったのか。で、僕の名前は？」

「雨宮家のご両親の手前、教主さまにお願いするのは遠慮して、私らで相談して決めたんだよ」

「それでしたね」

ともがうなずいた。

「大地が生まれて、病院で初めて会った時には、そりゃあ、嬉しかつたな。」

初孫の顔を見て家に帰って、畑作業をしていると、孫のかわいい顔が何度も思い浮

かんできてね。この子には、優しくてたくましい、心の広い人になつてほしいな」と思いながら耕していると、ふと「大地の金神」という言葉が浮かんできたんだ。それで、「大地がいいな」と思ったんだよ。きつとご内流だな。おばあちゃんも賛同してくれたんで、翌日、京子たちに話をしたら、二人とも喜んでくれて、「大地」に決まつたんだよ。そのあとで、「大地と松太郎」…おつ、これは「お土とお松」になるかと気付いたんだけどね」

「へー、そうだったんだ。でも僕、この名前はとても気に入っているよ」

「そうかい、ありがとう」

「こちらこそ、ありがとうございました」

松太郎は、嬉し^{うれ}そうに何度も頷^{うなず}いた。

「大地という名は、名字ともマッチしていると思うんだよ。雨宮の雨は同じアメの読みで、天国の天とも書けるだろ。天宮大地だと、天のお宮と大地…。なんだか神さまにご縁のある名前じゃないか、な、いいだろう」

「そ、そうだね」

大地は、ちよつと無理があるんじゃないか…:と思いながらも、ほろ酔いで上機嫌の

松太郎を前に、その言葉は飲み込んで、笑顔を返した。ともも同じように思ったのか、大地と目を合わせ、頭を傾けて笑った。

「おじいちゃん、別の質問だけど…」

大地が話を変えた。

「大本には『おみくじ』のようなものはないんだよね」

「ないなあ、…今は」

「今はつてことは、以前はあったの？」

「昔はあった。でも、神社にあるような一般的なおみくじじゃなくて、その人にとつてよっぽどのがあった場合、一生に一回限りということで許されていたものがあつたんだ。普通はおみくじというと、運試しのように考えている人が多いだろう」

「今日の運勢」みたいにね。恋愛運とか、金運とか、ちよつと軽い気持ちで引く人が多いかも。大凶が出たら、もう一度引き直すとか、良い結果が出るまで、何回も引くつという人もあるようだしね」

「そうだろ。それじゃあ、何にもならないな。神さまを信仰しているのであれば、そういうものに頼らず、一回でも多くご神前に向かい、自分自身で真剣に神さまにご守

護をお願いし、その上で表れた結果を素直に受け止め、感謝するのが本来の信仰の在り方だと思うんだ。困難を乗り越えて、信仰を深めるようにするのはとても大切なことだと思うよ。だから大本にはおみくじはないし、「占い」の類いもないんだよ」

「でも、占いはいけないことなのかな」

「誰でも困ったときに占ってもらって、結果が正しいならいいけど、言われた結果を安易に受け取ったり、自分流に解釈したり、ひどい場合は内容を否定したり、「あの占いはインチキだ」なんて、自分本位になってしまいう人もいるんじゃないか」

「いるいる」

「そもそも人間の“宿命”は、それぞれ先天的に持って生まれた境遇だから変えることはできない。ただし、“運命”は、自分の努力次第で無限に開拓してゆけるものだと、聖師さまがおっしゃっているんだ」

「そっか、宿命と運命は違うんだね」

大地がうなず頷いた。

「運命を占うというか、霊眼について、尊師・日出麿先生が『信仰雑話』の中で、面白い話を書いておられるんだ。

昔、お釈迦^{しゃか}さまの弟子に、とても霊眼のよく利く人がいたそうだと。この弟子が、ある王さまから自分の将来を視^みてほしいと頼まれた。

そこで弟子は、その王さまの運命を霊眼で透視したんだ。すると王さまは、いずれ某国と戦うことになる。戦況は最初、王さまの陣営が形勢不利になるけど、戦いを続けてゆけば、最後には、ある大きな河^{かわ}のほとりで大勝利を得られる…ということが霊眼に映った。

お釈迦^{しゃか}さまの弟子は、そのことを正直に王さまに申し上げた。すると王さまはそのお告げに安心して、やがて某国と戦端を開いたんだ。すると予言の通り、最初は負けていていたんだけど、ついに、ある大きな河のほとりの戦いで大勝利して、敵を散々に追い散らすことができた…というんだな」

「予言的中ってことだね」

「そこまでは…な」

「ん？」

「王さまはスツカリ調子に乗ってしまったて、よせばいいのに敵を深追いすぎたんだ。すると窮鼠猫^{きゅうそ}を囓^かむのことにわざのように、一挙に形勢が逆転。王さまは敗北してとうとう生け捕りにされ、国は滅ぼされてしまった…という話なんだ。

つまり、霊眼の名人も、王さまの運命の途中までを見ていただけで、王さまの人生の最後まででは透視することができなかったわけだ」

「なるほど、面白い話だね」

「神さまと違って、人間の力量や能力には限りがあるんだ。神さまは無限で絶対だから、その神さまから見たら人間の力なんて微々たるものなんだよ。よく『大自然の前に人間は無力だ』なんて言われるけど、自然の脅威や疫病なんかが突然に襲ってきて一線を越えたら、人間にはもうどうしようもないことがあるだろ」

「そうだね、最近では地震や台風、竜巻やゲリラ豪雨でも甚大な被害が多くなっているからね」

「だから、人間心を振り捨てて、どこまでも神さまにすがって、一切をかんながら惟神に任せて案ぜず悔いず、いつも神さまと一緒になんだという思いを強く持つて、日々感謝の心で暮らしてゆくことが大切なんだな。その上で人事を尽くす。大本では『天命を知って人事を尽くす』と教えられている。そうすることで、本当の『安心立命』が得られるんですよって、尊師さまがお示しになっているんだ」

松太郎は自分に言い聞かすように穏やかに語った。

「あの、おじいちゃん、安心立命って、どういふこと？」

大地は聞きにくそうに訊ねた。

「そうか、安心立命という言葉は、若い人はあまり使わないのかもしれないな。」

「安心」は、簡単に言うとう文字の通りで、心を安らかにすること。安心は仏教語では「あんじん」と読んで、安らぎを得て落ち着いた穏やかな心に達した究極の境地のことで、涅槃ねはんとも言うようだな。

「立命」は、元は儒教から出た言葉だけど、身を天命に任せて、どんな場合にも動じないこと。だから安心立命は宗教が目指す境地といえるんじゃないかな」

「じゃあ、物事が解決して「安心した」というのも、本当は深い意味があるんだね」

「そうかもな」

自分の話を真剣に受け止める大地を、松太郎は目を細めて見た。

「王さまの話の続きには、「信仰の絶対境」という言葉があつて、尊師さまは、とにかく理屈はやめて、遮二無二、神さまに頼りなさい。そうして信仰が進めば進むほど、神さまと人間とがいかに近い関係にあるかが分かり、神さまの絶大さをはっきり感じ

られるようになるとお示しになっているんだ」

「それが信仰の絶対的な境地ということ？」

「そうだな」

「なかなか難しそう。僕なんかどうしても理屈が先行してしまうしね」

「若い間は、それでもいいんだ。できれば大地も、無理をせず、ゆっくり信仰の道を歩いてくれたら、おじいちゃんも嬉しいいけどな。それはきっと、大地の幸せにもつながると思うよ」

「そうなのかな」

「頼むよ、大地」

ともも相槌^{あいづち}を打ちながらほほ笑んだ。

(続く)